

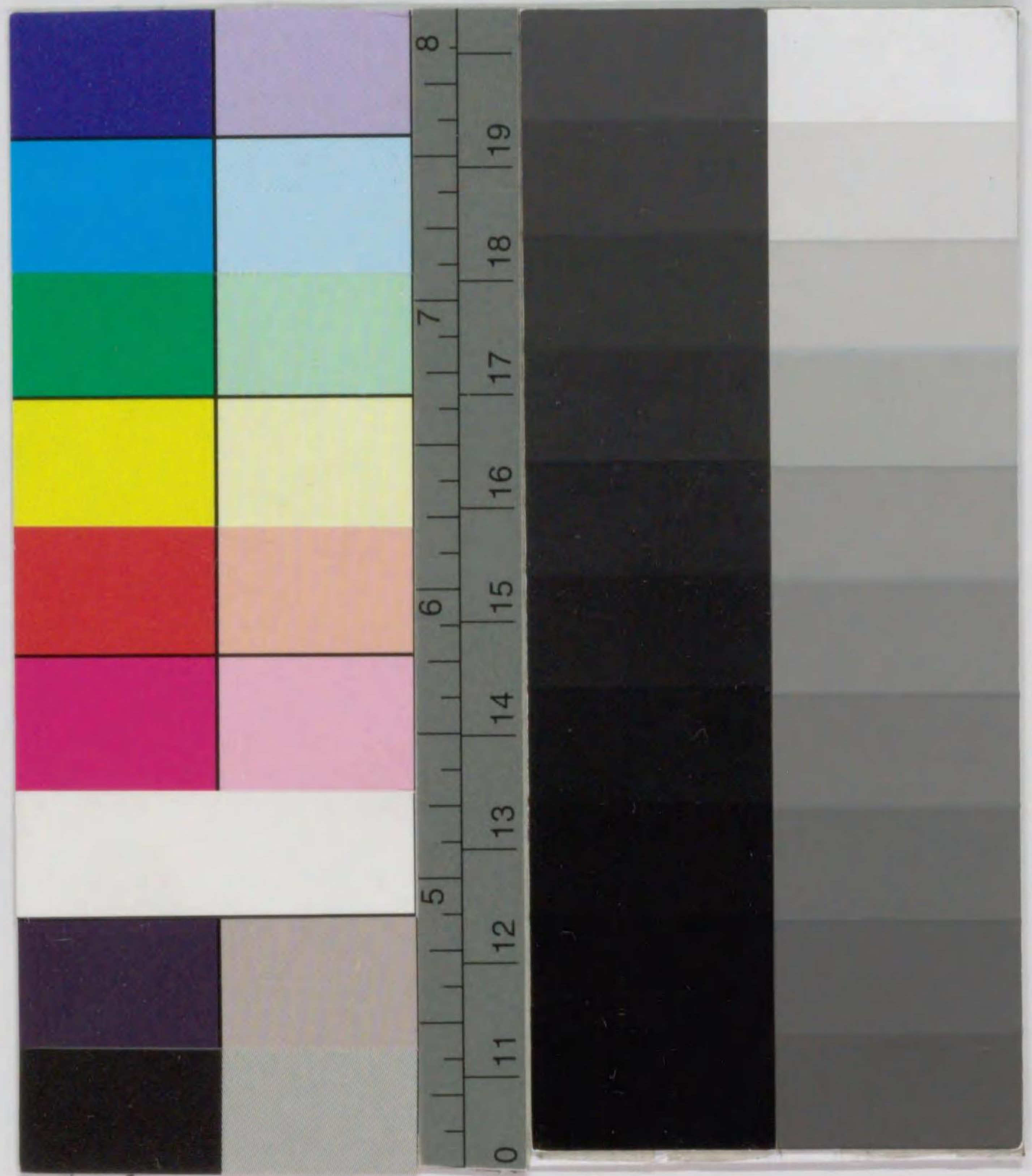
566-49

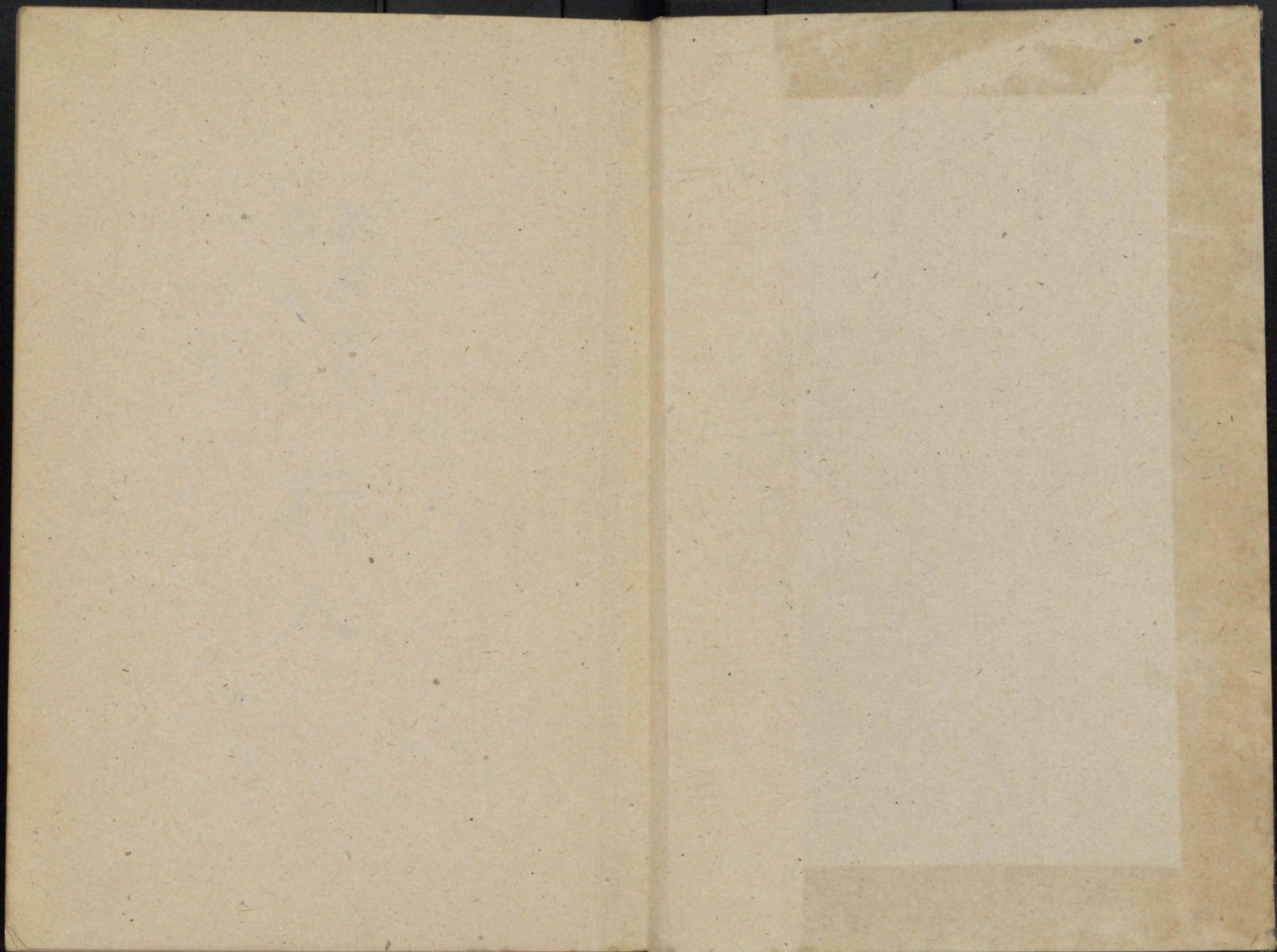


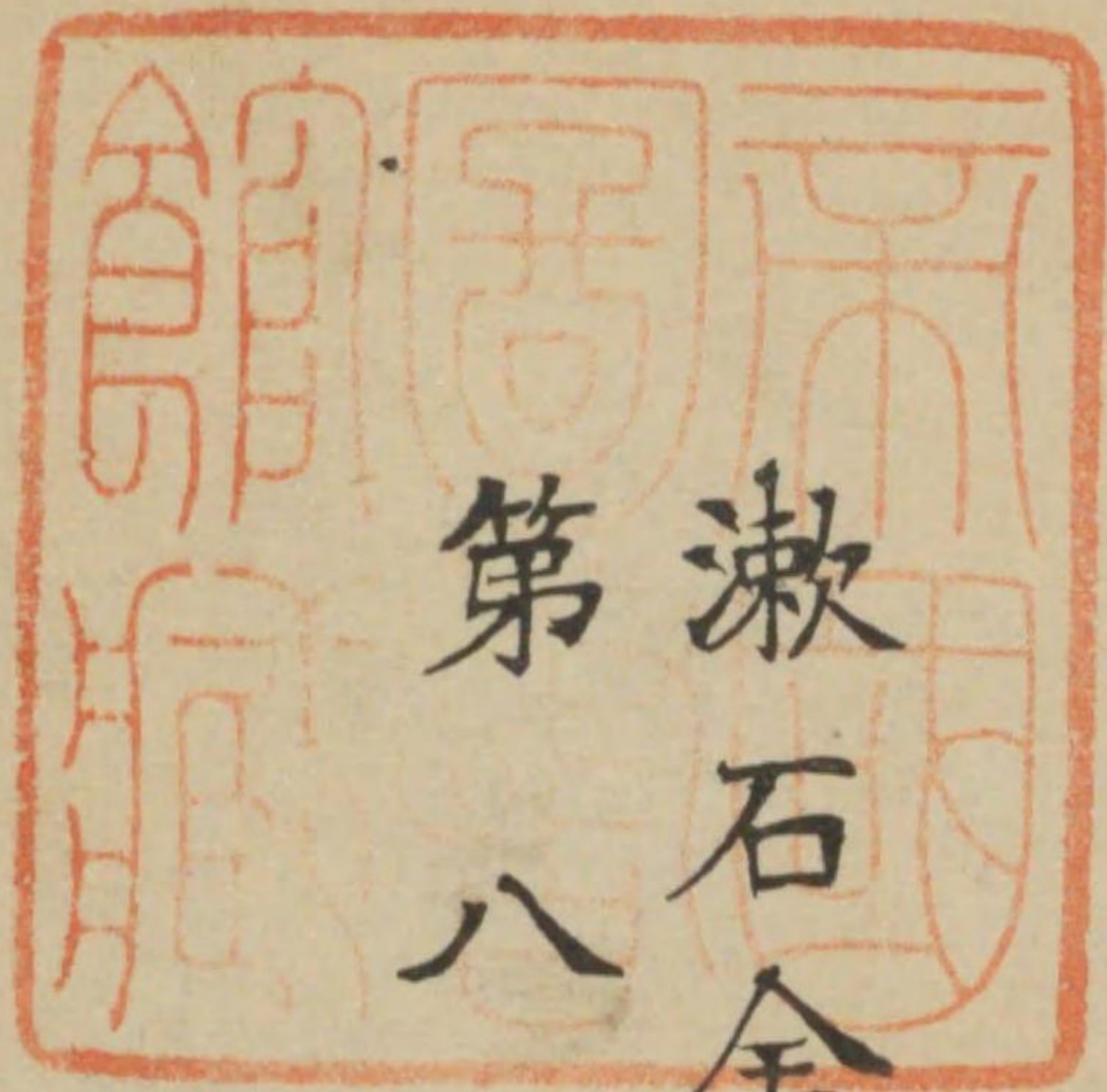
1200501514975

6

49







漱石全集
第八卷

行人





大正元年十月撮影影

566-49

行

目

次

友

達

兄

八四

歸つてから

一九七

塵

勞

二九五



87-002

行

人

一、二、三、六——二、四、七

友 達

梅田の停車場を下りるや否や自分は母から云ひ附けられた通り、すぐ俵を雇つて岡田の家に馳けさせた。岡田は母方の遠縁に當たる男であつた。自分は彼が果して母の何に當たるかを知らずに唯疎い親類とばかり覺えてゐた。

大阪へ下りるとすぐ彼を訪うたのには理由があつた。自分は此處へ来る一週間前、或友達と約束をして、今から十日以内に阪地で落ち合はう、さうして一所に高野登りを遣らう、若し時日が許すなら、伊勢から名古屋へ廻らう、と取り極めた時、何方も指定すべき場所を有たないので、自分はつい岡田の氏名と住所を自分の友達に告げたのである。

「ちや大阪へ着き次第、其處へ電話を掛ければ君の居るか居ないかは、すぐ分るんだね」と友達は別かれるとき念を押した。岡田が電話を有つてゐるかどうか、其處は自分にも甚だ怪しかつたので、もし電話

がなかつたら、電信でも郵便でも好いから、すぐ出して呉れるやうに頼んで置いた。友達は甲州線で諏訪まで行つて、夫から引き返して木曾を通つた後、大阪へ出る計畫であつた。自分は東海道を一旦に京都迄来て、其處で四五日用足し、旁逗留してから、同じ大阪の地を踏む考へであつた。

豫定の時日を京都で費やした自分は、友達の消息を一刻も早く耳にする爲に停車場を出ると共に、岡田の家を尋ねなければならなかつたのである。けれども夫はたゞ自分の便宜になる丈の、いはば私の都合に過ぎないので、先刻云つた母の云ひ附けとは丸で別物であつた。母が自分に向つて、彼方へ行つたら何より先に岡田を尋ねるやうにと、わざ／＼荷になる程大きい罐入りの菓子や、御土産だよと斷つて、鞆の中へ入れて呉れたのは、昔氣質の律儀からではあるが、其奥にもう一つ實際的の用件を控へてゐるからであつた。

自分は母と岡田が彼等の系統上どんな幹の先へ岐れて出た、どんな枝となつて、互に關係してゐるか知らない位な人間である。母から依託された用向きについても大した期待も興味もなかつた。けれども久しぶりに岡田といふ人物——落ち附いて四角な顔をしてゐる、いくら髭を欲しがつても髭の容易に生えない、しかも頭の方がそろ／＼薄くなつて来さうな、——岡田といふ人物に會ふ方の好奇心は多少動いた。岡田は今迄に所用で時々出京した。所が自分は何時も懸け違つて會ふ事が出来なかつた。従つて強く酒精に染められた彼の四角な顔も見ると機会を奪はれてゐた。自分は俵の上で指を折つて勘定して見た。岡田が居

なくなつたのは、つい此間の様でも、もう五六年になる。彼の氣にしてゐた頭も、此頃では大分危険に逼つてゐるだらうと思つて、その地の透いて見える所を想像したり抔した。

岡田の髪の毛は想像した通り薄くなつて居たが、住居は思つたよりも薩張りした新しい普請であつた。「どうも上方流で餘計な所に高塀なんか築き上げて、陰氣で困つちまひます。其代り二階はあります。一寸上がつて御覽なさい」と彼は云つた。自分は何より先に友達の事が氣になるので、斯う／＼いふ人からまだ何とも通知は来ないかと聞いた。岡田は不思議さうな顔をして、いゝえと答へた。

自分は岡田に連れられて二階へ上がつて見た。當人が自慢する程あつて眺望は可なり好かつたが、縁側のない座敷の窓へ日が遠慮なく照り返すので、暑さは一通りではなかつた。床の間に懸けてある軸物も反つくり返つて居た。

「なに日が射す爲ぢやない。年が年中懸け通しだから糊の具合であゝなるんです」と岡田は眞面目に辯解した。

「成程梅に鶯だ」と自分も云ひたくなつた。彼は世帯を持つ時の用意に、此幅を自分の父から貰つて、大得意で自分の室へ持つて来て見せたのである。其時自分は「岡田君此吳春は偽物だよ。夫だからあの親

父が君に呉れたんだ」と云つて調戲半分岡田を怒らした事を覚えてゐた。

二人は戀物を見て、當時を思ひ出しながら子供らしく笑つた。岡田は何時迄も窓に腰を掛けて話を續ける風に見えた。自分も襯衣に洋袴丈になつて、其處に寢轉びながら相手になつた。さうして彼から天下茶屋の形勢だの、將來の發展だの、電車の便利だのを聞かされた。自分は自分に夫程興味のない問題を、たゞ素直にはい／＼と聽いて居たが、電車の通じる所へわざ／＼俾へ乗つて來た事丈は、馬鹿らしいと思つた。二人は又二階を下りた。

やがて細君が歸つて來た。細君はお兼さんと云つて、器量は夫程でもないが、色の白い、皮膚の滑らかな、遠見の大變好い女であつた。父が勤めてゐたある官省の屬官の娘で、其頃は時々勝手口から頼まれものの仕立物などを持つて出入りをしてゐた。岡田は又其時分自分の家の食客をして、勝手口に近い書生部屋で、勉強もし晝寐もし、時には燒芋杯も食つた。彼等は斯様にして互に顔を知り合つたのである。が、顔を知り合つてから、結婚が成立するまでに、どんな徑路を通つて來たか自分はよく知らない。岡田は母の遠縁に當たる男だけれども、自分の宅では書生同様にしてゐたから、下女達は自分や自分の兄には遠慮して云ひ兼ねる事迄も、岡田に對してはつけつけと云つて退けた。「岡田さんお兼さんが宜しく」杯といふ言葉は、自分も時々耳にした。けれども岡田は一向氣にも留めない様子だつたから、大方たゞの徒事だらうと思つてゐた。すると岡田は高商を卒業して一人で大阪のある保險會社へ行つて仕舞つた。地位は自

少時してから彼は今迄の快豁な調子を急に失つた。さうして何か祕密でも打ち明けるやうな具合に、聲を落とした。それでゐて、恰も獨り言をいふ時のやうに足元を見詰めながら「是であいつと一所になつてから、彼是もう五六年近くになるんだが、どうも子供が出來ないんでね、何ういふものか、それが氣掛りで……」と云つた。

自分は何とも答へなかつた。自分は子供を生ます爲に女房を貰ふ人は、天下に一人もある筈がないと、豫てから思つてゐた。然し女房を貰つてから後で、子供が欲しくなるものかどうか、其處になると自分にも判斷が附かなかつた。

「結婚すると子供が欲しくなるのですかね」と聞いて見た。

「なに子供が可愛いかどうかまだ僕にも分かりませんが、何しろ妻たるものが子供を生まなくつちや、丸で一人前の資格がない様な氣がして……」

岡田は單にわが女房を世間並にする爲に子供を欲するのであつた。結婚はしたいが子供が出來るのが怖いから、まあ最う少し先へ延ばさうといふ苦しい世の中ですよと自分は彼に云つて遣りたかつた。すると岡田が「それに二人切りぢや淋しくつてね」と又つけ加へた。

「二人切りだから仲が好いでせう」

「子供が出來ると夫婦の愛は減るもんでせうか」

岡田と自分は實際二人の經驗以外にあることを左も心得た様に話し合つた。

宅では食卓の上に刺身だの吸物だのが綺麗に並んで二人を待つてゐた。お兼さんは薄化粧をして二人の御酌をした。時々は團扇を持つて自分を扇いで呉れた。自分は其風が横顔に當たるたびに、お兼さんの白粉の匂を微かに感じた。さうして夫が麥酒や山葵の香よりも人間らしい好い匂の様に思はれた。

「岡田君は何時も斯うやつて晩酌を遣るんですか」と自分はお兼さんに聞いた。お兼さんは微笑しながら、「どうも後引上戸で困ります」と答へてわざと夫の方を見遣つた。夫は「なに後が引ける程飲ませやしないやね」と云つて、傍にある團扇を取つて、急に胸のあたりをはたくいはせた。自分は又急に此地で會ふべき筈の友達に思ひ及んだ。

「奥さん、三澤といふ男から僕に宛てて、郵便か電報か何か来ませんでしたか。今散歩に出た後で」
「来やしないよ。大丈夫だよ、君。僕の妻はさう云ふ事はちやんと心得てるんだから。ねえお兼。——好いちやありませんか、三澤の一人や二人来たつて来なくなつて。二郎さん、そんなに僕の宅が氣に入らないんですか。第一貴方はあの一件からして片附けて仕舞はなくなつちやならない義務があるでせう」

岡田は斯う云つて、自分の洋盃へ麥酒をごほくと注いだ。もう餘程酔つてゐた。

五

其晩はとうとう岡田の家へ泊つた。六疊の二階で一人寐かされた自分は、蚊帳の中の暑苦しさに堪へかねて、成るべく夫婦に知れないやうに、そつと雨戸を開け放つた。窓際を枕に寝てゐたので、空は蚊帳越しにも見えた。試しに赤い裾から、頭だけ出して眺めると星がきらりと光つた。自分はこんな事をする間にも、下にある岡田夫婦の今昔は忘れなかつた。結婚してからあゝ親しく出来たら嘸幸福だらうと羨ましい氣もした。三澤から何の音信のないのも氣掛りであつた。然し斯うして幸福な家庭の客となつて、彼の消息を待つために四五日愚圖々々してゐるのも悪くはないと考へた。一番何うでも好かつたのは岡田の所謂「例の一件」であつた。

翌日眼が覺めると、窓の下の狭苦しい庭で、岡田の聲がした。

「おいお兼とうとう絞りのが咲き出したぜ。一寸来て御覽」

自分は時計を見て、腹這ひになつた。さうして燐寸を擦つて敷島へ火を點けながら、暗にお兼さんの返事を待ち構へた。けれどもお兼さんの聲は丸で聞こえなかつた。岡田は「おい」「おいお兼」を又二三度繰り返した。やがて、「せはしない方ね、貴方は。今朝顔どころぢやないわ、臺所が忙しくつて」といふ言葉が手に取るやうに聞こえた。お兼さんは勝手から出て来て座敷の縁側に立つてゐるらしい。

「それでも綺麗ね。咲いて見ると。——金魚はどうして」

「金魚は泳いでゐるがね。どうも此方は六づかしいらしい」

自分はお兼さんが、死にかゝつた金魚の運命について、何かセンチメンタルな事でもいふかと思つて、煙草を吹かしながら聴いてゐた。けれどもいくら待つてゐても、お兼さんは何とも云はなかつた。岡田の聲も聞こえなかつた。自分は煙草を捨てて立ち上がった。さうして可なり急な階子段を一段づゝ音を立てて下へ降りて行つた。

三人で飯を済ました後、岡田は會社へ出勤しなければならぬので、緩り案内をする時間がないのを残念がつた。自分は此處へ来る前から、そんな事を全く豫期してゐなかつたと云つて、白い詰襟姿の彼を坐つたまゝ眺めてゐた。

「お兼、御前暇があるなら二郎さんを案内して上げるが好い」と岡田は急に思ひ附いたやうな顔附で云つた。お兼さんは何時もの様子に似ず、此時丈は夫にも自分にも何とも答へなかつた。自分はすぐ「なに構はない。君と一所に君の會社のある方角迄行つて、そこいらを逍遙して見よう」と云ひながら立つた。お兼さんは玄關で自分の洋傘を取つて、自分に手渡しして呉れた。夫から只一口「御早く」と云つた。

自分は二度電車に乗せられて、二度下ろされた。さうして岡田の通つてゐる石造の會社の周圍を好い加減に歩き廻つた。同じ流れか、違ふ流れか、水の面が二三度目に入つた。その内暑さに堪へられなくなつて、又好い加減に岡田の家へ歸つて來た。

二階へ上がつて、——自分は昨夜から此六疊の二階を、自分の室と心得るやうになつた。——休息してゐると、下から階子段を踏む音がして、お兼さんが上がつて來た。自分は驚いて脱いだ肌を入れた。昨日廂に束ねてあつたお兼さんの髪は、何時の間にか大きな丸鬘に變つてゐた。さうして桃色の手絡が鬘の間から覗いてゐた。

六

お兼さんは黒い盆の上に載せた平野水と洋盃を自分の前に置いて、「如何で御座いますか」と聞いた。自分は「難有う」と答へて、盆を引き寄せようとした。お兼さんは「いえ私が」と云つて急に髪を取り上げた。自分は此時黙つてお兼さんの白い手ばかり見てゐた。其手には昨夕氣が附かなかつた指環が一つ光つてゐた。

自分が洋盃を取り上げて咽喉を潤した時、お兼さんは帯の間から一枚の葉書を取り出した。

「先程御出掛けになつた後で」と云ひかけて、にや／＼笑つてゐる。自分は其表面に三澤の二字を認めた。

「とう／＼参りましたね、御待ちかねの……」

自分は微笑しながら、すぐ裏を返して見た。

「一兩日後れるかも知れぬ」

葉書に大きく書いた文字はたゞ是丈であつた。

「丸で電報の様で御座いますね」

「それで貴方笑つてたんですか」

「さう云ふ譯でも御座いませぬけれども、何だか餘り……」

お兼さんは其處で黙つて仕舞つた。自分はお兼さんをもつと笑はせたかつた。

「餘り、何うしました」

「餘り勿體ないやうですから」

お兼さんの御父さんといふのは大變緻密な人で、お兼さんの所へ手紙を寄こすにも、大抵は葉書で用を辨じてゐる代りに蠅の頭のやうな字を十五行も並べて來るといふ話を、お兼さんは面白さうにした。自分は三澤の事を全く忘れて、たゞ前にゐるお兼さんを的に、様々の事を尋ねたり聞いたりした。

「奥さん、子供が欲しかありませんか。斯うやつて、一人で留守をしてゐると退屈するでせう」

「左様でも御座いませぬわ。私兄弟の多い家に生れて大變苦勞して育つた所爲か、子供程親を意地見

るものはないと思つて居りますから」

「だつて一人や二人は可いでせう。岡田君は子供がないと淋しくつて不可ないと云つてましたよ」

お兼さんは何も答へずに窓の外の方を眺めてゐた。顔を元へ戻しても、自分を見ずに、疊の上にある平

野水の礫を見てゐた。自分は何も氣が附かなかつた。それで又「奥さんは何故子供が出来ないんでせう」と聞いた。するとお兼さんは急に赤い顔をした。自分はたゞ心易だてで云つたことが、甚だ面白くない結果を引き起したのを後悔した。けれども何うする譯にも行かなかつた。其時はたゞお兼さんに氣の毒をしたといふ心丈で、お兼さんの赤くなつた意味を知らう杯とは夢にも思はなかつた。

自分は此居苦しく又立ち苦しくなつた様に見える若い細君を、何うともして救はなければならなかつた。夫には是非共話頭を轉ずる必要があつた。自分はかねてから左程重きを置いてゐなかつた岡田の所謂「例の一件」をとくく持ち出した。お兼さんはすぐ元の態度を回復した。けれども夫に責任の過半を譲る積りか、決して多くを語らなかつた。自分もさう根掘り葉掘り聞きもしなかつた。

七

「例の一件」が本式に岡田の口から持ち出されたのは其晩の事であつた。自分は露に近い縁側を好んで其處に座を占めてゐた。岡田は夫迄お兼さんと向き合つて座敷の中に坐つて居たが、話しが始まるや否や、すぐ立つて縁側へ出て來た。

「何うも遠くぢや話しがし悪くつて不可ないと云ひながら、模様の附いた座蒲團を自分の前に置いた。お兼さん丈は依然として元の席を動かかなかつた。

「二郎さん寫眞は見たでせう、此間僕が送つた」

寫眞の主といふのは、岡田と同じ會社へ出る若い人であつた。此寫眞が來た時家のものが代り番子に見て、様々の批評を加へたのを、岡田は知らないのである。

「え、一寸見ました」

「何うです評判は」

「少し御凸額だつて云つたものも有ります」

お兼さんは笑ひ出した。自分も可笑しくなつた。と云ふのは、其男の寫眞を見て、御凸額だと云ひ始めたものは、實のところ自分だからである。

「お重さんでせう、そんな悪口をいふのは。あの人の口に掛かつちや、大抵のものは敵はないからね」

岡田は自分の妹のお重を大變口の悪い女だと思つてゐる。それも彼がお重から、あなたの顔は將棋の駒見たいよと云はれてからの事である。

「お重さんに何と云はれたつて構はないが肝心の當人は何うなんです」

自分は東京を立つとき、母から、貞には無論異存これなくといふ返事を岡田の方へ出して置いたといふ事を確めて來たのである。だから、當人は母から上げた返事の通りだと答へた。岡田夫婦は又佐野といふ婿になるべき人の性質や品行や將來の望みや、其他色々の條項に就いて一々自分に話して聞かせた。最後に

に當人が此縁談の成立を切望してゐる例杯を擧げた。

お貞さんは器量から云つても教育から云つても、是といふ特色のない女である。たゞ自分の家の厄介ものといふ名がある丈である。

「先方があまり乗り氣になつて何だか劍呑だから、彼地へ行つたら好く様子を見て來て御呉れ」

自分は母から斯う頼まれたのである。自分はお貞さんの運命について、夫程多くの興味は有ち得なかつたけれども、成程さう望まれるのは、お貞さんの爲に結構な様で又危険な事だらうとも考へてゐた。夫で今迄黙つて岡田夫婦の云ふ事を聞いてゐた自分は、不圖口を滑らした。――

「何うしてお貞さんが、そんなに氣に入つたものかな。まだ會つた事もないのに」

「佐野さんはあゝいふ確りした方だから、矢つ張り辛抱人を御貰ひになる御考へなんですよ」

お兼さんは岡田の方を向いて、佐野の態度を斯う辯解した。岡田はすぐ、「さうさ」と答へた。さうして其外には何も考へてゐないらしかつた。自分は兎に角其佐野といふ人に明日會はうといふ約束を岡田として、又六疊の二階に上がった。頭を枕に着けながら、自分の結婚する場合にも事が斯う簡單に運ぶのだからうかと考へると、少し恐ろしい氣がした。

翌日岡田は會社を午で切り上げて歸つて來た。洋服を投げ出すが早いか勝手へ行つて水浴をして「さあ行かう」と云ひ出した。

お兼さんは何時の間にか箆笥の抽出を開けて、岡田の着物を取り出した。自分は岡田が何を着るか、左程氣にも留めなかつたが、お兼さんの着せ具合や、帶の取つて遣り具合には、知らず知らず注意を拂つてゐたものと見えて、「二郎さんあなた仕度は好いんですか」と聞かれた時、はつと氣が附いて立ち上がった。

「今日は御前も行くんだよ」と岡田はお兼さんに云つた。「だつて……」とお兼さんは緞の羽織を兩手で持ちながら、夫の顔を見上げた。自分は梯子段の途中で、「奥さん入らつしやい」と云つた。

洋服を着て下へ降りて見ると、お兼さんは何時の間にかもう着物も帶も取り換へてゐた。

「早いですね」

「え、早變り」

「あんまり變り榮えもしない服装だね」と岡田が云つた。

「是で澤山よ彼んな所へ行くのに」とお兼さんが答へた。

三人は暑さを冒して岡を下つた。さうして停車場からすぐ電車に乗つた。自分は向う側に竝んで腰を掛けた岡田とお兼さんを時々見た。其間には三澤の突飛な葉書を思ひ出したりした。全體あれは何處で出したものなんだらうと考へても見た。是から會ひに行く佐野といふ男の事も、ちよいちよい頭に浮かんだ。

しかし其たんに「物好き」といふ言葉が何うしても一所に出て來た。

岡田は突然體を前に曲けて、「何うです」と聞いた。自分はたゞ「結構です」と答へた。岡田は元のやうに腰から上を真直にして、何かお兼さんに云つた。其顔には得意の色が見えた。すると今度はお兼さんが顔を前へ出して「御氣に入つたら、貴方も大阪へ入らつしやいませんか」と云つた。自分は覺えず「難有う」と答へた。さつき何うですと突然聞いた岡田の意味は、此時漸く解つた。

三人は濱寺で降りた。此地方の様子を知らない自分は、大きな松と砂の間を歩いて流石に好い所だと思つた。然し岡田は此處では「何うです」を繰り返さなかつた。お兼さんも洋傘を開いた儘さつさと思つた。「もう來てゐるだらうか」

「さうね。ことに因ると最う來て待つて入らつしやるかも知れないわ」

自分は二人の後に跟いて、斯んな會話を聴きながら、すばらしく大きな料理屋の玄關の前に立つた。自分は何よりもまづ其大きいのに驚かされたが、上がつて案内をされた時、更にその道中の長いのに吃驚した。三人は段々を下りて細い廊下を通つた。

「隧道ですよ」

お兼さんが斯ういつて自分に教へて呉れたとき、自分はそれが冗談で、本當に地面の下ではないのだと思つた。それで只笑つて薄暗い處を通り抜けた。

座敷では佐野が一人敷居際に洋服の片膝を立てて、煙草を吹かしながら海の方を見てゐた。自分達の足音を聞いた彼はすぐ此方に向いた。其時彼の額の下に、金縁の眼鏡が光つた。部屋へ這入るとき第一に彼と顔を見合はせたのは實に自分だつたのである。

九

佐野は寫眞で見たよりも一層御凸額であつた。けれども額の廣い處へ、夏だから髪を短かく刈つてゐるので、ことにさう見えたのかも知れない。初對面の挨拶をするとき、彼は「何分宜敷く」と云つて頭を丁寧に下げた。此普通一般の挨拶振が、場合が場合なので、自分には一種變に聞こえた。自分の胸は今迄左程責任を感じてゐなかつた所へ急に重苦しい束縛が出来た。

四人は膳に向ひながら話しをした。お兼さんは佐野とは大分心易い間柄と見えて、時々向う側から調戲つたりした。

「佐野さん、あなたの寫眞の評判が東京で大變なんですつて」

「どう大變なんです。——大方好い方へ大變なんでせうね」

「そりや勿論よ。嘘だと思し召すなら御隣りに入らつしやる方に伺つて御覽になれば解るわ」

佐野は笑ひながらすぐ自分の方を見た。自分は一寸何とか云はなければ跋が惡かつた。それで眞面目な顔をして、「どうも寫眞は大阪の方が東京より發達してゐるやうですね」と云つた。すると岡田が「淨瑠璃ぢやあるまいし」と交ぜ返した。

岡田は自分の母の遠縁に當たる男だけれども、長く自分の宅の食客をしてゐた所爲か、昔から自分や自分の兄に對しては一段低い物の云ひ方をする習慣を有つてゐた。久し振に會つた昨日一昨日杯は殊に左右であつた。所が斯うして佐野が一人新しく席に加はつて見ると、友達の手前體裁が惡いといふ譯だか何だか、自分に對する口の利き方が急に對等になつた。ある時は對等以上に横風になつた。

四人のゐる座敷の向うには、同じ家のだけれども棟の違ふ高い二階が見えた。障子を取り拂つた其廣間の中を見上げると、角帯を締めた若い人達が大勢ゐて、其内の一人が手拭を肩へ掛けて踊かなにか躍つてゐた。「御店ものの懇親會といふ所だらう」と評し合つてゐるうちに、十六七の小僧が手摺の所へ出て来て、汚いものを容赦なく廂の上へ吐いた。すると同じ位な年配の小僧が又一人煙草を吹かしながら出て来て、こゝろ確りしろ、己が附いてゐるから、何も怖がるには及ばない、といふ意味を純粹の大阪辯で遣り出した。今迄苦々しい顔をして手摺の方を見てゐた四人はとう／＼吹き出して仕舞つた。

「何方も酔つてるんだよ。小僧の癖に」と岡田が云つた。

「貴方見たいね」とお兼さんが評した。

「何方がです」と佐野が聞いた。

「両方ともよ。吐いたり管を捲いたり」とお兼さんが答へた。

岡田は寧ろ愉快な顔をしてゐた。自分は黙つてゐた。佐野は獨り高笑ひをした。

四人はまだ日の高い四時頃に其處を出て歸路についた。途中で分かれるとき佐野は「何れ其内又」と帽を取つて挨拶した。三人はブラットフォームから外へ出た。

「何うです、二郎さん」と岡田はすぐ自分の方を見た。

「好ささうですね」

自分は斯うより外に答へる言葉を知らなかつた。それでゐて、斯う答へた後は甚だ無責任なやうな氣がしてならなかつた。同時に此無責任を餘儀なくされるのが、結婚に關係する多くの人の經驗なんだらうとも考へた。

十

自分は三澤の消息を待つて、猶二三日岡田の厄介になつた。實をいふと彼等は自分の餘所に行つて宿を取る事を許さなかつたのである。自分は其間出来る丈一人で大阪を見て歩いた。すると町幅の狭い所爲か人間の運動が東京よりも潑刺と自分の眼を射るやうに思はれたり、家並が締りのない東京より整つて好ましいやうに見えたり、河が幾筋もあつて其河には静かな水が豊かに流れてゐたり、眼先の變つた興味が日に一つ二つは必ずあつた。

佐野には濱寺で一所に飯を食つた次の晩又會つた。今度は彼の方から浴衣がけて岡田を尋ねて來た。自分は其時も彼是二時間餘り彼と話した。けれどもそれは只前日の催しを岡田の家で小規模に繰り返したに過ぎなかつたので、新しい印象と云つては格別頭に残りやうがなかつた。だから本當をいふと唯世間並の人といふ外に、自分は彼に就いて何も解らなかつた。けれども亦母や岡田に對する義務としては、何も解らないで澄ましてゐる譯にも行かなかつた。自分は此二三日の間に、とう／＼東京の母へ向けて佐野と會見を結了した旨の報告を書いた。

仕方がないから「佐野さんはあの寫真によく似てゐる」と書いた。「酒は呑むが、呑んでも赤くならな」と書いた。「御父さんのやうに謠をうたふ代りに義太夫を勉強してゐるさうだ」と書いた。最後に岡田夫婦と仲の好ささうな様子を述べて、「あれ程仲の好い岡田さん夫婦の周旋だから間違ひはないでせう」と書いた。一番仕舞に、「要するに、佐野さんは多數の妻帯者と變つた所も何もないやうです。お貞さんも普通の細君になる資格はあるんだから、承諾したら好いちやありませんか」と書いた。

自分は此手紙を封じる時、漸く義務が濟んだやうな氣がした。然し此手紙一つでお貞さんの運命が永久に決せられるのかと思ふと、多少自分のおつ猪口ちよいに恥ぢ入る所もあつた。そこで自分は此手紙を封筒へ入れた儘、岡田の所へ持つて行つた。岡田はすうと眼を通した丈で「結構」と答へた。お兼さんは、

てんで巻紙に手を觸れなかつた。自分は二人の前に坐つて、双方を見較べた。

「是で好いでせうかね。是さへ出して仕舞へば、宅の方は極まるんです。従つて佐野さんも一寸動けなくなるんですが」

「結構です。それが僕等の最も希望する所です」と岡田は開き直つていつた。お兼さんは同じ意味を女の言葉で繰り返した。二人から斯う事もなげに云はれた自分は、それで安心するよりも却て心元なくなつた。

「何がそんなに氣になるんです」と岡田が微笑しながら煙草の煙を吹いた。「此事件に就いて一番冷淡だつたのは君ぢやありませんか」

「冷淡にや違ひないが、あんまり御手輕過ぎて、少し双方に對して申し譯がない様だから」

「御手輕どころぢや御座いません、それ丈長い手紙を書いて頂けば。それで御母さまが御満足なさる、此方は初めから極まつてる。是程御目出たい事はないぢや御座いませんか、ねえ貴方」

お兼さんは斯ういつて、岡田の方を見た。岡田は左右ともと云はぬばかりの顔をした。自分は理窟をいふのが厭になつて、二人の目の前で、三錢切手を手紙に貼つた。

十一

自分は此手紙を出しつ切りにして大阪を立ち退きたかつた。岡田も母の返事の來るまで自分に居て貰ふ必要もなからうと云つた。

「けれどもまあ緩りなさい」

是が彼の屢繰り返す言葉であつた。夫婦の好意は自分によく解つてゐた。同時に彼等の迷惑も亦よく想像された。夫婦ものに自分の様な横着な泊り客は、此方にも多少の窮屈は免れなかつた。自分は電報のやうに簡単な端書を書いたぎり何の音沙汰もない三澤が悪らしくなつた。もし明日中に何とか音信がなければ、一人で高野登りを遣らうと決心した。

「ぢや明日は佐野を誘つて寶塚へでも行きませう」と岡田が云ひ出した。自分は岡田が自分のために時間の差繰りをして呉れるのが苦になつた。もつと皮肉を云へば、そんな温泉場へ行つて、飲んだり食つたりするのが、お兼さんに濟まない様な氣がした。お兼さんは一寸見ると、派出好きの女らしいが、夫は寧ろ色白な顔立や様子がさう思はせるので、性質からいふと普通の東京ものよりずつと地味であつた。外へ出る夫の懷中にすら、ある程度の束縛を加へる位締まつてるんぢやないかと思はれた。

「御酒を召し上がらない方は一生の御得ですね」

自分の杯に親しまないのを知つたお兼さんは、ある時斯ういふ述懐を、さも羨ましさうに洩らした事さへある。それでも岡田が顔を赤くして、「二郎さん久し振に相撲でも取りませうか」と野蠻な聲を出すと、

お兼さんは眉をひそめながら、嬉しさうな眼附をするのが常であつたから、お兼さんは旦那の酔ふのが嫌ひなのではなくつて、酒に費用の掛かるのが嫌ひなのだらうと、自分は推察してゐた。

自分は折角の好意だけれども、實塚行を断つた。さうして腹の中で、あしたの朝岡田の留守に、一寸電車に乗つて一人で行つて様子を見て来ようとして取り極めた。岡田は「さうですか。文樂だと好いんだけども生憎暑いで休んでゐるもんだから」と氣の毒さうに云つた。

翌朝自分は岡田と一所に家を出た。彼は電車の上で突然自分の忘れ掛けてゐたお貞さんの結婚問題を持ち出した。

「僕は貴方の親類だと思つてやしません。貴方の御父さんや御母さんに書生として育てられた食客と心得てゐるんです。僕の今の地位だつて、あのお兼だつて、みんな貴方の御両親の御蔭で出来たんです。だから何か御恩返しをしなくつちや濟まないと平生から思つてゐるんです。お貞さんの問題もつまり夫が動機で爲たんですよ。決して他意はないんですからね」

お貞さんは宅の厄介ものだから、一日も早く何處かへ嫁に世話をするといふのが彼の主意であつた。自分家族の一人として岡田の好意を謝すべき地位にあつた。

「御宅ぢや早くお貞さんを片附けたいんでせう」

自分の父も母も實際さうなのである。けれども此時自分の眼にはお貞さんと佐野といふ縁故も何もない

二人が一所に且離れぬに映じた。

「旨く行くでせうか」

「そりや行くだらうぢやありませんか。僕とお兼を見つて解るでせう。結婚してからまだ一度も大喧嘩をした事なんかありませんせんぜ」

「貴方は特別だけれども……」

「なに何處の夫婦だつて、大概似たものでさあ」

岡田と自分はそれで此話を切り上げた。

十二

三澤の便りは果して次の日の午後になつても來なかつた。氣の短かい自分には斯んなづほらを待つて遣るのが腹立たしく感ぜられた。強ひても是から一人で立たうと決心した。

「まあもう一日二日は宜しいぢや御座いませんか」とお兼さんは愛嬌に云つて呉れた。自分が鞆の中へ浴衣や三尺帯を詰め、二階へ上がり掛ける下から、「是非左右なさいましょ」と追つ掛けるやうに留めた。それでも氣が濟まなかつたと見えて、自分が鞆の始末をした頃、上り口へ顔を出して、「おやもう御荷物の仕度をなすつたんですか。ぢや御茶でも入れますから、御緩りどうぞ」と降りて行つた。

自分は胡坐の儘旅行案内をひろけた。さうして胸の中で彼是と時間の都合を考へた。其都合が中々旨く行かないので、仰向けになつて少時寐て見た。すると三澤と一所に歩く時の愉快が色々想像された。富士を須走口へ降りる時、滑つて轉んで、腰にぶら下げた大きな金明水入りの硝子壺を、壊したなり帯へ括り附けて歩いた彼の姿杯が眼に浮かんだ。所へ又梯子段を踏むお兼さんの足音がしたので、自分は急に起き直つた。

お兼さんは立ちながら、「まあ好かつた」と一息吐いたやうに云つて、すぐ自分の前に坐つた。さうして三澤から今届いた手紙を自分に渡した。自分はすぐ封を開いて見た。

「とう／＼御着きになりましたか」

自分は一寸お兼さんに答へる勇氣を失つた。三澤は三日前大阪に着いて二日ばかり寐た揚句とう／＼病院に入つたのである。自分は病院の名を指してお兼さんに地理を聞いた。お兼さんは地理丈はよく呑み込んでゐるが、病院の名は知らなかつた。自分は兎に角靴を提げて岡田の家を出る事にした。

「どうも飛んだ事で御座いますね」とお兼さんは繰り返し／＼氣の毒ががた。斷るのを無理に、下女が靴を持つて停車場迄隨いて來た。自分は途中で猶も此下女を返さうとしたが、何とか云つて中々歸らなかつた。其言葉は解るには解るが、自分のやうに此土地に親しみのないものには到底覺えられなかつた。別れるとき今迄世話になつた禮に一圓遣つたら「さいなら、御機嫌よう」と云つた。

電車を下りて俥に乗ると、其俥は軌道を横切つて細い通を真直に馳けた。馳け方が餘り烈しいので、向うから來る自轉車だの俥だのと幾度か衝突しさうにした。自分ははらくしながら病院の前に降ろされた。靴を持つた儘三階に上がった自分は、三澤を探すため方々の室を覗いて歩いた。三澤は廊下の突き當りの八疊に、氷嚢を胸の上に載せて寐てゐた。

「何うした」と自分は室に入るや否や聞いた。彼は何も答へずに苦笑してゐる。「又食ひ過ぎたんだらう」と自分は叱るやうに云つたなり、枕元に胡坐を搔いて上着を脱いだ。

「其處に蒲團がある」と三澤は上眼を使つて、室の隅を指した。自分は其眼の様子と頬の具合を見て、是は何の位重い程度の病氣なんだらうと疑つた。

「看護婦は附いてるのかい」

「うん。今何處かへ出て行つた」

十三

三澤は平生から胃腸のよくない男であつた。動ともすると吐いたり下したりした。友達は夫を彼の不養生からだとして評し合つた。當人は又母の遺傳で體質から來るんだから仕方がないと辯解してゐた。さうして消化器病の書物などを引つ繰り返して、アトニーとか下垂性とかトリーヌとかいふ言葉を使つた。自分杯

三三
が時々彼に忠告めいた事をいふと、彼は素人が何を知らぬものかと云はぬ許りの顔をした。

「君アルコールは胃で吸収されるものか、腸で吸収されるものか知つてるか」などと澄ましてゐた。其癖病氣になると彼は屹度自分を呼んだ。自分もそれ見ろと思ひながら必ず見舞に出掛けた。彼の病氣は短かくて二三日長くて一二週間で大抵は癒つた。それで彼は彼の病氣を馬鹿にしてゐた。他人の自分は猶更であつた。

けれども此場合自分は先づ彼の入院に驚かされてゐた。其上に胃の上の氷嚢で又驚かされた。自分は夫迄氷嚢は頭か心臓の上でなければ載せるものでないとばかり信じてゐたのである。自分はぴくんくんと脈を打つ氷嚢を見詰めて厭な心持になつた。枕元に坐つてゐる程、附け景氣の言葉が段々出なくなつて來た。

三澤は看護婦に命じて氷菓子を取らせた。自分が其一杯に手を着けてゐるうちに、彼は残る一杯を食ふといひ出した。自分は藥と定食以外にそんなものを口にするのは好くなからうと思つて留めに掛かつた。すると三澤は怒つた。

「君は一杯の氷菓子を消化するのに、何の位強壯な胃が必要だと思ふのか」と眞面目な顔をして議論を仕掛けた。自分は實の所何も知らないのである。看護婦は、可からうけれども念の爲だからと云つて、わざわざ醫局へ聞きに行つた。さうして少量なら差支へないといふ許可を得て來た。

自分は便所に行くとき三澤に知れないやうに看護婦を呼んで、あの人の病氣は全體何といふんだと聞いて見た。看護婦は大方胃が悪いんだらうと答へた。夫より以上の事を尋ねると、今看護婦會から派出された計りで、何もまだ分らないんだと云つて平氣でゐた。仕方なしに下へ降りて醫員に尋ねたら、其男もまだ三澤の名を知らなかつた。けれども患者の病名だの處方だのを書いた紙箋を繰つて、胃が少し糜爛れたんだといふ事丈教へて呉れた。

自分は又三澤の傍へ行つた。彼は氷嚢を胃の上に乗せた儘「君其窓から外を見てみる」と云つた。窓は正面に二つ側面に一つあつたけれども、何れも西洋式で普通より高い上に、病人は日本の蒲團を敷いて寐てるんだから、彼の眼には強い色の空と、電信線の一部が筋違に見える丈であつた。

自分は窓側に手を突いて、外を見下ろした。すると何よりも先づ高い煙突から出る遠い煙が眼に入つた。其煙は市全體を掩ふやうに大きな建物の上を這ひ廻つてゐた。

「河が見えるだらう」と三澤が云つた。
大きな河が左手の方に少し見えた。

「山も見えるだらう」と三澤が又云つた。

山は正面に先から見えてゐた。

それが暗がり峠で、昔は多分大きな木ばかり生えてゐたのだらうが、今はあの通り明るい峠に變化した

んだとか、もう少しするとあの山の下を突き貫いて、奈良へ電車が通ふやうになるんだとか、三澤は今誰かから聞いた計りの事を元氣よく語つた。自分は是なら大した心配もないだらうと思つて病院を出た。

十四

自分は別に行く所もなかつたので、三澤の泊つた宿の名を聞いて、其處へ俥で乗り附けた。看護婦はつい近くのやうに云つたが、始めての自分には可なりの道程と思はれた。

其宿には玄關も何もなかつた。這入つても入らつしやいと挨拶に出る下女もなかつた。自分は三澤の泊つたといふ二階の一間に通された。手摺の前はすぐ大きな川で、座敷から眺めてみると大變涼しやうに水は流れるが、向きの所爲か風は少しも入らなかつた。夜に入つて向う側に點ぜられる燈火のきらめきも、たゞ眼に少しばかりの趣きを添へる丈で、涼味といふ感じには丸でならなかつた。

自分は給仕の女に三澤の事を聞いて始めて知つた。彼は二日此處に寐た揚句、三日目に入院したやうに記憶してゐるが實はもう一日前の午後に着いて、靴を投げ込んだ儘外出して、其晩の十時過ぎに始めて歸つて來たのださうである。着いた時には五六人の伴侶がゐるが、歸りにはたつた一人になつてゐたと下女は告げた。自分は其五六人の伴侶の何人であるかに就いて思ひ悩んだ。然し想像さへ浮かばなかつた。

「酔つてたかい」と自分は下女に聞いて見た。其處は下女も知らなかつた。けれども少し経つて吐いたから酔つてゐたんだらうと答へた。

自分は其夜蚊帳を釣つて貰つて早く床に這入つた。すると其蚊帳に穴があつて、蚊が二三疋這入つて來た。團扇を動かして、それを拂ひ退けながら寐ようとする、隣の室の話し聲が耳に附いた。客は下女を相手に酒でも呑んでゐるらしかつた。さうして警部だとかいふ事であつた。自分は警部の二字に多少の興味があつた。それで其人の話しを聞いて見る氣になつたのである。すると自分の室を受け持つてゐる下女が上がつて來て、病院から電話だと知らせた。自分は驚いて起き上がった。

電話の相手は三澤の看護婦であつた。病人の模様でも急に變つたのかと思つて心配しながら用事を聞いて見ると病人から、明日は成るべく早く來て呉れ、退屈で困るからといふ傳言に過ぎなかつた。自分は彼の病氣が果してさう重くないんだと断定した。「何だそんな事か、さういふ我儘は成るべく取次がないが好い」と叱り附けるやうに云つて遣つたが、後で看護婦に對して氣の毒になつたので、「然し行く事は行くよ。君が來て呉れといふなら」と附け足して室へ歸つた。

下女は何時氣が附いたか、蚊帳の穴を針と糸で塞いでゐた。けれども既に這入つてゐる蚊は其儘なので、横になるや否や、時々額や鼻の頭の邊でぶうんと云ふ小さい音がした。夫でもうとうとと寐た。すると今度は右の方の部屋でする話し聲で眼が覺めた。聞いてみると矢張り男と女の聲であつた。自分は此方側に客は一人もゐない積りでゐたので、一寸驚かされた。然し女が繰り返して、「そんなら最う歸して貰ひます

「ぜ」といふやうな言葉を二三度用ひたので、隣の客が女に送られて茶屋からでも歸つて來たのだらうと推察して又眠りに落ちた。

それから最う一度下女が雨戸を引く音に夢を破られて、最後に起き上がったのが、まだ川の面に白い霧が薄く見える頃だつたから、正味寐たのは何時間にもならなかつた。

十五

三澤の氷嚢は依然として其日も胃の上になつた。

「まだ氷で冷やしてゐるのか」

自分は聊か案外な顔をして斯う聞いた。三澤にはそれが友達甲斐もなく響いたのだらう。

「鼻風邪ぢやあるまいし」と云つた。

自分は看護婦の方を向いて、「昨夕は御苦勞さま」と一口禮を述べた。看護婦は色の蒼い膨れた女であつた。顔附が繪にかいた座頭に好く似てゐる所爲か、普通彼等の着る白い着物が些とも似合はなかつた。岡山のもので、小さい時膿毒性とかで右の眼を悪くしたんだと、此方で尋ねもしない事を話した。成程この女の一方の眼には白い雲が一杯に掛かつてゐた。

「看護婦さん、こんな病人に優しくして遣ると何を云ひ出すか分らないから、好い加減にして置くが可

いよ」

自分は面白半分わざと輕薄な露骨を云つて、看護婦を苦笑させた。すると三澤が突然「おい氷だ」と氷嚢を持ち上げた。

廊下の先で氷を割る音がした時、三澤は又「おい」と云つて自分を呼んだ。

「君には解るまいが、此病氣を押してゐると、屹度潰瘍になるんだ。それが危険だから僕は斯う凝として氷嚢を載せてゐるんだ。此處へ入院したのも、醫者が勧めたのでも、宿で周旋して貰つたのでもない。

たゞ僕自身が必要と認めて自分で入つたのだ。酔興ぢやないんだ」

自分は三澤の醫學上の智識に就いて、夫程信を置き得なかつた。けれども斯う眞面目に出られて見ると、もう交ぜ返す勇氣もなかつた。其上彼の所謂潰瘍とは何んなものか全く知らなかつた。

自分は起つて窓側へ行つた。さうして強い光に反射して、乾いた土の色を見せてゐる暗がり峠を望んだ。不圖奈良へでも遊びに行つて來ようかといふ氣になつた。

「君其様子ぢや當分約束を履行する譯にも行かないだらう」

「履行しようと思つて、是程の養生をしてゐるのさ」

三澤は中々強情の男であつた。彼の強情に付き合へば、彼の健康が旅行に堪へ得る迄自分は此暑い都の中で蒸されてゐなければならなかつた。

「だつて君の氷嚢は中々取れさうにないぢやないか」

「だから早く癒るさ」

自分は彼と斯ういふ談話を取り換はせてゐるうちに、彼の強情のみならず、彼の我儘な點をよく見て取つた。同時に一日も早く病人を見捨てて行かうとする自分の我儘も亦よく自分の眼に映つた。

「君大阪へ着いたときは澤山伴侶があつたさうぢやないか」

「うん、あの連中と飲んだのが悪かつた」

彼の擧げた姓名のうちには、自分の知つてゐるものも二三あつた。三澤は彼等と名古屋から一所の汽車に乗つたのだが、何れも馬關とか門司とか福岡とか迄行く人であるに拘らず、久し振だからといふので、皆大阪で降りて三澤と共に飯を食つたのださうである。

自分は兎も角ももう二三日居て病人の経過を見た上、何うとか爲ようと分別した。

十六

其間自分は三澤の附添ひのやうに、晝も晩も大抵は病院で暮らした。孤獨な彼は實際毎日自分を待ち受けてゐるらしかつた。それでゐて顔を合はすと、決して禮などは云はなかつた。わざわざ草花を買つて持つて行つて遣つても、憤と膨れてゐる事さへあつた。自分は枕元で書物を讀んだり、看護婦を相手にしたり、時間が來ると病人に藥を吞ませたりした。朝日が強く差し込む室なので、看護婦を相手に、寐床を陰の方へ移す手傳もさせられた。

自分は斯うしてゐるうちに、毎日午前中に回診する院長を知る様になつた。院長は大概黒のモーニングを着て醫員と看護婦を一人づゝ隨へてゐた。色の淺黒い鼻筋の通つた立派な男で、言葉遣ひや態度にも容貌の示す如く品格があつた。三澤は院長に會ふと、醫學上の知識を丸で有つてゐない自分たちと同じやうな質問をしてゐた。「まだ容易に旅行などは出来ないでせうか」「潰瘍になると危険でせうか」「斯うやつて思ひ切つて入院した方が、今考へて見ると矢つ張り得策だつたんでせうか」などと聞かされたに院長は「え、まあ左右です」ぐらゐるな單簡な返答をした。自分は平生解らない術語を使つて、他を馬鹿にする彼が、院長の前で斯う小さくなるのを滑稽に思つた。

彼の病氣は軽いやうな重いやうな變なものであつた。宅へ知らせる事は當人が絶対に不承知であつた。院長に聞いて見ると、嘔氣が來なければ心配する程の事もあるまいが、夫にしても最う少しは食欲が出る筈だと云つて、不思議さうに考へ込んでゐた。自分は去就に迷つた。

自分が始めて彼の膳を見たとき其上には、生豆腐と海苔と鯉節の肉汁が載つてゐた。彼は是より以上箸を着ける事を許されなかつたのである。自分は是では前途遠慮だと思つた。同時に其膳に向つて薄い粥を啜る彼の姿が變に痛ましく見えた。自分が席を外して、つい近所の洋食屋へ行つて支度をして歸つて來る

と、彼は屹度「旨かつたか」と聞いた。自分は其顔を見て益氣の毒になつた。

「あの家は此間君と喧嘩した氷菓子を持つて来る家だ」

三澤は斯う云つて笑つてゐた。自分は彼がもう少し健康を回復する迄彼の傍に居てやりたい氣がした。然し宿へ歸ると、暑苦しい蚊帳の中で、早く涼しい田舎へ行きたいと思ふことが多かつた。此間の晩女と話しをして人の眠りを妨げた隣の客はまだ泊つてゐた。さうして自分の寐よとする頃に必ず酒氣を帯びて歸つて來た。ある時は宿で酒を飲んで、藝者を呼べと怒鳴つてゐた。それを下女が様々に胡魔化さうとして仕舞には、あの女はあなたの前へ出ればこそ、彼んな愛嬌をいふもの、陰では貴方の悪口ばかり並べるんだから止めろと忠告してゐた。すると客は、なに己の前へ出た時だけ御世辭を云つて呉れりやそれ嬉しいんだ、陰で何と云つたつて聞こえないから構はないと答へてゐた。ある時は是も藝者が何か眞面目な話しを持ち込んで來たのを、今度は客の方で胡魔化さうとして、其藝者から他の話しを「ぢやん、ぢやか、ぢやん」に爲てしまふと云つて怒られてゐた。自分はこんな事で安眠を妨害されて、實際迷惑を感じた。

十七

そんな斯んなで好く眠られなかつた朝、もう看病は御免蒙るといふ氣で、病院の方へ橋を渡つた。する

と病人はまだすやく眠つてゐた。

三階の窓から見下ろすと、狭い通なので、門前の路が細く綺麗に見えた。向う側は立派な高塀つゞきで、其一つの潜りの外へ主人らしい人が出て、如露で丹念に往來を濡らしてゐた。塀の内には夏蜜柑のやうな深緑の葉が瓦を隠す程茂つてゐた。

院内では小使が丁字形の棒の先へ雑巾を括り附けて廊下をぐんぐん押して歩いた。雑巾をゆすがないの、折角拭いた所が却て白く汚れた。軽い患者はみな洗面所へ出て顔を洗つた。看護婦の拂塵の聲が此處彼處で聞こえた。自分は枕を借りて、三澤の隣の空室へ、昨夕の睡眠不足を補ひに入つた。

其室も朝日の強く當たる向きにあるので、一寐入りするとすぐ眼が覺めた。額や鼻の頭に汗と脂が一面に浮き出しているのも不愉快だつた。自分は其時岡田から電話口へ呼ばれた。岡田が病院へ電話を掛けたのは是で三度目である。彼は極まり切つて、「御病人の御様子は何うです」と聞く。「二三日うち是非伺ひます」といふ。「何でも御用があるなら御遠慮なく」といふ。最後に屹度お兼さんの事を一口二口附け加へて、「お兼からも宜しく」とか、「是非御遊びに入らつしやる様に妻も申して居ります」とか、「うちの方が忙しいんで、つい御無沙汰をしてゐます」とか云ふ。

其日も岡田の話は何時もの通りであつた。けれども一番仕舞に「今から一週間内……と斷定する譯には行かないが、兎に角もう少しすると、貴方を一寸驚かせる事が出て來るかも知れませんか」と妙な事を

四四
仄めかした。自分は全く想像が附かないので、全體何んな話なんですかと二三度聞き返したが、岡田は笑ひながら、「もう少しすれば解ります」といふ限りなので、自分もとうとう其意味を聞かないで、三澤の室へ歸つて来た。

「又例の男かい」と三澤が云つた。

自分は今の岡田の電話が氣になつて、すぐ大阪を立つ話しを持ち出す心持になれなかつた。すると思ひ掛けなく三澤の方から「君もう大阪は厭になつたらう。僕のために貰ふ必要はないから、何處かへ行くなら遠慮なく行つて呉れ」と云ひ出した。彼はたとひ病院を出る場合が來ても、無闇な山登り杯は當分慎まなければならぬと覺つたと説明して聞かせた。

「それぢや僕の都合の好いやうにしよう」

自分は斯う答へて暫く黙つてゐた。看護婦は無言の儘室の外に出て行つた。自分は其草履の音の消えるのを聞いてゐた。それから小さい聲をして三澤に「金はあるか」と尋ねた。彼は己の病氣をまだ己の家に知らせないでゐる。夫にたつた一人の知人たる自分が、彼の傍を立ち退いたら、精神上よりも物質的に心細からうと自分は懸念した。

「君に才覺が出来るのかい」と三澤は聞いた。

「別に目的もないが」と自分は答へた。

「例の男は何うだい」と三澤が云つた。

「岡田か」と自分は少し考へ込んだ。

三澤は急に笑ひ出した。

「何いざとなれば何うかなるよ。君に算段して貰はなくつても。金は有るには有るんだから」と云つた。

十八

金の事はつい夫なりになつた。自分は岡田へ金を借りに行く時の思ひを想像すると實際厭だつた。病氣に罹つた友達の爲だと考へても、少しも進む氣はしなかつた。其代り此地を立つとも立たないとも決心し得ないで愚圖々々した。

岡田からの電話は掛かつて來た時大いに自分の好奇心を動搖させたので、わざ／＼彼に會つて真相を聞き糺さうかとも思つたけれども、一晚經つとそれも面倒になつて、つい其儘にして置いた。

自分は依然として病院の門を潛つたり出たりした。朝九時頃玄關に掛かると、廊下も控所も外來の患者で一杯に埋まつてゐる事があつた。そんな時には世間にも是程病人が有り得るものかとわざと驚いたやうな顔をして、彼等の様子を一顧見渡してから、梯子段に足を掛けた。自分が偶然あの女を見出したのは全く此一瞬間にあつた。あの女といふのは三澤があの女あの女と呼ぶから自分もさう呼ぶのである。

あの女は其時廊下の薄暗い腰掛の隅に丸くなつて横顔丈を見せてゐた。其傍には洗髪を櫛巻にした脊の高い中年の女が立つてゐた。自分の一瞥はまづ其女の後姿の上に落ちた。さうして何だか其處に愚圖愚圖してゐた。すると其年増が向うへ動き出した。あの女は其年増の影から現はれたのである。其時あの女は忍耐の像の様に丸くなつて凝としてゐた。けれども血色にも表情にも苦悶の迹は殆ど見えなかつた。自分分は最初其横顔を見た時、是が病人の顔だらうかと疑つた。たゞ胸が腹に着く程背中を曲けてゐる所に、恐ろしい何物かが潜んでゐる様に思はれて、それが甚だ不快であつた。自分は階段を上りつ、「あの女」の忍耐と、美しい容貌の下に包んでゐる病苦とを想像した。

三澤は看護婦から病院のAといふ助手の話を聞かされてゐた。此Aさんは夜になつて閑になると、好く尺八を吹く若い男であつた。獨身もので病院に寢泊りをして、室は三澤と同じ三階の折れ曲がつた隅にあつた。此間迄始終上履の音をびしやく云はして歩いてゐるが、此二三日丸で顔を見せないで、三澤も自分も、何うかしたのかね位は噂し合つてゐたのである。

看護婦はAさんが時々跛を引いて便所へ行く様子が可笑しいと云つて笑つた。それから病院の看護婦が時々ガーゼと金盥を持つてAさんの部屋へ入つて行く所を見たとも云つた。三澤はさういふ話に興味があるでもなく、又無いでもない様な無愛嬌な顔をして、たゞ「ふん」とか「うん」とか答へてゐた。

彼は又自分に何時迄大阪に居る積りかと聞いた。彼は旅行を断念してから、自分の顔を見るとよく斯う云つた。それが自分には遠慮がましく且催促がましく聞こえて却て厭であつた。

「僕の都合で歸らうと思へば何時でも歸るさ」

「何うか左右して呉れ」

自分は立つて窓から眞下を見下ろした。「あの女」はいくら見ても門の外へ出て來なかつた。

「日の當たる所へわざ／＼出て何を爲てゐるんだ」と三澤が聞いた。

「見てゐるんだ」と自分は答へた。

「何を見てゐるんだ」と三澤が聞き返した。

十九

自分は夫でも我慢して容易に窓側を離れなかつた。つい向うに見える物干に、松だの石榴だのの盆栽が五六鉢並んでゐる傍で、島田に結つた若い女が、しきりに洗濯ものを竿の先に通してゐた。自分は一寸其方を見ては又下を向いた。けれども待ち設けてゐる當人はいつ迄経つても出て來る氣色はなかつた。自分はどう／＼暑さに堪へ切れないうで又三澤の寐床の傍へ來て坐つた。彼は自分の顔を見て、「何うも強情な男だな、他が親切に云つて遣れば遣る程、わざ／＼日の當たる所に顔を曝してゐるんだから。君の顔は眞赤だよ」と注意した。自分は平生から三澤こそ強情な男だと思つてゐた。それで「僕の窓から首を出してゐる

たのは、君の様な無意味な強情とは違ふ。ちやんと目的があつてわざと首を出したんだ」と少し勿體を附けて説明した。其代り肝心の「あの女」の事を却て云ひ悪くして仕舞つた。

程經て三澤は又「先刻は本當に何か見てゐたのか」と笑ひながら聞いた。自分は此時もう氣が變つてゐた。「あの女」を口にするのが愉快だつた。何うせ強情な三澤の事だから、聞けば屹度馬鹿だとか下らなとか云つて自分を冷罵するに違ひないとは思つたが、それも氣にはならなかつた。左右したら實は「あの女」に就いて自分はある原因から特別の興味を有つやうになつたのだ位答へて、三澤を少し焦らして遣らうといふ下心さへ手傳つた。

所が三澤は自分の豫期とは丸で反對の態度で、自分のいふ一句々々をさも感心したらしく聞いてゐた。自分も乗り氣になつて一二分で濟む所を三倍程に語り續けた。一番仕舞に自分の言葉が途切れた時、三澤は「それは無論素人なんぢやなからうな」と聞いた。自分は「あの女」を詳しく説明したけれども、つい藝者といふ言葉を使はなかつたのである。

「藝者ならことによると僕の知つてゐる女かも知れない」
 自分は驚かされた。然し的きり冗談だらうと思つた。けれども彼の眼は其反對を語つてゐた。其癖口元は笑つてゐた。彼は繰り返して「あの女」の眼つきだの鼻つきだのを自分に問うた。自分は梯子段を上る時、其顔を見た限りなので、さう詳しい事は答へられない程であつた。自分にはたゞ背中を折つて重なり合つてゐるやうな憐れな姿勢丈がありくと眼に映つた。

「屹度あれだ。今に看護婦に名前を聞かして遣らう」
 三澤は斯う云つて薄笑ひをした。けれども自分を擔いでる様子は更に見えなかつた。自分は少し釣り込まれた氣味で、彼と「あの女」との關係を聞かうとした。

「今に話すよ。あれだと云ふ事が確かに分つたら」
 そこへ病院の看護婦が「回診です」と注意しに來たので「あの女」の話はそれなり途切れて仕舞つた。自分は回診の混雜を避けるため、時間が來ると席を外して廊下へ出たり、貯水桶のある高い處へ出たりしてゐるが、其日は手近にある帽を取つて、梯子段を下迄降りた。「あの女」がまだ何處かに居さうな氣がするので、自分は玄關の入口に佇んで四方を見廻した。けれども廊下にも控室にも患者の影はなかつた。

二十

其夕方の空が風を殺して静まり返つた灯ともし頃、自分は又曲がりくねつた段々を急ぎ足に三澤の室迄上つた。彼は食後と見えて蒲團の上に胡坐をかいて大きくなつてゐた。

「もう便所へも一人で行くんだ。肴も食つてゐる」
 是が彼の其時の自慢であつた。

窓は三つ共明け放つてあつた。室が三階で前に目を遮るものがないから、空は近くに見えた。其中に燦く星も遠慮なく光を増して來た。三澤は團扇を使ひながら、「蝙蝠が飛んでやしないか」と云つた。看護婦の白い服が窓の傍迄動いて行つて、其胸から上が一寸窓枠の外へ出た。自分は蝙蝠よりも「あの女」の事が氣に掛かつた。「おい、あの事は解つたか」と聞いて見た。

「矢つ張りあの女だ」

三澤は斯う云ひながら、一寸意味のある眼遣ひをして自分を見た。自分は「左右か」と答へた。その調子が餘り高いといふ譯なんだらう、三澤は團扇ではつと自分の顔を扇いだ。さうして急に持ち交へた柄の方を前へ出して、自分達のゐる室の筋向うを指した。

「あの室へ這入つたんだ。君の歸つた後で」

三澤の室は廊下の突き當りで往來の方を向いてゐた。女の室は同じ廊下の角で、中庭の方から明りを取る様に出來てゐた。暑いので兩方共入り口は明けた儘、障子は取り拂つてあつたから、自分のゐる所から團扇の柄で指し示された部屋の入口は、四半分程斜に見えた。然し其處には女の寐て居る床の裾が、晝の模様をやうに三角に少し出てゐる丈であつた。

自分は其蒲團の端を見詰めて少時何も云はなかつた。

「潰瘍の刺しいんだ。血を吐くんだ」と三澤が又小さな聲で告げた。自分は此時彼が無理を遣ると潰瘍になる危険があるから入院したと説明して聞かせた事を思ひ出した。潰瘍といふ言葉は其折自分の頭に何等の印象も與へなかつたが、今度は妙に恐ろしい響を傳へた。潰瘍の陰に、死といふ怖いものが潜んでゐるかのやうに。

しばらくすると、女の部屋で微かにけえ〜といふ聲がした。

「そら吐いてゐる」と三澤が眉をひそめた。やがて看護婦が戸口へ現はれた。手に小さな金盃を持ちながら、草履を突つ掛けて、一寸我々の方を見た儘出て行つた。

「癒りさうなのかな」

自分の眼には、今朝臆を胸に押し附けるやうにして、凝と腰を掛けてゐた美しい若い女の顔がありくと見えた。

「何うだかね。あ、嘔くやうぢや」と三澤は答へた。其表情を見ると氣の毒といふより寧ろ心配さうな或物に囚へられてゐた。

「君は本當にあの女を知つてゐるのか」と自分は三澤に聞いた。

「本當に知つてゐる」と三澤は眞面目に答へた。

「然し君は大阪へ來たのが今度始めてぢやないか」と自分は三澤を責めた。

「今度來て今度知つたのだ」と三澤は辯解した。「此病院の名も實はあの女に聞いたのだ。僕は此處へ

這入る時から、あの女が事によると遣つて來やしないかと心配してゐた。けれども今朝君の話しを聞く迄はよもやと思つてゐた。僕はあの女の病氣に對しては責任があるんだから……」

二十一

大阪へ着くと其儘、友達と一所に飲みに行つた何處かの茶屋で、三澤は「あの女」に會つたのである。

三澤は其時既に暑さのために胃に變調を感じてゐた。彼を強ひた五六人の友達は、久し振だからといふ口實のもとに、彼を酔はせる事を御馳走のやうに振舞つた。三澤も宿命に従ふ柔順な人として、いくらでも盃を重ねた。それでも胸の下の所には絶えず不安な自覺があつた。ある時は變な顔をして苦しうに生唾を呑み込んだ。丁度彼の前に坐つてゐた「あの女」は、大阪言葉で彼に藥を遣らうかと聞いた。彼はジエムか何かを五六粒手の平へ載せて口のなかへ投げ込んだ。すると入れ物を受取つた女も同じ様に白い掌の上に小さな粒を並べて口へ入れた。

三澤は先刻から女の倦怠さうな立ち居に氣を附けてゐたので、御前も何處か悪いのかと聞いた。女は淋しさうな笑ひを見せて、暑い所爲か食欲がちつとも進まないので困つてゐると答へた。ことに此一週間は御飯が厭で、たゞ氷ばかり呑んでゐる、それも今呑んだかと思ふと、すぐ又食べたくなるんで、何うも仕様がなないと云つた。

三澤は女に、それは大方胃が悪いのだらうから、何處かへ行つて専門の大家にでも見せたら好からうと眞面目な忠告をした。女も他に聞くと胃病に違ひないといふから、好い醫者に見せたいのだけれども家業が家業だからと後は云ひ盡つてゐた。彼は其時女から始めて此處の病院と院長の名前を聞いた。

「僕もさう云ふ所へ一寸入つて見ようかな。何うも少し變だ」

三澤は冗談とも本氣ともつかない調子で斯んな事を云つて、女から縁起でもないやうに眉を寄せられた。「夫ぢやまあたんと飲んでから後の事にしよう」と三澤は彼の前にある盃をぐつと干して、それを女の前に突き出した。女は大人しく酌をした。

「君も飲むさ。飯は食へなくつても、酒なら飲めるだらう」

彼は女を前に引き附けて無暗に盃を遣つた。女も素直にそれを受けた。然し仕舞には堪忍して呉れと云ひ出した。それでも凝と坐つた儘席を立たなかつた。

「酒を呑んで胃病の蟲を殺せば飯なんかすぐ喰へる。香まなくつちや駄目だ」

三澤は自暴に酔つた揚句、亂暴な言葉迄使つて女に酒を強ひた。それでゐて、己の胃の中には、今にも爆發しさうな苦しい塊りが、うねりを打つてゐた。

自分は三澤の話しを此處迄聞いて慄とした。何の必要があつて、彼は己の肉體をさう残酷に取り扱つた

のだらう。己は自業自得としても、「あの女」の弱い身體をなんで左右無益に苦しめたものだらう。

「知らないんだ。向うは僕の身體を知らないし、僕は又あの女の身體を知らないんだ。周圍に居るものは又我々二人の身體を知らないんだ。それ計りぢやない、僕もあの女も自分で自分の身體が分らなかつたんだ。其上僕は自分の胃の腑が忌々しくつて堪らなかつた。それで酒の力で一つ壓倒して遣らうと試みたのだ。あの女もことによると、左右かも知れない」

三澤は斯う云つて黯然としてゐた。

二十二

「あの女」は室の前を通つても廊下からは顔の見えない位置に寐てゐた。看護婦は入口の柱の傍へ寄つて覗き込むやうにすれば見えると云つて自分に教へて呉れたけれども、自分にはそれを敢てする程の勇氣がなかつた。

附添ひの看護婦は暑いせるか大概は其柱にもたれて外の方ばかり見てゐた。それが又看護婦としては特別器量が好いので、三澤は時々不平な顔をして人を馬鹿にしてゐる杯と云つた。彼の看護婦はまた別の意味からして、此美しい看護婦を好く云はなかつた。病人の世話を其方退けにするとか、不親切だとか、京都に男があつて、其男から手紙が來たんで夢中なんだとか、色々の事を探つて來ては三澤や自分に報告した。ある時は病人の便器を差し込んだなり、引き出すのを忘れて其儘寐込んで仕舞つた怠慢さへあつたと告げた。

實際この美しい看護婦が器量の優れてゐる割合に義務を重んじなかつた事は自分達の眼にもよく映つた。「ありや取り換へて遣らなくつちや、あの女が可哀さうだね」と三澤は時々苦い顔をした。それでも其看護婦が入口の柱にもたれて、うとくして居ると、彼はわが室の中から其横顔を凝と見詰めて居る事があつた。

「あの女」の病勢も此方の看護婦の口からよく洩れた。——牛乳でも肉汁でも、どんな軽い液體でも狂つた胃が決して受け附けない。肝心の藥さへ厭がつて飲まない。強ひて飲ませると、すぐ戻してしまふ。「血は吐くかい」

三澤は何時でも斯う云つて看護婦に反問した。自分は其言葉を聞くたびに不愉快な刺激を受けた。

「あの女」の見舞客は絶えずあつた。けれども外の室のやうに賑やかな話し聲は丸で聞こえなかつた。自分は三澤の室に寐ころんで「あの女」の室を出たり入つたりする島田や銀杏返しの影をいくつとなく見た。中には眼の覺めるやうに派出な模様の着物を着てゐるものもあつたが、大抵は素人に近い地味な服装で、こつそり來てこつそり出て行くのが多かつた。入口であら姐はんといふ感投詞を用ひたものもあつたが、夫はたゞの一遍に過ぎなかつた。それも廊下の端に洋傘を置いて室の中へ入るや否や急に消えたやう

に静かになつた。

「君はあの女を見舞つて遣つたのか」と自分は三澤に聞いた。

「いゝや」と彼は答へた。「然し見舞つて遣る以上の心配をして遣つてゐる」

「ぢや向うでもまだ知らないんだね。君の此處にゐる事は」

「知らない筈だ、看護婦でも云はない以上は。あの女の入院するとき僕はあの女の顔を見てはつと思つたが、向うでは僕の方を見なかつたから、多分知るまい」

三澤は病院の二階に「あの女」の馴染客があつて、夫が「御前胃のため、わしや腸のため、共に苦しむ酒のため」といふ都々逸を紙片へ書いて、あの女の所へ届けた上、出院のとき袴羽織でわざ／＼見舞に來た話をして、何といふ馬鹿だといふ顔附をした。

「静かにして、刺激のないやうにして遣らなくつちや不可ない。室でもそつと入つて、そつと出て遣るのが當り前だ」と彼は云つた。

「随分静かぢやないか」と自分は云つた。

「病人が口を利くのを厭がるからさ。悪い證據だ」と彼が又云つた。

二十三

三澤は「あの女」の事を自分の豫想以上に詳しく知つてゐた。さうして自分が病院に行くたびに、其話を第一の問題として持ち出した。彼は自分の居ない間に得た「あの女」の内情を、恰も彼と關係ある婦人の内話でも打ち明ける如くに語つた。さうして夫等の知識を自分に與へるのを誇りとする様に見えた。

彼の語る所によると「あの女」はある藝者屋の娘分として大事に取り扱はれる賣れつ子であつた。虚弱な當人は又それを唯一の満足と心得て商賣に勉強してゐた。ちつとやそつと身體が悪くても決して休むやうな横着はしなかつた。時たま堪へられないで床に就く場合でも、早く御座敷に出たいといふのを口癖にしてゐた。……

「今あの女の室に來てゐるのは、其藝者屋に古くからゐる下女さ。名前は下女だけれど、古くからゐるんで、自然権力があるから、下女らしく爲ちやるない。丸で叔母さんか何その様だ。あの女もあの下女のいふ事丈は素直によく聞くので、厭がる薬を吞ませたり、我儘を云ひ募らせないためには必要な人間なんだ」

三澤はすべて斯ういふ内幕の出所をみんな彼の看護婦に歸して、ことごとく彼女から聞いた様に説明した。けれども自分は少し其處に疑はしい點を認めないでもなかつた。自分は三澤が便所へ行つた留守に、看護婦を捕まへて、「三澤はあゝ云つてゐるが、僕の居ないとき、あの女の室へ行つて話してもするんぢやないか」と聞いて見た。看護婦は眞面目な顔をして「そんな事ありやしまへん」といふやうな言葉で、一口

に自分の疑ひを否定した。彼女は夫から左右いふ御客が見舞に行つた所で、身上話などが出来る筈がないと辯解した。さうして「あの女」の病氣が段々險惡の一方へ落ち込んで行く心細い例を話して聞かせた。

「あの女」は吐氣が止まないの、上から營養の取り様がなくなつて、昨日とうとう滋養浣腸を試みた。然し其結果は思はしくなかつた。少量の牛乳と鶏卵を混和した單純な液體ですら衰弱を極めたあの女の腸には荷が重過ぎると見えて豫期通り吸收されなかつた。

看護婦は是丈語つて、この位重い病人の室へ入つて、誰が悠々と身上話などを聞いて居られるものかといふ顔をした。自分も彼女の云ふ所が本當だと思つた。それで三澤の事は忘れて、たゞ綺羅を着飾つた流儀の藝者と、恐ろしい病氣に罹つた憐れな若い女とを、黙つて心のうちに對照した。

「あの女」は器量と藝を賣る御蔭で、何とかいふ藝者屋の娘分になつて家ものから大事がられてゐた。それを賣る事が出来なくなつた今でも、矢張り今迄通り宅のものから大事がられるだらうか。若し彼等の待遇が、あの女の病氣と共に段々輕薄に變つて行くなら、毒惡な病と苦戰するあの女の心は何の位心細いだらう。何うせ藝妓屋の娘分になる位だから、生みの親は身分のあるものでないに極まつてゐる。經濟上の餘裕がなければ、何う心配したつて役には立つまい。

自分は斯んな事も考へた。便所から歸つた三澤に「あの女の本當の親はあるのか知つてるか」と尋ねて見た。

二十四

「あの女」の本當の母といふのを、三澤はたつた一遍見た事があると語つた。

「それもほんの後姿丈さ」と彼はわざ／＼斷つた。

其母といふのは自分の想像通り、あまり樂な身分の人ではなかつたらしい。やつとの思ひで薩張りした身装をして出て来るやうに見えた。たまに來ても左も氣兼ねらしく狐鼠々と來て、何時の間にか、又梯子段を下りて人の氣の附かない様に歸つて行くのださうである。

「いくら親でも、あゝなると遠慮が出来るんだね」と三澤は云つてゐた。

「あの女」の見舞客はみんな女であつた。しかも若い女が多數を占めてゐた。それが又普通の令嬢や細君と違つて、色香を命とする綺麗な人計りなので、其中に交る此母は、唯でさへ燻ぶり過ぎて地味なのである。自分は年を取つた貧しさうな此母の後姿を想像に描いて暗に憐れを催した。

「親子の情合からいふと、娘があんな大病に罹つたら、母たるものは朝晩とも嘸傍に附いて居て遣りた氣がするだらうね。他人の下女が幅を利かしてゐて、實際の親が他人扱ひにされるのは、見てゐても餘り好い心持ちぢやない」

「いくら親でも仕方がないんだよ。だいち傍にゐてやる程の時間もなし、時間があつても入費がないん

だから」

自分は情ない気がした。あ、云ふ浮いた家業をする女の平生は羨ましい程派出でも、いざ病氣となると、普通の人よりも悲酸の程度が一層甚しいのではないかと考へた。

「旦那が附いてるさうなものだかな」

三澤の頭も此點丈は注意が足りなかつたと見えて、自分が斯う不審を打つたとき、彼は何の答もなく黙つてゐた。あの女に關して一切の新知識を供給する看護婦も其處へ行くと何の役にも立たなかつた。

「あの女」の蚊弱い身體は、其頃の暑さでも何うか斯うか持ち應へてゐた。三澤と自分はそれを殆ど奇蹟の如くに語り合つた。其癖兩人とも露骨を憚つて、つひぞ柱の影から室の中を覗いて見た事がないので、現在の「あの女」が何の位置れてゐるかは空しい想像畫に過ぎなかつた。滋養浣腸さへ思はしく行かなかつたといふ報知が、自分等二人の耳に届いた時ですら、三澤の眼には美しく着飾つた藝者の姿より外に映るものはなかつた。自分の頭にも、唯血色の悪くない入院前の「あの女」の顔が描かれる丈であつた。それで二人共あの女は最う六づかしいだらうと話し合つてゐた。さうして實際は雙方共死ぬとは思はなかつたのである。

同時に色々な患者が病院を出たり入つたりした。ある晩「あの女」と同じ位な年配の二階に居る婦人が、廊下で下へ運ばれて行つた。聞いて見ると、今日明日にも變がありさうな危険な所を、附添ひの母が田舎へ連れて歸るのであつた。其母は三澤の看護婦に、氷計りも二十何圓とか遣つたと云つて、何うしても退院するより外に途がないとわが窮狀を仄めかしたさうである。

自分は三階の窓から、田舎へ歸る釣臺を見下ろした。釣臺は暗くて見えなかつたが、用意の提灯の灯はやがて動き出した。窓が高いのと往來が狭いので、灯は谷の底をひそかに動いて行くやうに見えた。それが向うの暗い四つ角を曲がつてふつと消えた時、三澤は自分を願つて歸り着く迄持てば好いがな」と云つた。

二十五

斯んな悲酸な退院を餘儀なくされる患者があるかと思ふと、毎日子供を負ぶつて、廊下だの物見臺だの他人の室だのを、ぶら／＼廻つて歩く香氣な男もあつた。

「丸で病院を娯樂場のやうに思つてるんだね」

「第一何方が病人なんだらう」

自分達は可笑しくもあり又不思議でもあつた。看護婦に聞くと、負ぶつてゐるのは叔父で、負ぶさつてゐるのは甥であつた。此甥が入院當時骨と皮計りに瘠せてゐたのを叔父の丹精一つでこの位肥つたのださうである。叔父の商賣はメリヤス屋だとか云つた。いづれにしても金に困らない人なのだらう。

三澤の一軒置いて隣には又變な患者がゐる。手提鞆杯を提げて、普通の人間の如く平氣で出歩いた。時には病院を空ける事さへあつた。歸つて來ると素つ裸體になつて、病院の飯を旨さうに食つた。さうして昨日は一寸神戸まで行つて來ました杯と澄ましてゐた。

岐阜からわざ／＼本願寺參りに京都迄出て來た序に、夫婦共此病院に這入つたなり動かないのもゐた。其夫婦ものの室の床には後光の射した阿彌陀様の軸が懸けてあつた。二人差向ひで氣樂さうに碁を打つてゐる事もあつた。それでも細君に聞くと、此春餅を食つた時、血を猪口に一杯半程吐いたから伴れて來たのだと勿體らしく云つて聞かせた。

「あの女」の看護婦は依然として入口の柱に靠れて、わが膝を両手で抱いてゐる事が多かつた。此方の看護婦はそれを又器量を鼻へ掛けて、わざ／＼あんな人の眼に着く所へ出るのだと評してゐた。自分は「まさか」と云つて辯護する事もあつた。けれども「あの女」と其美しい看護婦との關係は、冷淡さ加減の程度に於て、當初も其時もあり變りがないやうに見えた。自分は器量好しが二人寄つて、我知らず互に嫉み合ふのだらうと説明した。三澤は、さうぢやない、大阪の看護婦は氣位が高いから、藝者杯を眼下に見て、始めから相手にならないんだ、それが冷淡の原因に違ひないと主張した。斯う主張しながらも彼は別に此看護婦を惡む様子はなかつた。自分もこの女に對して左程厭な感じは有つてゐなかつた。醜い三澤の附添ひは「本間に器量の好いものは徳やな」と云つた風の、自分達には變に響く言葉を使つて、二人を笑はせた。

こんな周圍に取り圍まれた三澤は、身體の回復するに従つて、「あの女」に對する興味を日に増し加へて行くやうに見えた。自分は已むを得ず興味といふ妙な熟字を此處に用ひるのは、彼の態度が戀愛でもなければ、又全くの親切でもなく、興味の二字で現はすより外に、適切な文字が一寸見當たらなからである。始めて「あの女」を控室で見たときは、自分の興味も三澤に譲らない位鋭かつた。けれども彼から「あの女」の話が聞かされるや否や、主客の別は既に附いて仕舞つた。それからと云ふもの、「あの女」の噂が出る度に、彼は何時でも先輩の態度を取つて自分に向つた。自分も一時は彼に釣り込まれて、當初の興味が段々研ぎ澄まされて行く様な氣分になつた。けれども客の位置に据ゑられた自分はそれ程長く興味の高潮を保ち得なかつた。

二十六

自分の興味が強くなつた頃、彼の興味は自分より一層強くなつた。自分の興味が稍衰へかけると、彼の興味は益強くなつて來た。彼は元來が打つ切ら棒の男だけれども、胸の奥には人一倍優しい感情を有つてゐた。さうして何か事があると急に熱する癖があつた。

自分は既に院内をぶら／＼する程に回復した彼が、何故「あの女」の室へ入り込まないかを不審に思つ

た。彼は決して自分の様な羞恥家ではなかつた。同情の言葉を掛けに、一遍會つた「あの女」の病室へ見舞に行く位の事は彼の性質から見て何でもなかつた。自分は「そんなにあの女が氣になるなら、直かに行つて、會つて慰めて遣れば好いぢやないか」と迄云つた。彼は「うん、實は行きたいのだが……」と溢つてゐた。實際これは彼の平生にも似合はない挨拶であつた。さうして其意味は解らなかつた。解らなかつたけれども、本當は彼の行かない方が、自分の希望であつた。

ある時自分は「あの女」の看護婦から——自分と此美しい看護婦とは何時の間にか口を利く様になつてゐた。尤もそれは彼女が例の柱に倚りかゝつて、其前を通る自分の顔を見上げるときに、時候の挨拶を取り換はず位な程度に過ぎなかつたけれども、——兎に角此美しい看護婦から自分は運勢早見なんかいふ、玩具の占ひの本見た様なものを借りて、三澤の室でそれを遣つて遊んだ。

是は赤と黒と両面に塗り分けた基石のやうな丸く平たいものを幾何か持つて、それを眼を眠つた儘疊の上へ竝べて置いて、赤が若干黒が若干と後から勘定するのである。それから其數字を一つは横へ、一つは豎に繰つて、兩方が一點に會した所を本で引いて見ると、辻占のやうな文句が出る事になつてゐた。

自分が眼を閉ぢて、石を一つく疊の上に置いたとき、看護婦は赤がいくつ黒がいくつと云ひながら占ひの文句を繰つて呉れた。すると、「此戀若し成就する時は、大いに恥を搔く事あるべし」とあつたので、彼女は讀みながら吹き出した。三澤も笑つた。

「おい氣を附けなくつちや不可ないぜ」と云つた。三澤は其前から「あの女」の看護婦に自分が御辭儀をする所が變だと云つて、始終自分に調戲つてゐたのである。

「君こそ少し氣を附けるが好い」と自分は三澤に竹篋返しを喰はして遣つた。すると三澤は眞面目な顔をして、「何故」と反問して來た。此場合此強情な男にこれ以上いふと、事が面倒になるから自分は黙つてゐた。

實際自分は三澤が「あの女」の室へ出入りする氣色のないのを不審に思つてゐたが、一方では又彼の熱し易い性質を考へて、今迄は兎に角、是から先彼が何時何う變返るかも知れないと心配した。彼は既に下の洗面所迄行つて、朝毎に顔を洗ふ位の氣力を回復してゐた。

「何うだもう好い加減に退院したら」

自分は斯う勸めて見た。さうして萬一金錢上の關係で退院を躊躇するやうすが見えたら、彼が自宅から取り寄せる手間と時間を省くため、自分が思ひ切つて一つ岡田に相談して見ようと迄思つた。三澤は自分の云ふ事には何の返事も與へなかつた。却て反對に「一體君はいつ大阪を立つ積りだ」と聞いた。

自分は二日前に天下茶屋のお兼さんから不意に訪問を受けた。其結果として此間岡田が電話口で自分に

話し掛けた言葉の意味を漸く知つた。だから自分は此時既に一週間内に自分を驚かして見せるといつた彼の豫言の爲に縛られてゐた。三澤の病氣、美しい看護婦の顔、聲も姿も見えない若い藝者と、其人の一時折り合つてゐる蒲團の上の狭い生活、——自分は單にそれ等ばかりで大阪に愚圖ついで居るのではなかつた。詩人の好きな言語を借りて云へば、ある豫言の實現を期待しつゝ、暑い宿屋に泊つてゐたのである。

「僕には左右いふ事情があるんだから、もう少し此處に待つてゐなければならぬのだ」と自分は大人しく三澤に答へた。すると三澤は多少残念さうな顔をした。

「ちや一所に海邊へ行つて静養する譯にも行かないな」

三澤は變な男であつた。此方が大事がつて遣る間は、向うで何時でも跳ね返すし、此方が退かうとする時、急に又他の袂を捕まへて放さないし、と云つた風に氣分の出入りが著しく眼に立つた。彼と自分との交際は從來何時でも斯ういふ消長を繰り返しつゝ、今日に至つたのである。

「海岸へ一所に行く積りででもあつたのか」と自分は念を押して見た。

「無いでもなかつた」と彼は遠くの海岸を眼の中に思ひ浮かべるやうな風をして答へた。其時の彼の眼には、實際「あの女」も「あの女」の看護婦もなく、たゞ自分といふ友達がある丈のやうに見えた。

自分は其日、快く三澤に別れて宿へ歸つた。然し歸り路に、その快く別れる前の不愉快さも考へた。自分は彼に病院を出ると勧めた、彼は自分に何時迄大阪にゐるのだと尋ねた。上部にあらはれた言葉の遣り取りはたゞ是丈に過ぎなかつた。然し三澤も自分も其處に變な苦い意味を味はつた。

自分の「あの女」に對する興味は衰へたけれども、自分は何うしても三澤と「あの女」とをさう懇意にしたくなかつた。三澤も又、あの美しい看護婦を何うする了簡もない癖に、自分丈が段々彼女に近づいて行くのを見て、平氣でゐる譯には行かなかつた。其處に自分達の心附かない暗闘があつた。其處に持つて生れた人間の我儘と嫉妬があつた。其處に調和にも衝突にも發展し得ない、中心を缺いた興味があつた。要するに其處には性の争ひがあつたのである。さうして兩方共それを露骨に云ふ事が出来なかつたのである。

自分は歩きながら自分の卑怯を恥ぢた。同時に三澤の卑怯を悪んだ。けれども淺間しい人間である以上、是から先何年交際を重ねても、此卑怯を抜く事は到底出来ないんだといふ自覺があつた。自分は其時非常に心細くなつた。かつ悲しくなつた。

自分は其明日病院へ行つて三澤の顔を見るや否や、「もう退院は勧めない」と斷つた。自分は手を突いて彼の前に自分の罪を詫びる心持で斯う云つたのである。すると三澤は「いや僕もさう愚圖々々してはゐられない。君の忠告に従つて愈出る事にした」と答へた。彼は今朝院長から退院の許可を得た旨を話して、「あまり動くと思ひさうだから寢臺で東京迄直行する事にした」と告げた。自分は其突然なのに驚いた。

「何うして又左右急に退院する氣になつたのか」

自分は斯う聞いて見ないではゐられなかつた。三澤は自分の問に答へる前に凝と自分の顔を見た。自分
はわが顔を通して、わが心を讀まれるやうな氣がした。

「別段是といふ譯もないが、もう出る方が好からうと思つて……」

三澤は是ぎり何も云はなかつた。自分も黙つてゐるより外に仕方がなかつた。二人は何時もより沈んで
相對してゐた。看護婦は既に歸つた後なので、室の中はことに淋しかつた。今迄蒲團の上に胡坐を
かいてゐた彼は急に倒れるやうに仰向きに寝た。さうして上眼を使つて窓の外を見た。外には何時ものやうに色
の強い青空が、ぎらくする太陽の熱を一面に漲らしてゐた。

「おい君」と彼はやがて云つた。「よく君の話す例の男ね。あの男は金を持つてゐないかね」

自分は固より岡田の經濟事情を知らう筈がなかつた。あの始末屋のお兼さんの事を考へると、金といふ
言葉を口から出すのも厭だつた。けれどもいざ三澤の出院となれば、其位な手数は厭ふまいと、昨日既に
覺悟を極めた所であつた。

「節儉家だから少しは持つてゐたらう」

「少して好いから借りて來て呉れ」

自分は彼が退院するに就いて會計へ拂ふ入院料に困るのだと思つた。それで何の位不足なのかを確めた。
所が事實は案外であつた。

「此處の拂ひと東京へ歸る旅費位は何うか斯うか持つてゐるんだ。夫丈なら何も君を煩はす必要はな
い」

彼は大した物持ちの家に生れた果報者でもなかつたけれども、自分が一人息子だけに、斯ういふ點に掛
けると、自分達より餘程自由が利いた。其上母や親類のものから京都で買物を頼まれたのを、新しい道伴
れが出来たためつい大阪迄乗り越して、未だに手を着けない金が餘つてゐたのである。

「ぢや唯用心の爲に持つて行かうと云ふんだね」

「いや」と彼は急に云つた。

「ぢや何うするんだ」と自分は問ひ詰めた。

「何うしても僕の勝手だ。たゞ借りて呉れさへすれば好いんだ」

自分は又腹が立つた。彼は自分を丸で他人扱ひにしてゐるのである。自分は憤として黙つてゐた。

「怒つちや不可ない」と彼が云つた。「隠すんぢやない、君に關係のない事を、わざと吹聴する様に見
えるのが厭だから、知らせずに置かうと思つた丈だから」

自分はまだ黙つてゐた。彼は寐ながら自分の顔を見上げてゐた。

「そんなら話すがね」と彼が云ひ出した。「僕はまだあの女を見舞つて遣らない。向うでもそんな事は待ち受けてやしないだらうし、僕も必ず見舞に行かなければならない程の義理はない。が、僕は何だかあの女の病氣を危険にした本人だといふ自覺が何うしても退かない。それで何方が先へ退院するにしても、其間に一度會つて置きたいと始終思つてゐた。見舞ぢやない、詫る爲にだよ。氣の毒な事をしたと一口詫れば夫で好いんだ。けれども只詫る譯にも行かないから、それで君に頼んで見たのだ。然し君の方都合が悪ければ強ひて左右して貰はないでも何うかなるだらう。宅へ電報でも掛けたら」

二十九

自分へ行掛り上一應岡田に當たつて見る必要があつた。宅へ電報を打つといふ三澤を一寸待たして、ふらりと病院の門を出た。岡田の勤めてゐる會社は、三澤の室とは反對の方向にあるので、彼の窓から眺める譯には行かないけれども、道程からいふと幾何もなかつた。それでも暑いので歩いて行くうちに汗が背中を濡らす程出た。

彼は自分の顔を見るや否や、左も久し振に會つた人らしく「やつ暫く」と叫ぶやうに云つた。さうして是迄度々電話で繰り返した挨拶を又新しくまのあたり述べた。

自分と岡田とは今でこそ少し改まつた言葉使ひもするが、昔を云へば、何の遠慮もない間柄であつた。其頃は金も少しは彼の爲に融通して遣つた覚えがある。自分は勇氣を鼓舞する爲に、わざと其當時の記憶を呼び起して掛かつた。何も知らない彼は、立ちながら元氣な聲を出して、「何うです二郎さん、僕の豫言は」と云つた。「何うか斯うか一週間うちに貴方を驚かす事が出来さうぢやありませんか」

自分は思ひ切つて、先づ肝心の用事を話した。彼は案外な顔をして聞いてゐるが、聞いて仕舞ふとすぐ、「宜うがす、其位なら何うでもします」と容易に引き受けて呉れた。

彼は固より其隠袋の中に入用の金を持つてゐなかつた。「明日でも好いんでせう」と聞いた。自分は又思ひ切つて、「出来るなら今日中に欲しいんだ」と強ひた。彼は一寸當惑した様に見えた。

「ぢや仕方がない迷惑でせうけれども、手紙を書きますから、宅へ持つて行つてお兼に渡して下さいませんか」

自分は此事件に就いてお兼さんと直接の交渉は成るべく避けたかつたけれども、此場合已むを得なかつたので、岡田の手紙を懐へ入れて、天下茶屋へ行つた。お兼さんは自分の聲を聞かぬや否や上り口迄馳け出して来て、「此御暑いのに好くまあ」と驚いて呉れた。さうして「さあ何うぞ」を二三返繰り返したが、自分は立つた儘「少し急ぎますから」と斷つて、岡田の手紙を渡した。お兼さんは上り口に兩膝を突いたなり封を切つた。

「何うもわざわざ／＼恐れ入りましたね。夫ではすぐ御供をして参りますから」とすぐ奥へ入つた。奥では用算笥の環の鳴る音がした。

自分はお兼さんと電車の終點迄一所に乗つて来て其處で別かれた。「では後程」と云ひながらお兼さんは洋傘を開いた。自分は又俵を急がして病院へ歸つた。顔を洗つたり、身體を拭いたり、少時三澤と話してゐるうちに、自分は待ち設けた通りお兼さんから病院の玄關迄呼び出された。お兼さんは帯の間にある銀行の帳面を抜いて、其處に挟んであつた札を自分の手の上に乗せた。

「では何うぞ一寸御改めなすつて」

自分は形式的にそれを勘定した上、確かに。——どうも飛んだ御手数を掛けました。御暑い所を」と禮を述べた。實際急いだと見えてお兼さんは富士額の兩脇を、細かい汗の玉でじつとりと濡らしてゐた。

「何うです、ちつと上がつて涼んで入らしたつたら」

「いゝえ今日は急ぎますから、是で御免を蒙ります。御病人へ何うぞ宜しく。——でも結構で御座いましたね、早く御退院になれて。一時は宅でも大層心配致しまして、よく電話で御様子を伺つたとか申して居りましたが」

お兼さんは斯んな愛想を云ひながら、又例のクリーム色の洋傘を開いて歸つて行つた。

三十

自分は少し急ぎ込んでゐた。紙幣を握つた儘段々を馳け上がるやうに三階迄來た。三澤も平生よりは落ち附いてゐなかつた。今火を點けた計りの巻煙草をいきなり灰吹の中に放り込んで、難有うともいはずに、自分の手から金を受取つた。自分は渡した金の高を注意して、「好いか」と聞いた。夫でも彼は只うんと云つた丈である。

彼は凝と「あの女」の室の方を見詰めた。時間の具合で、見舞に來たものの草履は一足も廊下の端に脱ぎ棄ててなかつた。平生から靜か過ぎる室の中は、殊に寂寞としてゐた。例の美しい看護婦は相變らず角の柱に倚りかゝつて、産婆學の本か何か讀んでゐた。

「あの女は寐てゐるのかしら」

彼は「あの女」の室へ入るべき好機會を見出だしながら、却て其眠りを妨げるのを恐れるやうに見えた。「寐てゐるかも知れない」と自分も思つた。

しばらくして三澤は小さな聲で「あの看護婦に都合を聞いて貰はうか」と云ひ出した。彼はまだ此看護婦に口を利いた事がないといふので、自分が其役を引き受けなければならなかつた。

看護婦は驚いたやうな又可笑しいやうな顔をして自分を見た。けれどもすぐ自分の眞面目な態度を認め

て、室の中へ入つて行つた。かと思ふと、二分と経たないうちに笑ひながら又出て來た。さうして今丁度氣分の好い所だから御目に掛かれるといふ患者の承諾をもたらしした。三澤は黙つて立ち上がった。

彼は自分の顔を見ず、又看護婦の顔も見ず、黙つて立つたなり、すつと「あの女」の室の中へ姿を隠した。自分は元の座に坐つて、ほんやり其後影を見送つた。彼の姿が見えなくなつても矢張り空に同じ所を見詰めてゐた。冷淡なのは看護婦であつた。一寸侮蔑の微笑を唇の上に漂はせて自分を見たが、それなり元の通り柱に脊を倚せて、黙つて讀みかけた書物をまた膝の上にひろげ始めた。

室の中は三澤の入つた後も彼の入らない前も同じ様に静かであつた。話し聲杯は無論聞こえなかつた。看護婦は時々不意に眼を上げて室の奥の方を見た。けれども自分には何の相圖もせず、すぐ其眼を頁の上に落とした。

自分は此三階の宵の間に蟲の音らしい涼しさを聴いた例はあるが、晝のうちに八釜しい蟬の聲はつひぞ自分の耳に届いた事がない。自分のたつた一人で坐つてゐる病室は其時明らかな太陽の光を受けながら、真夜中よりも猶静かであつた。自分は此死んだやうな静かさのために、却て神経を焦つかせて、「あの女」の室から三澤の出るのを待ちかねた。

やがて三澤はのつそりと出て來た。室の敷居を跨ぐ時、微笑しながら「御邪魔さま。大勉強だね」と看護婦に挨拶する言葉丈が自分の耳に入つた。

彼は上草履の音をわざとらしく高く鳴らして、自分の室に入るや否や、「やつと濟んだ」と云つた。自分は「何うだつた」と聞いた。

「やつと濟んだ。是でもう出てもいい」
三澤は同じ言葉を繰り返す丈で、其他には何も云はなかつた。自分もそれ以上は聞き得なかつた。兎も角も退院の手續を早くする方が便利だと思つて、其處らに散らばつてゐるものを片付け始めた。三澤も固より癡としてはゐらなかつた。

三十一

二人は俵を雇つて病院を出た。先へ梶棒を上げた三澤の車夫が餘り威勢よく馳けるので、自分は大きな聲でそれを留めようとした。三澤は後を振り向いて、手を振つた。「大丈夫、大丈夫」と云ふらしく聞こえたから、自分もそれなりにして注意はしなかつた。宿へ着いたとき、彼は川縁の欄干に両手を置いて、眼の下の広い流れを凝と眺めてゐた。

「何うした。心持でも悪いか」と自分は後から聞いた。彼は後を向かなかつた。けれども「い、や」と答へた。「此處へ來て此河を見る迄此室の事を丸で忘れてゐた」
左右いつて、彼は依然として流れに向つてゐた。自分は彼を其儘にして、麻の座蒲團の上に胡坐をかい



た。それでも待ち遠しいので、やがて袂から敷島の袋を出して、煙草を吸ひ始めた。其煙草が三分の一煙になつた頃、三澤は漸く手摺を離れて自分の前へ来て坐つた。

「病院で暮らしたのも、つい昨日今日の様だが、考へて見ると、もう大分になるんだね」と云つて指を折りながら、日数を勘定し出した。

「三階の光景が當分眼を離れないだらう」と自分は彼の顔を見た。

「思ひも寄らない経験をした。是も何かの因縁だらう」と三澤も自分の顔を見た。

彼は手を叩いて、下女を呼んで今夜の急行列車の寢臺を注文した。それから時計を出して、食事を済ました後、時間に何の位餘裕があるかを見た。窮屈に馴れない二人はやがて轉りと横になつた。

「あの女は癒りさうなのか」

「さうさな。事によると癒るかも知れないが……」

下女が誂へた水菓子を鉢に盛つて、梯子段を上がつて來たので、「あの女」の話しは是で切れて仕舞つた。自分は寐轉んだ儘、水菓子を食つた。其間彼はたゞ自分の口の邊を見る計りで、何事も云はなかつた。仕舞に左も病人らしい調子で、「己も食ひたいな」と一言云つた。先刻から浮かない様子を見てゐた自分は、「構ふものか、食ふが好い。食へ食へ」と勧めた。三澤は幸ひにして自分が氷菓子を食はせまいとした彼の日の出來事を忘れてゐた。彼はたゞ苦笑ひをして横を向いた。

「いくら好きだつて、悪いと知りながら、無理に食はせられて、あの女の様になつちや大變だからな」

彼は先刻から「あの女」の事を考へてゐるらしかつた。彼は今でも「あの女」の事を考へてゐるとしか

思はれなかつた。

「あの女は君を覚えてゐたかい」

「覚えてゐるさ。此間會つて、僕から無理に酒を呑まされた計りだもの」

「恨んでゐたらう」

今迄横を向いてそつほへ口を利いてゐた三澤は、此時急に顔を向け直してきつと正面から自分を見た。其變化に氣の附いた自分はすぐ眞面目な顔をした。けれども彼があの子の室に入つた時、二人の間に何んな談話が交換されたかに就いて、彼は遂に何事をも語らなかつた。

「あの女はことによると死ぬかも知れない。死ぬばもう會ふ機會はない。萬一癒るとしても、矢つ張り會ふ機會はなからう。妙なものだね。人間の離合といふと大袈裟だが。それに僕から見れば實際離合の感があるんだからな。あの女は今夜僕の東京へ歸る事を知つて、笑ひながら御機嫌よう云つた。僕は其淋しい笑ひを、今夜何だか汽車の中で夢に見さうだ」

三澤は唯斯う云つた。さうして夢に見ない先から既に「あの女」の淋しい笑ひ顔を眼の前に浮かべてる様に見えた。三澤に感傷的の所があるのは自分もよく承知してゐるが、單にあれ丈の關係で、是程あの女に動かされるのは不審であつた。自分は三澤と「あの女」が別かれる時、何んな話しをしたか、詳しく聞いて見ようと思つて、少し水を向け掛けたが、何の効果もなかつた。しかも彼の態度が惜しいものを半分他に配けてやると、半分無くなるから厭だといふ風に見えたので、自分は益變な氣持がした。

「そろ／＼出掛けようか。夜の急行は込むから」ととう／＼自分の方で三澤を促すやうになつた。

「まだ早い」と三澤は時計を見せた。成程汽車の出る迄にはまだ二時間許り餘つてゐた。もう「あの女」の事は聞くまいと決心した自分は、成るべく病院の名前を口へ出さずに、寐轉びながら彼と通り一遍の世間話を始めた。彼は其時人並の受け答へをした。けれども何處か調子に乗らない所があるので、何となく不愉快さうに見えた。夫でも席は動かなかつた。さうして仕舞には黙つて河の流ればかり眺めてゐた。

「まだ考へてゐる」と自分は大きな聲を出してわざと叫んだ。三澤は驚いて自分を見た。彼は斯ういふ場合にきつと、御前はザルガーだと云ふ眼附をして、一瞥の侮辱を自分に與へなければ承知しなかつたが、此時に限つてそんな様子はちつとも見せなかつた。

「うん考へてゐる」と軽く云つた。「君に打ち明けようか、打ち明けまいかと迷つてゐる所だ」と云つた。

自分は其時彼から妙な話を聞いた。さうして其話が直接「あの女」と何の關係もなかつたので猶更意外の感に打たれた。

今から五六年前彼の父がある知人の娘を同じくある知人の家に嫁らした事があつた。不幸にも其娘さんはある纏綿した事情のために、一年経つか経たないうちに、夫の家を出る事になつた。けれども其處にも亦複雑な事情があつて、すぐ吾家に引き取られて行く譯に行かなかつた。それで三澤の父が仲人といふ義理合から當分此娘さんを預かる事になつた。——三澤は一旦嫁いで出て来た女を娘さん娘さんと云つた。

「其娘さんは餘り心配した爲だらう、少し精神に異状を呈してゐた。それは宅へ来る前か、或は来てからか好く分らないが、兎に角宅のものが氣が附いたのは来てから少し経つてからだ。固より精神に異状を呈してゐるには相違なからうが、一寸見たつて少しも分らない。たゞ黙つて鬱ぎ込んでゐる丈なんだから。所が其娘さんが……」

三澤は此處迄来て少し躊躇した。

「其娘さんが可笑しな話をするやうだけれども、僕が外出すると屹度玄關迄送つて出る。いくら隠れて出ようとしても屹度送つて出る。さうして必ず、早く歸つて来て頂戴ねと云ふ。僕がえ、早く歸りますから大人しくして待つて入らつしやいと返事をすれば合點々々をする。もし黙つてゐると、早く歸つて来て頂戴ね、ね、と何度でも繰り返す。僕は宅のものに對して極りが悪くつて仕様がなかつた。けれども亦此

娘さんが不憫で堪らなかつた。だから外出しても成るべく早く歸る様に心掛けてゐた。歸ると其人の傍へ行つて、立つた儘只今と一言必ず云ふ事にしてゐた」

三澤は其處へ来て又時計を見た。

「まだ時間はあるね」と云つた。

三十三

其時自分は是限りで其娘さんの話を止められてはと思つた。幸ひに時間がまだ大分あつたので、自分の方から何とも云はない先に彼は又語り續けた。

「宅のものが其娘さんの精神に異状があるといふ事を明らかに認め出してからはまだ可かつたが、知らないうちは今云つた通り僕も其娘さんの露骨なのに随分弱らせられた。父や母は苦い顔をする。臺所のものは内所でくすくす笑ふ。僕は仕方がないから、其娘さんが僕を送つて玄關迄来た時、烈しく怒り附けて遣らうかと思つて、二三度後を振り返つて見たが、顔を合はせるや否や、怒る所か、邪慳な言葉などは可哀さうで到底口から出せなくなつて仕舞つた。其娘さんは蒼い色の美人だつた。さうして黒い眉毛と黒い大きな眸を有つてゐた。其黒い眸は始終遠くの方の夢を眺めてゐるやうに恍惚と潤つて、其處に何だか便のなささうな憐れを漂はせてゐた。僕が怒らうと思つて振り向くと、其娘さんは玄關に膝を突いたなり恰も自分の孤獨を訴へるやうに、其黒い眸を僕に向けた。僕は其度に娘さんから、斯うして生きてゐてもたつた一人で淋しくつて堪らないから、何うぞ助けて下さいと袖に縋られるやうに感じた。——其眼がだよ。其黒い大きな眸が僕にさう訴へるのだよ」

「君に惚れたのかな」と自分は三澤に聞きたくなつた。

「それがさ。病人の事だから戀愛なんだか病氣なんだか、誰にも解る筈がないさ」と三澤は答へた。

「色情狂つていふのは、其んなもんぢやないのかな」と自分は又三澤に聞いた。

三澤は厭な顔をした。

「色情狂と云ふのは、誰にでも枝垂れ懸かるんぢやないか。其娘さんはたゞ僕を玄關迄送つて出て来て、早く歸つて来て頂戴ねと云ふ丈なんだから違ふよ」

「左右か」

自分の其時の返事は全く光澤がなさ過ぎた。

「僕は病氣でも何でも構はないから、其娘さんに思はれたいのだ。少なくとも僕の方ではさう解釋してゐたいのだ」と三澤は自分を見詰めて云つた。彼の顔面の筋肉は寧ろ緊張してゐた。「所が事實は何うも左右でないらしい。其娘さんの片附いた先の旦那といふのが放蕩家なのか交際家なのか知らないが、何でも新婚早々たびく家を空けたり、夜遅く歸つたりして、其娘さんの心を散々苛め抜いたらしい。けれど

も其娘さんは一口も夫に對して自分の苦しみを言はずに我慢してゐたのだね。その時の事が頭に祟つてゐるから、離婚になつた後でも旦那に云ひたかつた事を病氣のせるで僕に云つたのださうだ。——けれども僕はさう信じたくない。強ひても左右でないと思ひてゐたい」

「それ程君は其娘さんが氣に入つてたのか」と自分は又三澤に聞いた。

「氣に入るやうになつたのさ。病氣が悪くなればなる程」

「それから。——其娘さんは」

「死んだ。病院へ入つて」

自分は默然とした。

「君から退院を勧められた晩、僕は其娘さんの三回忌を勘定して見て、單にその爲丈でも歸りたくなくなつた」と三澤は退院の動機を説明して聞かせた。自分はまた黙つてゐた。

「あ、肝心の事を忘れた」と其時三澤が叫んだ。自分は思はず「何だ」と聞き返した。

「あの女の顔がね。實は其娘さんに好く似て居るんだよ」

三澤の口元には解つたらうと云ふ一種の微笑が見えた。二人はそれからちぎに梅田の停車場へ俵を急がした。場内は急行を待つ乗客で既に一杯になつてゐた。二人は橋を向うへ渡つて上り列車を待ち合はせた。列車は十分と立たないうちに地を動かして來た。

「又會はう」

自分は「あの女」の爲に、又「其娘さん」の爲に三澤の手を固く握つた。彼の姿は列車の音と共に忽ち暗中に消えた。

自分は三澤を送つた翌日又母と兄夫婦とを迎へるため同じ停車場に出掛けなければならなかつた。自分から見ると殆ど想像さへ附かなかつた此出来事を、始めから工夫して、とう／＼それを物にする迄漕ぎ附けたものは例の岡田であつた。彼は平生からよくこんな技巧を弄して其成效に誇るのが好きであつた。自分をわざ／＼電話口へ呼び出して、其内屹度自分を驚かして見せると斷つたのは彼である。それから程なく、お兼さんが宿屋へ尋ねて来て、其譯を話した時には、自分も實際驚かされた。

「何うして来るんです」と自分は聞いた。

自分が東京を立つ前に、母の持つてゐた、或場末の地面が、新たに電車の布設される通路に當たるとかで其前側を幾坪か買ひ上げられると聞いたとき、自分は母に「ぢや其金で此夏みんなを連れて旅行なさい」と勸めて、「また二郎さんの御株が始まつた」と笑はれた事がある。母はかねてから、若し機會があつたら京大阪を見たいと云つてゐたが、或は其金が手に入つた所へ、岡田からの勧誘があつたため、斯う大袈裟な計畫になつたのではなからうか。それにしても岡田が又何でそんな勧誘をしたものだらう。

「何といふ大した考へもないんで御座いませう。たゞ昔御世話になつた御禮に御案内でもする氣なんでせう。それに彼の事も御座いますから」

お兼さんの「彼の事」といふのは例の結婚事件である。自分はいくらもお貞さんが母の御氣に入りだつて、其爲に彼女がわざ／＼大阪三界迄出て来る筈がないと思つた。

自分は其時既に懐が怪しくなつてゐた。其上後から三澤のために岡田に若干の金額を借りた。外の意味は別として、母と兄夫婦の來るのは此不足填補の方便として自分には好都合であつた。岡田もそれを知つて快く此方の要る丈すぐ用立てて呉れたに違ひなからうと思つた。

自分は岡田夫婦と一所に停車場に行つた。三人で汽車を待ち合はしてゐる間に岡田は、「何うです。二郎さん喫驚したでせう」といつた。自分は是と類似の言葉を、彼から何遍も聞いてゐるので、何とも答へなかつた。お兼さんは岡田に向つて、「あなた此間から獨りで御得意なのね。二郎さんだつて聞き飽きて入らつしやるわ。そんな事」と云ひながら自分を見て「ねえ貴方」と詫るやうに附け加へた。自分はお兼さんの愛嬌のうちに、何處となく黒人らしい媚びを認めて、急に返事の調子を狂はせた。お兼さんは素知らぬ風をして岡田に話し掛けた。

「奥さまも大分御目に懸からないから、随分御變りになつたでせうね」
「此前會つた時は矢つ張り元の叔母さんさ」

岡田は自分の母の事を叔母さんと云ひ、お兼さんは奥様といふのが、自分には變に聞こえた。

「始終傍にゐると、變るんだか變らないんだか分りませんよ」と自分は答へて笑つてゐるうちに汽車が着いた。岡田は彼等三人の爲に特別に宿を取つて置いたとかいつて、直ちに俵を南へ走らした。自分は空に乗つた俵の上で、彼のよく人を驚かせるのに驚いた。左右云へば彼が突然上京してお兼さんを奪ふやうに伴れて行つたのも自分を驚かした目覺ましい手柄の一つに相違なかつた。

二

母の宿は左程大きくはなかつたけれども、自分の泊つてゐる所よりは餘程上品な構であつた。室には煽風器だの、唐机だの、特別に其唐机の傍に備へ附けた電燈などがあつた。兄はすぐ其處にある電報紙へ大阪着の旨を書いて下女に渡してゐた。岡田は何時の間にか用意して来た三四枚の繪端書を袂の中から出して、是は叔父さん、是はお重さん、是はお貞さんと一々名宛を書いて、「さあ一口宛皆何うぞ」と方々へ配つてゐた。

自分はお貞さんの繪端書へ「御目出たう」と書いた。すると母が其後へ「病氣を大事になさい」と書いたので吃驚した。

「お貞さんは病氣なんですか」

「實はあの事があるので、丁度好い折だから、今度伴れて来ようと思つて仕度までさせた所が、生憎御腹が悪くなつてね。残念な事をしましたよ」

「でも大した事ぢやないのよ。もう御粥がそろく食べられるんだから」と嫂が傍から説明した。其嫂は父に出す繪端書を持つた儘何か考へてゐた。「叔父さんは風流人だから歌が好いでせう」と岡田に勧められて、「歌なんぞ出来るもんですか」と斷つた。岡田は又お重へ宛てたのに、「あなたの口の悪い所を聞けないのが残念だ」と細かく謹んで書いたので、兄から「將棋の駒がまだ崇つてると見えるね」と笑はれてゐた。

繪端書が濟んで、しばらく世間話をした後で、岡田とお兼さんは又來ると云つて、母や兄が止めるのも聞かずに歸つて行つた。

「お兼さんは本當に奥さんらしくなつたね」

「宅へ仕立物を持つて來た時分を考へると、丸で見違へる様だよ」

母が兄とお兼さんを評し合つた言葉の裏には、己が夫丈年を取つたといふ淡い哀愁を含んでゐた。

「お貞さんだつて、もう直きですよ御母さん」と自分は横合から口を出した。

「本當にね」と母は答へた。母は腹の中で、まだ片附く當てのないお重の事でも考へてゐるらしかつた。

兄は自分を願て、「三澤が病氣だつたので、何處へも行かなかつたさうだね」と聞いた。自分は「え、飛

んだ所へ引つか、つて何處へも行かずじまひでした」と答へた。自分と兄とは常に此位懸隔のある言葉で應對するのが例になつてゐた。是は年が少し違ふのと、父が昔堅氣で、長男に最上の權力を塗り附けるやうにして育て上げた結果である。母も偶には自分をさん附けにして二郎さんと呼んで呉れる事もあるが、是は單に兄の一郎さんの御餘りに過ぎないと自分は信じてゐた。

みんなは話しに氣を取られて浴衣を着換へるのを忘れてゐた。兄は立つて、糊の強いのを肩へ掛けながら、「何うだい」と自分を促した。嫂は浴衣を自分に渡して、「全體あなたの御部屋は何處にあるの」と聞いた。手摺の所へ出て、鼻の先にある高い塗塀を鬱陶しさに眺めてゐた母は、「宜い室だが少し陰氣だね。二郎御前の御室も斯んなかい」と聞いた。自分は母のゐる傍へ行つて、下を見た。下には張物板の様な細長い庭に、細い竹が疎らに生えて錆びた鐵燈籠が石の上に置いてあつた。其石も竹も打水で皆しつとり濡れてゐた。

「狭いが凝つてますね。其代り僕の所の様に河がありませんよ、御母さん」

「おや何處に河があるの」と母がいふ後から、兄も嫂も其河の見える座敷と取り換へて貰はうと云ひ出した。自分は自分の宿のある方角やら地理やらを説明して聞かした。さうして一先歸つて荷物を纏めた上又此處へ來る約束をして宿を出た。

三

自分は其夕方宿の拂ひを済まして母や兄と一所になつた。三人は少し夕飯が後れたと見えて、膳を控へた盛楊枝を使つてゐた。自分は彼等を散歩に連れ出さうと試みた。母は疲れたと云つて應じなかつた。兄は面倒らしかつた。嫂丈には行きたい様子が見えた。

「今夜は御止しよ」と母が留めた。

兄は寐轉びながら話しをした。さうして口では大阪を知つてゐる様な事を云つた。けれども好く聞いて見ると、知つてゐるのは天王寺だの中の島だの千日前だのといふ名前計りで地理上の知識になると、丸で夢のやうに散漫極まるものであつた。

尤も「大阪城の石垣の石は實に大きかつた」とか、「天王寺の塔の上へ登つて下を見たら眼が眩んだ」とか断片的の光景は實際覺えてゐるらしかつた。其内で一番面白く自分の耳に響いたのは彼の昔泊つたといふ宿屋の夜の景色であつた。

「細い通の角で、欄干の所へ出ると柳が見えた。家が隙間なく竝んでゐる割には閑靜で、窓から眺められる長い橋も晝の様に趣きがあつた。其上を通る車の音も愉快に響いた。尤も宿そのものは不親切で汚くつて困つたが……」

「一體それは大阪の何處なの」と嫂が聞いたが、兄は全く知らなかつた。方角さへ分らないと答へた。是が兄の特色であつた。彼は事件の断面を驚く許り鮮やかに覚えてゐる代りに、場所の名や年月を全く忘れて仕舞ふ癖があつた。夫で彼は平氣でゐた。

「何處だか解らなくつちや詰らないわね」と嫂が又云つた。兄と嫂とはこんな所でよく喰ひ違つた。兄の機嫌の悪くない時は夫でも濟むが、少しの具合で事が面倒になる例も稀ではなかつた。斯ういふ消息に通じた母は「何處でも構はないが、それ丈ぢやない筈だつたのね。後を御話しよ」と云つた。兄は「御母さんにも直にも詰らない事ですよ」と斷つて、「二郎其處の二階に泊つたとき面白いと思つたのはね」と自分に話し掛けた。自分は固より兄の話しを一人で聞くべき責任を引き受けた。

「何うしました」

「夜になつて一寐入りして眼が醒めると、明るい月が出て、其月が青い柳を照らしてゐた。それを寐ながら見てゐるとね、下の方で、急にやつといふ懸け聲が聞こえた。あたりは案外静まり返つてゐるので、其懸け聲が殊更強く聞こえたんだらう、己はすぐ起きて欄干の傍迄出て下を覗いた。すると向うに見える柳の下で、眞裸な男が三人代るく大きな澤庵石の持ち上げ競をしてゐた。やつと云ふのは両手へ力を入れて差し上げる時の聲なんだよ。夫を三人とも夢中になつて熱心に遣つてゐるが、熱心な所爲か、誰も一口も物を云はない。己は明らかな月影に映つて動く裸體の人影を見て、妙に不思議な心持がした。すると其内の一人が細長い天秤棒のやうなものをぐるりくと廻し始めた……」

「何だか水滸傳のやうな趣きぢやありませんか」

「其時からしてが既に縹緲たるものさ。今日になつて回顧すると丸で夢の様だ」

兄はこんな事を回想するのが好きであつた。さうして夫は母にも嫂にも通じない、たゞ父と自分丈に解る趣きであつた。

「其時大阪で面白いと思つたのは只それ限りだが、何だかそんな連想を持つて來て見ると、一向大阪らしい氣がしないね」

自分は三澤の居た病院の三階から見下ろされる狭い綺麗な通を思ひ出した。さうして兄の見た棒使ひや力持ちはあんな町内にある若い衆ぢやなからうかと想像した。

岡田夫婦は約の如く其晩又尋ねて來た。

四

岡田は頗る念入りの遊覽目録といつたやうなものを、わざと宅から拵へて來て、母と兄に見せた。それが又餘り綿密過ぎるので、母も兄も「是ぢや」と驚いた。

「まあ幾日位御滞在になれるんですか、夫次第でプログラムの作り方も亦あるんですから。此方は東京

と違つてね、少し市を離れると幾何でも見物する所があるんです」

岡田の言葉のうちには多少の不服が籠もつてゐたが、同時に得意な調子も見えた。

「丸で大阪を自慢して入らつしやる様よ。貴方の話しを傍で聞いてゐると」

お兼さんは笑ひながら斯う云つて眞面目な夫に注意した。

「いえ自慢ぢやない。自慢ぢやないが……」

注意された岡田は益眞面目になつた。それが少し滑稽に見えたので皆が笑ひ出した。

「岡田さんは五六年のうちに悉皆上方風になつて仕舞つたんですね」と母が調戲つた。

「それでも能く東京の言葉丈は忘れずにあるぢやありませんか」と兄が其後に隨いて又冷嘲し始めた。

岡田は兄の顔を見て、「久し振に會ふと、すぐ是だから敵はない。全く東京ものは口が悪い」と云つた。

「それにお重の兄だもの、岡田さん」と今度は自分が口を出した。

「お兼少し助けて呉れ」と岡田が仕舞に云つた。さうして母の前に置いてあつた先刻のプログラムを取

つて袂へ入れながら、「馬鹿々々しい、骨を折つたり調戲はれたり」とわざ／＼怒つた風をした。

冗談が一仕切り済むと、自分の豫期してゐた通り、佐野の話が母の口から持ち出された。母は「此度は

又色々」と云つた様な打つて變つた几帳面な言葉で岡田に禮を述べる、岡田は又鹿爪らしく改まつた口上

で、まことに行き届きませんなどと挨拶をする、自分には両方共大袈裟に見えた。それから岡田は丁度

好都合だから、是非本人に會つて遣つて呉れと、また會見の打ち合せをし始めた。兄も其話の中に首を突込まなくつては義理が悪いと見えて、煙草を吹かしながら二人の相手になつてゐた。自分は病氣で寐てるお貞さんに此様子を見せて、難有いと思ふか、餘計な御世話だと思ふか、本當の所を聞いて見たい氣がした。同時に三澤が別れる時、新しく自分の頭に残して行つた美しい精神病の「娘さん」の不幸な結婚を聯想した。

嫂とお兼さんは親しみの薄い間柄であつたけれども、若い女同志といふ縁故で先刻から二人丈で話してゐた。然し氣心が知れない所爲か、兩方共遠慮がちで一向調子が合ひさうになかつた。嫂は無口な性質であつた。お兼さんは愛嬌のある方であつた。お兼さんが十口物をいふ間に嫂は一口しか喋舌れなかつた。しかも種が切れると、其都度屹度お兼さんの方から供給されてゐた。最後に子供の話が出た。すると嫂の方が急に優勢になつた。彼女は小さい一人娘の平生を、左も興ありけに語つた。お兼さんは又嫂のくだくしい敘述を、左も感心したやうに聞いてゐたが、實際は丸で無頓着らしくも見えた。たゞ一遍「よくまあ御一人で御留守居が出来ます事」と云つたのは誠らしかつた。「お重さんによく馴附いて居りますから」と嫂は答へてゐた。

母と兄夫婦の滞在日数は存外少ないものであつた。先づ市内で二三日市外で二三日しめて一週間足らずで東京へ歸る豫定で出て来たらしかつた。

「切めてもう少しは宜いでせう。折角此處迄出て入らしつたんだから。又來るたつて、そりや容易な事ぢやありませんよ、億劫で」

斯うは云ふものゝ岡田も、母の滞在中會社の方を丸で休んで、毎日案内ばかりして歩ける程の餘裕は無論なかつた。母も東京の宅の事が氣に掛かる様に見えた。自分に云はせると、母と兄夫婦といふからして既に妙な組合せであつた。本来なら父と母と一所に來るとか、兄と嫂丈が連れ立つて避暑に出掛けるとか、もし又お貞さんの結婚問題が目的なら、常人の病氣が癒るのを待つて、母なり父なりが連れて來て、早く事を片付けてしまふとか、自然の豫定は二通りも三通りもあつた。それが斯う變な形になつて現はれたのは何ういふ譯だか、自分には始めから呑み込めなかつた。母は又それを胸の中に疊み込んであるといふ風に見えた。母ばかりではない、兄夫婦も其處に氣が附いてるらしい所もあつた。

佐野との會見は型の如く濟んだ。母も兄も岡田に禮を述べてゐた。岡田の歸つた後でも兩方共佐野の批評はしなかつた。もう事が極まつて批評をする餘地がないといふ様にも取れた。結婚は年の暮に佐野が東京へ出て來る機會を待つて、式を擧げるやうに相談が調つた。自分は兄に、「御目出た過ぎる位事件がどんく進行して行く辭に、本人が一向知らないんだから面白い」と云つた。

「當人は無論知つてるんだ」と兄が答へた。

「大喜びだよ」と母が保證した。

自分は一言もなかつた。しばらくしてから、「尤もこんな問題になると自分でどんく進行させる勇氣は

日本の婦人にあるまいからな」と云つた。兄は黙つてゐた。嫂は變な顔をして自分を見た。

「女丈ぢやないよ。男だつて自分勝手に無暗と進行されちや困りますよ」と母は自分に注意した。する

と兄が「一層その方が好いかも知れないね」と云つた。其云ひ方が少し冷やか過ぎた所爲か、母は何だか厭な顔をした。嫂も亦變な顔をした。けれども二人とも何とも云はなかつた。

少し経つてから母は漸く口を開いた。

「でも貞丈でも極まつて呉れると御母さんは大變樂な心持がするよ。後は重ばかりだからね」

「是も御父さんの御蔭さ」と兄が答へた。其時兄の唇に薄い皮肉の影が動いたのを母は氣がつかかなかつた。

「全く御父さんの御蔭に違ひないよ。岡田が今あゝ遣つてゐると同じ事さ」と母は大分満足な體に見えた。

憐れな母は父が今でも社會的に普通の勢力を有つてゐると計り信じてゐた。兄は兄丈に、社會から退隱したと同様の今の父に、其半分の影響さへ六づかしいと云ふ事を見破つてゐた。

兄と同意見の自分は、家族中ぐるになつて、佐野を瞞してゐる様な気がしてならなかつた。けれども亦一方から云へば、佐野は瞞されても然るべきだといふ考へが始めから頭の何處かに引掛かつてゐた。兎に角會見は満足のうち済んだ。兄は暑いので腦に應へるとか云つて、早く大阪を立ち退く事を主張した。自分は固より賛成であつた。

六

實際其頃の大阪は暑かつた。ことに我々の泊つてゐる宿屋は暑かつた。庭が狭いのと塀が高いので、日の射し込む餘地もなかつたが、其代り風の通る隙間にも乏しかつた。ある時は濕つほい茶座敷の中で、四方から焚火に焙られてゐるやうな苦しさがあつた。自分は夜通し煽風器を掛けてぶうぶう鳴らしたため、馬鹿な眞似をして風邪でも引いたら何うすると云つて母から叱られた事さへあつた。

大阪を立たうといふ兄の意見に賛成した自分は、有馬なら涼しくつて兄の頭に宜からうと思つた。自分は此有名な温泉をまだ知らなかつた。車夫が梶棒へ綱を附けて、其綱の先をまた犬に附けて坂路を上るのださうだが、暑いので犬がともすると溪河の清水を飲まうとするのを、車夫が怒つて竹の棒で無暗に打ち擲くから、犬がひんく苦しがりながら俵を引くんだといふ話を、かつて聞いた儘喋舌つた。

「厭だねそんな俵に乗るのは、可哀相で」と母が眉をひそめた。

「何故又水を飲ませないんだらう。俵が遅れるからかね」と兄が聞いた。

「途中で水を飲むと疲れて役に立たないからださうです」と自分が答へた。

「へえ、何故」と今度は嫂が不思議さうに聞いたが、それには自分が答へる事が出来なかつた。

有馬行は犬の所爲でもなかつたらうけれども、とうとう立消えになつた。さうして意外にも和歌の浦見物が兄の口から發議された。是は自分もかねてから見たいと思つてゐた名所であつた。母も子供の時から其名に親しみがあるとかで、すぐ同意した。嫂丈は何處でも構はないといふ風に見えた。

兄は學者であつた。又見識家であつた。其上詩人らしい純粹な氣質を持つて生れた好い男であつた。けれども長男丈に何處か我儘な所を具へてゐた。自分から云ふと、普通の長男よりは、大分甘やかされて育つたとか見えなかつた。自分計りではない、母や嫂に對しても、機嫌の好い時は馬鹿に好いが、一旦旋毛が曲がり出すと、幾日でも苦い顔をして、わざと口を利かずに居た。それで他人の前へ出ると、また全く人間が變つた様に、大抵な事があつても滅多に紳士の態度を崩さない、圓滿な好同伴であつた。だから彼の朋友は悉く彼を穩やかな好い人物だと信じてゐた。父や母は其評判を聞かたに案外な顔をした。けれども矢つ張り自分の子だと見えて、何處か嬉しさうな様子が見えた。兄と衝突してゐる時にこんな評判でも耳に入らうものなら、自分は無暗に腹が立つた。一々其人の宅迄出掛けて行つて、彼等の誤解を訂正して遣りたいやうな氣さへ起つた。

和歌の浦行に母がすぐ賛成したのも、實は彼女が兄の氣性をよく呑み込んでゐるからだらうと自分は思つた。母は長い間吾子の我を助け育てるやうにした結果として、今では何事によらず其我の前に跪く運命を甘んじなければならぬ位置にあつた。

自分は便所に立つた時、手水鉢の傍にほんやり立つてゐた嫂を見附けて、「嫂さん何うです近頃は。兄さんの機嫌は好い方なんですか悪い方なんですか」と聞いた。嫂は「相變らずですわ」とたゞ一口答へた丈であつた。嫂は夫でも淋しい頬に片鬢を寄せて見せた。彼女は淋しい色澤の頬を有つてゐた。それから其真中に淋しい片鬢を有つてゐた。

七

自分は立つ前に岡田に借りた金の片を附けて行きたかつた。尤も彼に話しをしさへすれば、東京へ歸つてからでも構はないとは思つたけれども、あゝいふ人の金は成る可く早く返して置いた方が、此方の心持が宜いといふ考へがあつた。それで誰も傍に居ない折を見計らつて、母に何うかして呉れと頼んだ。

母は兄を大事にする丈あつて、無論彼を心から愛してゐた。けれども長男といふ譯か、又氣六づかしいといふ所爲か、何處かに遠慮があるらしかつた。一寸の事を注意するにしても、成る可く氣に障らないやうに、始めから氣を置いて掛かつた。其處へ行くと自分は丸で子供同様の待遇を母から受けてゐた。「こ

郎そんな法があるのかい」などと頭ごなしに遣附けられた。其代りまた兄以上に可愛がられもした。小遣などは兄に内所でよく貰つた覺えがある。父の着物なども何時の間にか自分のに仕立て直してある事は珍らしくなかつた。斯ういふ母の仕打ちが、例の兄には又頗る氣に入らなかつた。些細な事から兄はよく機嫌を悪くした。さうして明るい家の中に陰氣な空氣を漲らした。母は眉をひそめて、「また一郎の病氣が始まつたよ」と自分に時々私語いた。自分は母から腹心の郎黨として取扱はれるのが嬉しさに「癖なんだから、放つて御置きなさい」位云つて澄ましてゐた時代もあつた。兄の性質が氣六づかしいばかりでなく、大小となく陰で狐鼠々々何か遣られるのを忌む正義の念から出るのだといふ事を後から知つて以來、自分は彼に對してこんな輕薄な批評を加へるのを恥づるやうになつた。けれども表向き兄の承諾を求めると、到底行はれにくい用件が多いので、自分はつい機會を見ては母の懷に一人抱かれようとした。

母は自分が三澤のために岡田から金を借りた顛末を聞いて驚いた顔をした。

「そんな女のために御金を使ふ譯がないぢやないか、三澤さんだつて。馬鹿らしい」と云つた。

「だけど、其處には三澤も義理があるんだから」と自分は辯解した。

「義理々々つて、御母さんには解らないよ、御前のいふことは。氣の毒なら、手ぶらで見舞ひに行く丈のことぢやないか。もし手ぶらで極りが悪ければ、菓子折の一つも持つて行きやあ澤山だね」

自分はしばらく黙つてゐた。

「よし三澤さんに夫丈の義理があつたにした所でさ。何も御前が岡田なんぞからそれを借りて上げる丈の義理はなからうぢやないか」

「ぢや宜御座んす」と自分は答へた。さうして立つて下へ行かうとした。兄は湯に入つてゐた。嫂は小さい下の座敷を借りて髪を結はしてゐた。座敷には母より外にゐなかつた。

「まあ御待ちよ」と母が呼び留めた。「何も出して上げないと云つてやしないぢやないか」

母の言葉には兄一人できへ澤山な所へ、何の必要があつて、自分迄此年寄を苛めるかと云はぬ許りの心細さが籠もつてゐた。自分は母のいふ通り元の席に着いたが、氣の毒で一す顔を上げ得なかつた。さうして此無恰好な態度で、左も子供らしく母から要る丈の金子を受取つた。母が一段聲を落として、何時ものやうに、「兄さんには内所だよ」と云つた時、自分は不意に名狀しがたい不愉快に襲はれた。

八

自分達は其翌日の朝和歌山へ向けて立つ筈になつてゐた。何うせ一旦は此處へ引き返して來なければならぬのだから、岡田の金も其時で好いとは思つたが、性急の自分には紙入を其儘懐中してゐるからが既に厭だつた。岡田は其晩も例の通り宿屋へ話しに來るだらうと想像された。だからその折にそつと返して置かうと自分は腹の中で極めた。

兄が湯から上がつて來た。帯も締めずに、浴衣を羽織るやうに引つ掛けた儘すつと欄干の所迄行つて其處へ濡手拭を懸けた。

「御待ち遠」

「御母さん、何うです」と自分は母を促した。

「まあ御這入りよ、御前から」と云つた母は、兄の首や胸の所を眺めて、「大變好い血色におなりだね。夫に少し肉が附いた様ぢやないか」と賞めてゐた。兄は性來の瘦つほちであつた。宅では夫をみんな神經の所爲にして、もう少し肥らなくつちや駄目だと云ひ合つてゐた。その内でも母は最も氣を揉んだ。當人自身も瘦せてゐるのを何かの刑罰のやうに忌み恐れた。夫でも些とも肥れなかつた。

自分は母の言葉を聞きながら、此苦しい愛嬌を、慰藉の一つとして吾子の前に捧げなければならぬ彼女の心事を氣の毒に思つた。兄に比べると遙かに頑丈な體軀を起しながら、「ぢや御先へ」と母に挨拶して下へ降りた。風呂場の隣の小さい座敷を一す覗くと、嫂は今鬢が出來た所で、合せ鏡をして鬢だの髻だのを撫でてゐた。

「もう濟んだんですか」

「え、何處へ入らつしやるの」

「御湯へ這入らうと思つて。御先へ失禮しても宜ござんすか」

「さあ何うぞ」

自分は湯に入りながら、嫂が今日に限つてなんで又丸髷なんて仰山な頭に結ふのだらうと思つた。大きな聲を出して、「嫂さん、嫂さん」と湯壺の中から呼んで見た。「なによ」といふ返事が廊下の出口で聞こえた。

「御苦勞さま、此暑いのに」と自分が云つた。

「何故」

「何故つて、兄さんの御好みなんですか、其でこゝ頭は」

「知らないわ」

嫂の廊下傳ひに梯子段を上る草履の音が判切聞こえた。

廊下の前は中庭で八つ手の株が見えた。自分は其暗い庭を前に眺めて、番頭に背中を流して貰つてゐた。すると入口の方から縁側を沿つて、又活潑な足音が聞こえた。さうして詰襟の白い洋服を着た岡田が自分の前を通つた。自分は思はず、「おい君、君」と呼んだ。

「や、今御湯、暗いんで些とも氣が附かなかつた」と岡田は一足後戻りして風呂を覗き込みながら挨拶をした。

「貴方に話がある」と自分は突然云つた。

「話しが？何です」

「まあ、御入んなさい」

岡田は冗談ぢやないと云ふ顔をした。

「お兼は來ませんか」

自分が「いゝえ」と答へると、今度は「皆さんは」と聞いた。自分が又「みんな居ますよ」といふと、不思議さうに「ぢや今日は何處へも行かなかつたんですか」と聞いた。

「行つてもう歸つて來たんです」

「實は僕も今會社から歸り掛けですがね、何うも暑いぢやありませんか。——兎に角一寸伺候して來ますから。失禮」

岡田は斯う云ひ捨てたなり、とうとう自分の用事を聞かずに二階へ上がつて行つて仕舞つた。自分もしばらくして風呂から出た。

九

岡田は其夜大分酒を呑んだ。彼は是非都合して和歌の浦迄一所に行く積りであるが、生憎同僚が病氣で缺勤してゐるので、豫期の通りにならないのが甚だ残念だと云つて頻りに母や兄に詫びてゐた。

「ぢや今夜が御別れだから、少し御過ごしなさい」と母が勧めた。

生憎自分の家族は酒に親しみの薄いもの計りで、誰も彼の相手にはなれなかつた。それで皆御免蒙つて岡田より先へ食事を済ました。岡田はそれが此方も勝手だといつた風に、獨り膳を控へて盃を甜め續けた。彼は性來元氣な男であつた。其上酒を呑むと益陽氣になる好い癖を持つてゐた。さうして相手が聞かうが聞かまいが、頓着なしに好きな事を喋舌つて、時々一人高笑ひをした。

彼は大阪の富が過去二十年間に何の位殖えて、是から十年立つとまた其富が今の何十倍になるといふやうな統計を擧げて大いに満足らしく見えた。

「大阪の富より自君身の富は何うだい」と兄が皮肉を云つたとき、岡田は禿け掛かつた頭へ手を載せて笑ひ出した。

「然し僕の今日あるも——といふと、偉過ぎるが、まあ何うか斯うか遣つて行けるのも、全く叔父さんと叔母さんの御蔭です。僕はいくら斯うして酒を呑んで太平樂を並べてゐたつて、夫丈は決して忘れやしません」

岡田は斯んな事を云つて、傍にゐる母と遠くにゐる父に感謝の意を表した。彼は酔ふと同じ言葉を何遍も繰り返す癖のある男だつたが、ことに此感謝の意は少しづつ、違つた形式で、幾度か彼の口から洩れた。仕舞に彼は灘萬のまな鯉とか何とかいふものを、是非父に喰はせたいと云ひ募つた。

自分は彼がもと書生であつた頃、ある正月の宵何處かで振舞酒を浴びて歸つて来て、父の前へ長さ三寸ばかりの赤い蟹の足を置きながら平伏して、謹んで北海の珍味を献上しますと云つたら、父は「何だそんな朱塗りの文鎮見たいなもの。要らないから早く其方へ持つて行け」と怒つた昔を思ひ出した。

岡田は何時迄も飲んで歸らなかつた。始めは興を添へた彼の座談も段々皆に飽きられて来た。嫂は團扇を顔へ當てて欠を隠した。自分はとうとう彼を外へ連れ出さなければならなかつた。自分は散歩にかこつて五六町彼と一所に歩いた。さうして懐から例の金を出して彼に返した。金を受取つた時の彼は、酔つてゐるにも拘らず驚くべく慥かなものであつた。「今でなくつても宜いのに、然しお兼が喜びますよ。有りがたう」と云つて、洋服の内隠袋へ收めた。

通は静かであつた。自分はわれ知らず空を仰いだ。空には星の光が存外濁つてゐた。自分は心の内に明日の天氣を氣遣つた。すると岡田が藪から棒に「一郎さんは實際六づかしやでしたね」と云ひ出した。さうして昔兄と自分と將棋を指した時、自分が何か一口云つたのを癪に、いきなり將棋の駒を自分の額へ打附けた騒ぎを、新しく自分の記憶から呼び覺ました。

「あの時分から我儘だつたからね、何うも。然し此頃は十分機嫌が好いやうぢやありませんか」と彼が又云つた。自分は煮え切らない生返事をして置いた。

「尤も奥さんが出来てから、もう餘つ程になりますからね。然し奥さんの方でも随分氣骨が折れるでせ

う。あれぢや」

自分は夫でも何の答もしなかつた。ある四つ角へ来て彼と別れるときた。「お兼さんに立しく」と云つた儘又元の路へ引き返した。

十

翌日朝の汽車で立つた自分達は狭い列車のなかの食堂で晝飯を食つた。「給仕がみんな女だから面白い。しかも中々別嬪がゐるますぜ、白いエプロンを掛けてね。是非中で晝飯を遣つて御覽なさい」と岡田が自分に注意したから、自分は皿を運んだりサイダーを注いだりする女をよく心附けて見た。然し別に是といふ程の器量を有つたものもゐなかつた。

母と嫂は物珍らしさうに窓の外を眺めて、田舎めいた景色を賞し合つた。實際窓外の眺めは大阪を今離れた計りの自分達には一つの變化であつた。ことに汽車が海岸近くを走るときは、松の緑と海の藍とで、煙に疲れた眼に爽やかな青色を射返した。木蔭から出たり隠れたりする屋根瓦の積み方も東京地方のものには珍らしかつた。

「あれは妙だね。御寺かと思ふと、左右でもないし。二郎、矢つ張り百姓家なのかね」と母がわざ／＼指をさして、比較的大きな屋根を自分に示した。

自分は汽車の中で兄と隣り合せて坐つた。兄は何か考へ込んでゐた。自分は心の内で又例のが始まつたのぢやないかと思つた。少し話しでもして機嫌を直さうか、それとも黙つて知らん顔をしてゐようかと躊躇した。兄は何か癪に障つた時でも、六づかしい高尚な問題を考へてゐる時でも、同じく斯んな様子をす

るから、自分には一向見分けが附かなかつた。自分は仕舞にと／＼思ひ切つて此方から何か話しを切り出さうとした。と云ふのは、向う側に腰を掛けてゐる母が、嫂と應對の相間々々に、兄の顔を偷むやうに一二度見たからである。

「兄さん、面白い話がありますかね」と自分は兄の方を見た。

「何だ」と兄が云つた。兄の調子は自分の豫期した通り無愛想であつた。然しそれは覺悟の前であつた。「つい此間三澤から聞いた計りの話ですがね。……」

自分は例の精神病の娘さんが一旦嫁いだあと不縁になつて、三澤の宅へ引き取られた時、三澤の出る後を慕つて、早く歸つて来て頂戴と、何時でも云ひ習はした話をしようと思つて一寸其所で句を切つた。すると兄は急に氣乗りのした様な顔をして、「其話なら己も聞いて知つてゐる。三澤が其女の死んだとき、冷たい額へ接吻したといふ話だらう」と云つた。

自分は喫驚した。

「そんな事があるんですか。三澤は接吻の事については一口も云ひませんでしたかね。皆居る前です

か、三澤が接吻したつて云ふのは」

「夫は知らない。皆の前で遣つたのか、又は外に人の居ない時に遣つたのか」

「だつて三澤が只一人で其娘さんの死骸の傍にゐる筈がないと思ひますがね。もし誰もそばに居ない時接吻したとすると」

「だから知らんと斷つてるぢやないか」

自分は黙つて考へ込んだ。

「一體兄さんは何うして、其んな話を知つてるんです」

「Hから聞いた」

Hとは兄の同僚で、三澤を教へた男であつた。其Hは三澤の保証人だつたから、少しは關係の深い間柄なんだからうけれども、何うして斯んな際どい話を聞き込んで、兄に傳へたものだらうか、夫は彼も知らなかつた。

「兄さんは何故又今日迄其話を爲すに黙つてゐたんです」と自分は最後に兄に聞いた。兄は苦い顔をして、「する必要があるからさ」と答へた。自分は様子によつたらもつと肉薄して見ようかと思つてゐるうちに汽車が着いた。

十一

停車場を出るとすぐ其處に電車が待つてゐた。兄と自分は手提鞆を持つた儘婦人を扶けて急いでそれに乗り込んだ。

電車は自分達四人が一度に這入つた丈で、中々動き出さなかつた。

「閑静な電車ですね」と自分が侮るやうに云つた。

「是なら妾達の荷物に乗つけても宜ささうだね」と母は停車場の方を顧み

所へ書物を持つた書生體の男だの、扇を使ふ商人風の男だのが二三人前後して車臺に上つてばらばらに腰を掛け始めたので、運轉手は遂に把手を動かし出した。

自分達は何だか市の外廓らしい淋しい土堀つゞきの狭い町を曲がつて、二三度停留所を通り越した後、高い石垣の下にある濠を見た。濠の中には蓮が一面に青い葉を浮かべてゐた。其青い葉の中に、點々と咲く紅の花が、落ち附かない自分達の眼をちら／＼させた。

「へえ—是が昔の御城かね」と母は感心してゐた。母の叔母といふのが、昔紀州家の奥に勤めてゐたとか云ふので、母は一層感慨の念が深かつたのだらう。自分も子供の時、折々耳にした紀州様、紀州様といふ封建時代の言葉を不圖思ひ出した。

和歌山市を通り越して少し田舎道を走ると、電車はちき和歌の浦へ着いた。抜け目のない岡田はかねてから注意して土地で一流の宿屋へ室の注文をしたのだが、生憎避暑の客が込み合つて、眺めの好い座敷が塞がつてゐるとかで、自分達は直ちに俾を命じて濱手の角を曲がつた。さうして海を真前に控へた高い三階の上層の一室に入つた。

其處は南と西の開いた廣い座敷だつたが、普請は氣の利いた東京の下宿屋位なもので、品位からいふと大阪の旅館とはてんで比べ物にならなかつた。時々大一座でもあつた時に使ふ二階は打つ通しの大廣間で、伽藍堂の様な真中に立つて、波を打つた安疊を眺めると、何となく殺風景な感が起つた。

兄は其大廣間に假の仕切りとして立ててあつた六枚折の屏風を黙つて見てゐた。彼は斯ういふものに對して、父の薰陶から來た一種の鑑賞力を有つてゐた。其屏風には妙にべろくした葉の竹が巧みに描かれてゐた。兄は突然後を向いて「おい二郎」と云つた。

其時兄と自分は下の風呂に行く積りで二人ながら手拭をさけてゐた。さうして自分は彼の二間許りに立つて、屏風の竹を眺める彼を又眺めてゐた。自分は兄が此屏風の畫について、何かまた批評を加へるに違ひないと思つた。

「何です」と答へた。

「先刻汽車の中で話しが出た、あの三澤の事だね。御前は何う思ふ」

兄の質問は實際自分に取つて意外であつた。彼は何故其話を今迄自分に聞かせなかつたと汽車の中で問はれた時、既に苦い顔をして必要がないからだと答へた計りであつた。

「例の接吻の話ですか」と自分は聞き返した。

「いえ接吻ぢやない。其女が三澤の出て後を慕つて、早く歸つて來て頂戴と必ず云つたといふ方の話さ」

「僕には兩方共面白いが、接吻の方が何だかより多く純粹で且美しい氣がしますね」

此時自分達は二階の梯子段を半分程降りてゐた。兄は其中途でびたりと留まつた。

「そりや詩的に云ふのだらう。詩を見る眼で云つたら、兩方共等しく面白いだらう。けれども己の云ふ

のは左右ぢやない。もつと實際問題にしての話だ」

十二

自分には兄の意味がよく解らなかつた。黙つて梯子段の下まで降りた。兄も仕方なしに自分の後に跟いて來た。風呂場の入口で立ち留まつた自分は、振り返つて兄に聞いた。

「實際問題と云ふと、何ういふ事になるんですか。一寸僕には解らないんですが」

兄は焦急つたさうに説明した。

「つまり其女がさ、三澤の想像する通り本當に彼の男を思つてゐるか、又は先の夫に對して云ひたかつ

た事を、我慢して云はずにゐたので、精神病の結果ふらくと口にし始めたのか、何方だと思ふと云ふんだ

自分も此問題は始め其話を聞いた時、少し考へて見た。けれども何方が何うだか到底分るべき筈の者でない諦めて、それなり放つて仕舞つた。それで自分は兄の質問に對して是といふ程の意見も持つてゐなかつた。

「僕には解らんです」

「左右か」

兄は斯う云ひながら、矢つ張り風呂に這入らうともせず、其儘立つてゐた。自分も仕方なしに裸になるのを控へてゐた。風呂は思つたより小さく且多少古びてゐた。自分は先づ薄暗い風呂を覗き込んで、又兄に向つた。

「兄さんには何か意見が有るんですか」

「己は何うしても其女が三澤に氣があつたのだとしか思はれんがね」

「何故ですか」

「何故でも己はさう解釋するんだ」

二人は其話しの結末を附けずに湯に入つた。湯から上がつて婦人連と入れ代つた時、室には西日が一杯射して、海の上は溶けた鐵の様に熱く輝いた。二人は日を避けて次の室に這入つた。さうして其處で相對して坐つた時、先刻の問題が又兄の口から話頭に上つた。

「己は何うしても斯う思ふんだがね……」

「え」と自分は只大人しく聞いてゐた。

「人間は普通の場合には世間の手前とか義理とかで、いくら云ひ度くつても云へない事が澤山あるだらう」

「夫は澤山あります」

「けれども夫が精神病になると——と云ふと凡ての精神病を含めて云ふやうで、醫者から笑はれるかも知れないが、——然し精神病になつたら、大變氣が樂になるだらうぢやないか」

「左右云ふ種類の患者もあるでせう」

「所でさ、もし其女が果して左右いふ種類の精神病患者だとすると、凡て世間並の責任は其女の頭の中から消えて無くなつて仕舞ふに違ひなからう。消えて無くなれば、胸に浮かんだ事なら何でも構はず露骨に云へるだらう。さうすると、其女の三澤に云つた言葉は、普通我々が口にする好い加減な挨拶よりも遙かに誠の籠もつた純粹のものぢやなからうか」

自分は兄の解釋にひどく感服して仕舞つた。「夫は面白い」と思はず手を打つた。すると兄は案外不機

嫌な顔をした。

「面白いか面白くないとか云ふ浮いた話ぢやない。二郎、實際今の解釋が正確だと思ふか」と問ひ詰める様に聞いた。

「左右ですね」

自分は何となく躊躇しなければならなかつた。

「噫々女も氣狂にして見なくつちや、本體は到底解らないのかな」
兄は斯う云つて苦しい溜息を洩らした。

十三

宿の下には可なり大きな堀割があつた。それが何うして海へつゞいてゐるか一寸解らなかつたが、夕方には漁船が一二艘何所からか漕ぎ寄せて来て、緩やかに樓の前を通り過ぎた。

自分達は其堀割に沿つて一二丁右の方へ歩いた後、又左へ切れて田圃路を横切り始めた。向うを見ると、田の果がだら／＼坂の上りになつて、其を上り盡くした土手の縁には、松が左右に長く續いてゐる。自分達の耳には大きな波の石に碎ける音がど／＼と聞こえた。三階から見ると其碎けた波が忽然白い煙となつて空に打ち上げられる様が、明らかに見えた。

自分達は遂に其土手の上へ出た。波は土手のもう一つ先にある厚く築き上げられた石垣に當たつて、見事に粉微塵となつた末、煮え返るやうな色を起して空を吹くのが常であつたが、偶には崩れたなり石垣の上を流れ越えて、ざつと内側へ落ち込んだりする大きいのもあつた。

自分達はしばらく其壯觀に見惚れてゐたが、やがて強い浪の響を耳にしながらか歩き出した。其時母と自分分は、是が片男波だらうと好い加減な想像を話しの種に二人並んで歩いた。兄夫婦は自分達より少し先へ行つた。二人とも浴衣掛けで、兄は細い洋杖を突いてゐた。嫂は又幅の狭い御殿模様か何かの麻の帯を締めてゐた。彼等は自分達より殆ど二十間ばかり先へ出てゐた。さうして二人とも並んで足を運ばして行つた。けれども彼等の間には彼等は一間の距離があつた。母はそれを氣にする様な、又氣にしない様な眼遣ひで、時々見た。其見方が又餘りに神經的なので、母の心は此二人について何事かを考へながら歩いてゐるとしか思へなかつた。けれども自分は話しの面倒になるのを恐れたから、素知らぬ顔をしてわざと緩々歩いた。さうして成るべく香氣さうに見せる積りで母を笑はせるやうな剽軽な事ばかり饒舌つた。母は何時もの通り「二郎、御前見たいに暮らして行けたら、世間に苦はあるまいね」と云つたりした。

仕舞に彼女はとう／＼堪へ切れなくなつたと見えて、「二郎あれを御覽」と云ひ出した。

「何ですか」と自分は聞き返した。

分は少なくとも彼女の困ると云つた意味を表向き承認しない譯に行かなかつた。

「又何か兄さんの氣に障る事でも出来たんですか」

「そりやあの人の事だから何とも云へないがね。けれども夫婦となつた以上は、御前、いくら旦那が素つ氣なくしてゐたつて、此方は女だもの。直の方から少しは機嫌の直るやうに仕向けて呉れなくつちや困るぢやないか。あれを御覽な、あれぢや丸であかの他人が同じ方角へ歩いて行くのと違やしないやね。なんほ一郎だつて直に傍へ寄つて呉れるなど頼みやしまいし」

母は無言の儘離れて歩いてゐる夫婦のうちで、唯嫂の方にばかり罪を着せたがつた。是には多少自分にも同感な所もあつた。さうして此同感は平生から兄夫婦の關係を傍で見てるものの胸には屹度起る自然のものであつた。

「兄さんは又何か考へ込んでゐるんですよ。夫で嫂さんも遠慮してわざと口を利かずにゐるんでせう」
自分は母の爲にわざと斯んな氣休めを云つて胡魔化さうとした。

十四

「たとひ何か考へて居るにしてもだね。直の方があゝ無頓着ぢや片つ方でも口の利きやうがないよ。丸でわざと離れて歩いてゐるやうなもの」

兄に同情の多い母から見ると、嫂の後姿は、如何にも冷淡らしく思はれたのだらう。が自分はそれに對して何とも答へなかつた。たゞ歩きながら嫂の性格をもつと一般的に考へるやうになつた。自分は母の批評が滿更當たつてゐないとも思はなかつた。けれども我肉身の子を可愛がり過ぎるせいで、少し彼女の缺點を苛酷に見て居はしまいかと疑つた。

自分の見た彼女は決して温かい女ではなかつた。けれども相手から熱を與へると、温め得る女であつた。持つて生れた天然の愛嬌のない代りには、此方の手加減で随分愛嬌を搾り出す事の出来る女であつた。自分腹の立つ程の冷淡さを嫁入後の彼女に見出した事が時々あつた。けれども矯め難い不親切や残酷心はまさかにあるまいと信じてゐた。

不幸にして兄は今自分が嫂について云つた様な氣質を多量に具へてゐた。従つて同じ型に出来上がった此夫婦は、己の要するものを、要する事の出来ない御互に對して、初手から求め合つてゐて、未だにしくり反りが合はずに居るのではあるまいか。時々兄の機嫌の好い時丈、嫂も愉快さうに見えるのは、兄の方が熱し易い性丈に、女に働き掛ける温か味の功力と見るのが當然だらう。さうでない時は、母が嫂を冷淡過ぎると評する様に、嫂も亦兄を冷淡過ぎると腹のうちで評してゐるかも知れない。

自分は母と並んで歩きながら先へ行く二人を斯んなに考へた。けれども母に對してはそんな六づかしい理窟を云ふ氣にはなれなかつた。すると「何うも不思議だよ」と母が云ひ出した。

「一體直は愛嬌のある質ぢやないが、御父さんや妾には何時だつて同じ調子だがね。二郎、御前にだつて左右だらう」

是は全く母の云ふ通りであつた。自分は元來性急な性分で、よく大きな聲を出したり、怒鳴り附けたりするが、不思議にまだ嫂と喧嘩をした例はなかつたのみならず、場合によると、兄よりも却て心置きなく話をした。

「僕にも左右ですがね。成程さう云はれ、ば少々變には違ひない」

「だから妾には直が一郎に對して丈、わざ／＼、彼んな風をつらあてがましく遣つてゐる様に思はれて仕方がないんだよ」

「まさか」

白白すると自分は此問題を母程細かく考へてゐなかつた。従つてそんな疑ひを挟む餘地がなかつた。あつても其原因が第一不審であつた。

「だつて宅中で兄さんが一番大事な人ぢやありませんか、嫂さんに取つて」

「だからさ。御母さんには譯が解らないと云ふのさ」

自分には折角斯んな景色の好い所へ來ながら、際限もなく母を相手に、嫂を陰で評してゐるのが馬鹿らしく感ぜられてきた。

「其内機會があつたら、嫂さんにまた好く腹の中を僕から聞いて見ませう。何心配する程の事はありませんよ」と云ひ切つて、向うの石垣迄突き出してゐる掛茶屋から防波堤の上に馳け上がった。さうして、精一杯の聲を揚げて、「おーい／＼」と呼んだ。兄夫婦は驚いて振り向いた。其時石の堤に當たつて碎けた波が、吹き上げる泡と脚を洗ふ流れとで、自分を濡れ鼠の如くにした。

自分は母に叱られながら、ほた／＼雫を垂らして、三人と共に宿に歸つた。ど／＼ん／＼といふ波の音が、歸り道中自分の鼓膜に響いた。

十五

其晩自分は母と一所に眞白な蚊帳の中に寝た。普通の麻よりは遙かに薄く出来てゐるので、風が來て綺麗なレースを弄ぶ様が涼しさうに見えた。

「好い蚊帳ですね。宅でも一つ斯んなのを買はうぢやありませんか」と母に勧めた。

「是や見てくれ丈は綺麗だが、それ程高いものぢやないよ。却て宅にあるあの白麻の方が上等なんだよ。たゞ此方のはうが軽くつて、繼ぎ目がない丈に華奢に見えるのさ」

母は昔もの丈あつて宅にある岩國か何處かで出来る麻の蚊帳の方を賞めてゐた。

「だいち寝冷えをしない丈でも彼方の方が得ぢやないか」と云つた。

下女が来て障子を締め切つてから、蚊帳は少しも動かなくなつた。

「急に暑苦しくなりましたね」と自分は嘆息するやうに云つた。

「左右さね」と答へた母の言葉は、丸で暑さが苦にならない程落ち附いてゐた。それでも團扇遣ひの音は微かに聞こえた。

母はそれから弗つり口を利かなくなつた。自分も眼を眠つた。襖一つ隔てた隣座敷には兄夫婦が寝てゐた。これは先刻から静かであつた。自分の話し相手がなくなつて此方の室が急に寂りして見ると、兄の室は猶森閑と自分の耳を澄ました。

自分は眼を閉ぢた儘凝としてゐた。然し何時迄経つても寝つかれなかつた。仕舞には静かさに祟られたやうな此暑い苦しみを痛切に感じ出した。それで母の眠りを妨げない様にそつと蒲團の上に起き直つた。それから蚊帳の裾を捲くつて縁側へ出る氣で、成る可く音のしない様に障子をすうと開けに掛かつた。すると今迄寢入つてゐたと計り思つた母が突然「二郎何處へ行くんだい」と聞いた。

「あんまり寝苦しいから、縁側へ出て少し涼まうと思ひます」

「左右かい」

母の聲は明晰で落ち附いてゐた。自分は其調子で、彼女がまんじりともせず今迄起きてゐた事を知つた。

「御母さんも、まだ御休みにならないんですね」

「え、寢床の變つた所爲か何だか勝手が違つてね」

自分は貸浴衣の腰に三尺帯を一重廻した丈で、懐へ敷島の袋と燐寸を入れて縁側へ出た。縁側には白いカブの掛かつた椅子が二脚程出てゐた。自分は其一脚を引き寄せて腰を掛けた。

「餘りがたく云はして、兄さんの邪魔になると不可ないよ」

母から斯う注意された自分は、煙草を吹かしながら黙つて、夢のやうな眼前の景色を眺めてゐた。景色は夜と共に無論ほんやりしてゐた。月のない晩なので、殊更暗いものが蔓り過ぎた。其うちに晝間見た土手の松並木丈が一際黒すんで左右に長い帯を引き渡してゐた。其下に浪の碎けた白い泡が夜の中に絶間なく動揺するのが、比較的刺激強く見えた。

「もう好い加減に御這入りよ。風邪でも引くと不可ないから」

母は障子の内から斯う云つて注意した。自分は椅子に倚りながら、母に夜の景色を見せようと思つて一寸勧めたが、彼女は應じなかつた。自分は素直に又蚊帳の中に這入つて、枕の上に頭を着けた。

自分が蚊帳を出たり這入つたりした間、兄夫婦の室は森として元の如く静かであつた。自分が再び床に就いた後も依然として同じ沈黙に鎖されてゐた。たゞ防波堤に當たつて碎ける浪の音のみが、どん／＼と何時迄も響いた。

朝起きて膳に向つた時見ると、四人は悉く寢足らない顔をしてゐた。さうして四人とも其寢足らない雲を膳の上に打ちひろけてわざと會話を陰氣にしてゐるらしかつた。自分も變に窮屈だつた。

「昨夕食つた鯛の焙烙蒸に中てられたらしい」と云つて、自分は不味さうな顔をして席を立つた。手摺の所へ来て、隣に見える東洋第一エレゼーターと云ふ看板を眺めてゐた。此昇降器は普通のやうに、家の下層から上層に通じてゐるのとは違つて、地面から岩山の頂まで物數奇な人間を引き上げる仕掛であつた。所にも似ず無風流な装置には違ひないが、淺草にもまだない新しさが、昨日から自分の注意を惹いてゐた。果して早起の客が二人三人ほつ／＼もう乗り始めた。早く食事を終へた兄は何時の間にか、自分の後へ来て、小楊枝を使ひながら、上つたり下りたりする鐵の箱を自分と同じ様に眺めてゐた。

「二郎、今朝一寸あの昇降器へ乗つて見ようぢやないか」と兄が突然云つた。

自分は兄にしては些と子供らしい事を云ふと思つて、ひよつと後を顧た。

「何だか面白さうぢやないか」と兄は柄にもない稚氣を言葉に現はした。自分は昇降器へ乗るのは好いが、ある目的地へ行けるか何うか夫が怪しかつた。

「何處だつて構はない。さあ行かう」

自分は母と嫂も無論一所に連れて行く積りで、「さあ／＼」と大きな聲で呼び掛けた。すると兄は急に自分を留めた。

「二人で行かう。二人限りで」と云つた。

そこへ母と嫂が「何處へ行くの」と云つて顔を出した。

「何一寸あのエレゼーターへ乗つて見るんです。二郎と一所に。女には劍呑だから、御母さんや直は止した方が好いでせう。僕等がまあ乗つて試して見ますから」

母は虚空に昇つて行く鐵の箱を見ながら氣味の悪さうな顔をした。

「直御前何うするい」

母が斯う聞いた時、嫂は例の通り淋しい醫を寄せて、「妾は何うでも構ひません」と答へた。それが大人しいとも取れるし、又聽きやうでは、冷淡とも無愛想とも取れた。夫を自分は兄に對して氣の毒と思ひ嫂に對しては損だと考へた。

二人は浴衣掛けで宿を出ると、すぐ昇降器へ乗つた。箱は一間四方位のもので、中に五六人這入ると戸を閉めて、すぐ引き上げられた。兄と自分は顔さへ出す事の出来ない鐵の棒の間から外を見た。さうして非常に鬱陶しい感じを起した。

「牢屋見たいだな」と兄が低い聲で私語いた。

「左右ですな」と自分が答へた。

「人間も此通りだ」

兄は時々斯んな哲學者めいた事をいふ癖があつた。自分は只「左右ですな」と答へた丈であつた。けれども兄の言葉は單に其輪廓位しか自分には呑み込めなかつた。

牢屋に似た箱の上り詰めた頂點は、小さい石山の天邊であつた。其處々に脊の低い松が嚙りつくやうに青味を添へて、單調を破るのが、夏の眼に嬉しく映つた。さうして僅かな平地に掛茶屋があつて、猿が一匹飼つてあつた。兄と自分は猿に芋を遣つたり、調戲つたりして、物の十分も其茶屋で費やした。

「何處か二人丈で話す所はないかな」

兄は斯う云つて四方を見渡した。其眼は本當に二人丈で話しの出来る靜かな場所を見附けてゐるらしかつた。

十七

其處は高い地勢の御蔭で四方とも好く見晴らされた。ことに有名な紀三井寺を蔭鬱した木立の中に遠くき出してゐた。自分は傍に居る人から淨瑠璃にある下り松といふのを教へて貰つた。其松は成程懸崖を傳ふ様に逆に枝を伸してゐた。

兄は茶店の女に、此處いらで靜かな話をするに都合の好い場所はないかと尋ねてゐたが、茶店の女は兄の問が解らないのか、何を云つても少しも要領を得なかつた。さうして地方訛りののしとかいふ語尾を頻りに繰り返した。

仕舞に兄は「ぢや其權現様へでも行くかな」と云ひ出した。

「權現様も名所の一つだから好いでせう」

二人はすぐ山を下りた。俥にも乗らず、傘も差さず、麥藁帽子丈被つて暑い砂道を歩いた。斯うして兄と一所に昇降器へ乗つたり、權現へ行つたりするのが、其日は自分に取つて、何だか不安に感ぜられた。平生でも兄と差向ひになると多少氣不精には違ひなかつたけれども、其日程落ち附かない事も亦珍らしかつた。自分は兄から「おい二郎二人で行かう、二人限りで」と云はれた時から既に變な心持がした。

二人は額から油汗をぢり／＼湧かした。其上に自分は實際昨夕食つた鯛の焙烙蒸に少し中てられてゐた。そこへ段々高くなる太陽が容赦なく具合の悪い頭を照らしたので、自分は仕方なしに黙つて歩いてゐた。兄も無言の儘體を運ばした。宿で借りた粗末な下駄がさく／＼砂に喰ひ込む音が耳に附いた。

「二郎何うかしたか」

兄の聲は全く藪から棒が急に出了た様に自分を驚かした。

「少し心持が變です」

二人は又無言で歩き出した。

漸く權現の下へ來た時、細い急な石段を仰ぎ見た自分は、其高いのに辟易する丈で、容易に登る勇氣は出し得なかつた。兄は其下に竝べてある葦草履を突掛けて十段ばかり一人で上つて行つたが、後から續かない自分に氣が附いて、「おい來ないか」と喚しく呼んだ。自分も仕方なしに婆さんから草履を一足借りて、骨を折つて石段を上り始めた。夫でも中途位から一步ごとに膝の上に兩手を置いて、身體の重みを託さなければならなかつた。兄を下から見上げると左も焦熱つたさうに頂上の山門の角に立つてゐた。

「丸で酔つ拂ひの様ぢやないか、段々を筋違に練つて歩くさまは」

自分は何と評されても構はない氣で、早速帽子を地の上に投げると同時に、肌を抜いだ。扇を持たないので、手にした手帛でしきりに胸の邊を拂つた。自分は後から「おい二郎」と屹度何か云はれるだらうと思つて、内心穩やかでなかつた所爲か、汗に濡れた手帛を無暗に振り動かした。さうして「暑い暑い」と續げざまに云つた。

兄は聽て自分の傍へ來て其處にあつた石に腰を卸ろした。其石の後は篠竹が一面に生えて遙かの下迄石垣の縁を駈す様に茂つてゐた。其中から大きな椿が所々に白茶けた幹を現はすのが殊に目立つて見えた。

「成程此處は靜かだ。此處なら悠り話しが出來さうだ」と兄は四方を見廻した。

十八

「二郎少し御前に話しがあるがね」と兄が云つた。

「何です」

兄は少時逡巡して口を開かなかつた。自分は又それを聞くのが厭さに、催促もしなかつた。

「此處は涼しいですね」と云つた。

「あゝ涼しい」と兄も答へた。

實際其處は日影に遠い所爲か涼しい風の通ふ高みであつた。自分は三四分手帛を動かした後、急に肌を入れた。山門の裏には物寂びた小さい拜殿があつた。餘程古い建物と見えて、軒に彫り附けた獅子の頭杯は繪の具が半分剥けかゝつてゐた。

自分は立つて山門を潛つて拜殿の方へ行つた。

「兄さん此方の方がまだ涼しい。此方へ入らつしやい」

兄は答もしなかつた。自分は夫を機に拜殿の前面の左右に逍遙した。さうして暑い日を遮る高い常磐木を見てゐた。所へ兄が不平な顔をして自分に近づいて來た。

「おい少し話があるんだと云つたぢやないか」
自分は仕方なしに拜殿の段々に腰を掛けた。兄も自分に竝んで腰を掛けた。

「何ですか」

「實は直の事だがね」

兄は甚だ云ひ悪い所をやつと云ひ切つたといふ風に見えた。自分は「直」といふ言葉を聞くや否や冷りとした。兄夫婦の間柄は母が自分に訴へた通り、自分にも大抵は呑み込めてゐた。さうして母に約束した如く、自分は何時か折を見て、嫂に腹の中をつくり聴き糺した上、此方から其知識をもつて、積極的に兄に向はうと思つてゐた。それを自分が遣らないうちに、若し兄から先を越されてもすると困るので、自分にはひそかに其處を心配してゐた。實を云ふと、今朝兄から「二郎、二人で行かう、二人限りで」と云はれた時、自分は或は此問題が出るのではあるまいかと掛念して自づと厭になつたのである。

「嫂さんが何うかしたんですか」と、自分は己むを得ず兄に聞き返した。

「直は御前に惚れてるんぢやないか」

兄の言葉は突然であつた。且普通兄の有つてゐる品格にあたひしなかつた。

「何うして」

「何うしてと聞かれると困る。夫から失禮だと怒られては猶困る。何も文を拾つたとか、接吻した所を見たとか云ふ實證から来た話ではないんだから。本當いふと表向きこんな愚劣な問を、苟も夫たる己が、他人に向つて掛けられた譯のものではない。ないが相手が御前だから己も己の體面を構はずに、聞き悪い所を我慢して聞くんのだ。だから云つて呉れ」

「だつて嫂さんですぞ相手は。夫のある婦人、殊に現在の嫂ですぞ」

自分は斯う答へた。さうして斯う答へるより外に何と云ふ言葉も出なかつた。

「それは表面の形式から云へば誰もさう答へなければならぬ。御前も普通の人間だからさう答へるのが至當だらう。己も其一言を聞けば只恥ぢ入るより外に仕方がない。けれども二郎御前は幸ひに正直な御父さんの遺傳を受けてゐる。それに近頃の、何事も隠さないと云ふ主義を最高のものとして信じてゐるから聞くのだ。形式上の答は己にも聞かない先から解つてゐるが、たゞ聞きたいのは、もつと奥の奥の底にある御前の感じだ。その本當の所を何うぞ聞かして呉れ」

十九

「そんな腹の奥の奥底にある感じなんて僕に有る筈がないぢやありませんか」

斯う答へた時、自分は兄の顔を見ないで、山門の屋根を眺めてゐた。兄の言葉はしばらく自分の耳に聞こえなかつた。すると其れが一種の痼高い、さも昂奮を抑へたやうな調子になつて響いて來た。

「おい二郎何だつて其んな輕薄な挨拶をする。己と御前は兄弟ぢやないか」
自分は驚いて兄の顔を見た。兄の顔は常磐木の蔭で見ると所爲か稍蒼味を帯びてゐた。

「兄弟ですとも。僕はあなたの本當の弟です。だから本當の事を御答へした積りです。今云つたのは決して空々しい挨拶でも何でもありません。眞底さうだから左右いふのです」

兄の神経の鋭敏な如く自分は熱しやうしい性急であつた。平生の自分なら或は斯んな返事は出なかつたかも知れない。兄は其時簡單な一句を射た。

「屹度」

「え、屹度」

「だつて御前の顔は赤いちやないか」
實際其時の自分の顔は赤かつたかも知れない。兄の面色の蒼いのに反して、自分は我知らず、兩方の頬の熱るのを強く感じた。其上自分は何と返事をして好いか分らなかつた。

すると兄は何と思つたか忽ち階段から腰を起した。さうして腕組をしながら、自分の席を取つてゐる前を右左に歩き出した。自分は不安な眼をして、彼の姿を見守つた。彼は始めから眼を地面の上に落としてゐた。一三度自分の前を横切つたけれども決して一遍も其眼を上げて自分を見なかつた。三度目に彼は突如として、自分の前に来て立ち留まつた。

「二郎」

「はい」

「おれは御前の兄だつたね。誠に子供らしい事を云つて濟まなかつた」

兄の眼の中には涙が一杯溜まつてゐた。

「何故です」

「おれは是でも御前より學問も餘計した積りだ。見識も普通の人間より持つてゐると計り今日迄考へてゐた。所があんな子供らしい事をつい口にして仕舞つた。まことに面目ない。何うぞ兄を輕蔑して呉れるな」

「何故です」

自分は簡單な此問を再び繰り返した。

「何故ですとさう眞面目に聞いて呉れるな。あ、己は馬鹿だ」

兄は斯う云つて手を出した。自分はすぐ其手を握つた。兄の手は冷たかつた。自分の手も冷たかつた。

「たゞ御前の顔が少し許り赤くなつたからと云つて、御前の言葉を疑るなんて、まことに御前の人格に對して濟まない事だ。何うぞ堪忍して呉れ」

自分は兄の氣質が女に似て陰晴常なき天候の如く變るのを好く承知してゐた。然し一見識ある彼の特長

として、自分にはそれが天真爛漫の子供らしく見えたり、又は玉のやうに玲瓏な詩人らしく見えたりした。自分は彼を尊敬しつつも、何處か馬鹿にし易い所のある男の様に考へない譯に行かなかつた。自分は彼の手を握つた儘「兄さん、今日は頭が何うかして居るんですよ。そんな下らない事はもう是限りにして徐々歸らうぢやありませんか」と云つた。

二十

兄は突然自分の手を放した。けれども決して其處を動かうとしなかつた。元の通り立つた儘何も云はずに自分を見下ろした。

「御前他の心が解るかい」と突然聞いた。

今度は自分の方が何も云はずに兄を見上げなければならなかつた。

「僕の心が兄さんには分らないんですか」と稍間を置いて云つた。自分の答には兄の言葉より一種の根強さが籠もつてゐた。

「御前の心は己に好く解つてゐる」と兄はすぐ答へた。

「ぢや夫で好いちやありませんか」と自分は云つた。

「いや御前の心ぢやない。女の心の事を云つてゐるんだ」

兄の言語のうち、後一句には火の附いたやうな鋭さがあつた。其鋭さが自分の耳に一種異様の響を傳へた。

「女の心だつて男の心だつて」と云ひ掛けた自分を彼は急に遮つた。

「御前は幸福な男だ。恐らくそんな事をまだ研究する必要が出て來なかつたらう」

「そりや兄さんの様な學者ぢやないから……」

「馬鹿云へ」と兄は叱り附けるやうに叫んだ。

「書物の研究とか心理學の説明とか、そんな廻り遠い研究を指すのぢやない。現在自分の眼前に居て、最も親しかるべき筈の人、其人の心を研究しなければ、居ても立つても居られないといふやうな必要に出逢つた事があるかと聞いてゐるんだ」

最も親しかるべき筈の人と云つた兄の意味は自分にすぐ解つた。

「兄さんは餘り考へ過ぎるんぢやありませんか、學問をした結果。もう少し馬鹿になつたら好いでせう」

「向うでわざと考へさせるやうに仕向けて來るんだ。己の考へ慣れた頭を逆に利用して。何うしても馬鹿にさせて呉れないんだ」

自分は茲にいたつて、殆ど慰藉の辭に窮した。自分より幾倍立派な頭を有つてゐるか分らない兄が、斯んな妙な問題に對して自分より幾倍頭を悩めてゐるかを考へると、甚だ氣の毒でならなかつた。兄が自分

より神経質な事は、兄も自分もよく承知してゐた。けれども今迄兄から斯う歇私的里的に出られた事がないので、自分は實に途方に暮れて仕舞つた。

「御前メレヂスといふ人を知つてゐるか」と兄が聞いた。

「名前丈は聞いてゐます」

「あの人の書翰集を讀んだ事があるか」

「讀む所か表紙を見た事も有りません」

「左右か」

彼は斯う云つて再び自分の傍へ腰を掛けた。自分は此時始めて懷中に敷島の袋と燐寸のある事に気が附いた。それを取り出して、自分から先づ火を點けて兄に渡した。兄は器械的にそれを吸つた。

「其人の書翰の一つのうちに彼は斯んな事を云つてゐる。——自分は女の容貌に満足する人を見ると羨ましい。女の肉に満足する人を見ても羨ましい。自分は何うあつても女の靈といふか魂といふか、所謂スピリットを攫まなければ満足が出来ない。それだから何うしても自分には戀愛事件が起らない」

「メレヂスつて男は生涯獨身で暮らしたんですかね」

「そんな事は知らない。又そんな事は何うでも構はないぢやないか。然し二郎、おれが靈も魂も所謂スピリットも攫まない女と結婚してゐる事丈は慥かだ」

二十一

兄の顔には苦悶の表情があり／＼と見えた。色々な點に於て兄を尊敬する事を忘れなかつた自分は、此時胸の奥で殆ど恐怖に近い不安を感じずには居られなかつた。

「兄さん」と自分はわざと落ち附き拂つて云つた。

「何だ」

自分は此答を聞くと同時に立つた。さうして、殊更に兄の腰を掛けてゐる前を、先刻兄が遣つたと同じ様に、然し全く別の意味で、右左へと二三度横切つた。兄は自分には丸で無頓着に見えた。兩手の指を、少し長くなつた髪の間、櫛の齒の様に深く差し込んで下を向いてゐた。彼は大變色澤の好い髪、所有者であつた。自分は彼の前を横切る度に、其漆黒の髪と其間から見える關節の細い、華奢な指に眼を惹かれた。其指は平生から自分の眼には彼の神経質を代表する如く優しく且骨張つて映つた。

「兄さん」と自分が再び呼び掛けた時、彼は漸く重さうに頭を上げた。

「兄さんに對して僕が斯んな事をいふと甚だ失禮かも知れませんがね。他の心なんて、いくら學問をしたつて、研究をしたつて、解りつこないだらうと僕は思ふんです。兄さんは僕よりも偉い學者だから固より其處に氣が附いて入らつしやるでせうけれども。いくら親しい親子だつて兄弟だつて、心と心は只通じ

てるるやうな氣持がする丈で、實際向うと此方とは身體が離れてるる通り心も離れてるるんだから仕様が
ないぢやありませんか」

「他の心は外から研究は出来る。けれども其心に爲つて見る事は出来ない。其位の事なら己だつて心得
てるる積りだ」

兄は吐き出すやうに、又懶さうに斯う云つた。自分はすぐ其後に跟いた。

「それを超越するのが宗教なんぢやありますまいか。僕なんぞは馬鹿だから仕方がないが、兄さんは何
でも好く考へる性質だから……」

「考へる丈で誰が宗教心に近づける。宗教は考へるものぢやない、信じるものだ」

兄は左も忌々しさうに斯う云ひ放つた。さうして置いて「あゝ己は何うしても信じられない。何うして、
も信じられない。たゞ考へて、考へて、考へる丈だ。二郎、何うか己を信じられる様にして呉れ」と云つ
た。

兄の言葉は立派な教育を受けた人の言葉であつた。然し彼の態度は殆ど十八九の子供に近かつた。自分
はかゝる兄を自分の前に見るのが悲しかつた。其時の彼はほとんど砂の中で狂ふ泥鰌の様であつた。

いづれの點に於ても自分より立ち勝つた兄が、斯んな態度を自分に示したのは此時が始めてであつた。
自分はそれを悲しく思ふと同時に、此傾向で彼が段々進んで行つたなら或は遠からず彼の精神に異状を呈

するやうになりはしまいかと懸念して、それが急に恐ろしくなつた。

「兄さん、此事に就いては僕も實はとうから考へてゐたんです……」

「いや御前の考へなんか聞かうと思つてゐるやしない。今日御前を此處へ連れて來たのは少し御前に頼み
があるからだ。何うぞ聞いて呉れ」

「何ですか」

事は段々面倒になつて來さうであつた。けれども兄は容易に其頼みといふのを打ち明けなかつた。所へ
我々と同じ遊覽人めいた男女が三四人石段の下に現はれた。彼等はてんでに下駄を草履と脱ぎ易へて、高
い石段を此方へ登つて來た。兄は其人影を見るや否や急に立ち上がった。「二郎歸らう」と云ひながら石
段を下り掛けた。自分もすぐ其後に随つた。

二十二

兄と自分は又元の路へ引き返した。朝來た時も腹や頭の具合が變であつたが、歸りは日盛りになつた所
爲か猶苦しかつた。生憎二人共時計を忘れたので何時だか一寸分り兼ねた。

「もう何時だらう」と兄が聞いた。

「左右ですね」と自分はぎら／＼する太陽を仰ぎ見た。「まだ午にはならないでせう」

二人は元の路を逆に歩いてゐる積りであつたが、何う間違へたものか、變に磯臭い濱邊へ出た。其處には漁師の家が雜貨店と交つて貧しい町をかたち作つてゐた。古い旗を屋根の上に立てた汽船會社の待合所も見えた。

「何だか路が違つた様ぢやありませんか」

兄は相變らず下を向いて考へながら歩いてゐた。下には貝殻が其處此處に散つてゐた。それを踏み碎く二人の足音が時々單調な歩行に一種田舎びた變化を與へた。兄は一寸立ち留まつて左右を見た。

「此處は往きに通らなかつたかな」

「え、通りやしません」

「左右か」

二人はまた歩き出した。兄は依然として下を向き勝ちであつた。自分は路を迷つた爲、存外宿へ歸るのが遅くなりはいまいかと心配した。

「何狭い所だ。何處を何う間違へたつて、歸れるのは同じ事だ」

兄は斯う云つてすたく行つた。自分は彼の歩き方を後から見て、足に任せてといふ故い言葉を思ひ出した。さうして彼より五六間後れた事を此場合何よりも難有く感じた。

自分は二人の歸り道に、兄から例の依頼といふのを屹度打ち明けられるに違ひないと思つて暗に其覺悟をしてゐた。所が事實は反對で、彼は出来る丈口數を慎んで、さつさと歩く方針に出た。それが少しは無氣味でもあつたが又大分嬉しくもあつた。

宿では母と嫂が欄干に縋紐だか明石だか他所行の着物を掛けて二人とも浴衣の儘差向ひで坐つてゐた。自分達の姿を見た母は、「まあ何處迄行つたの」と驚いた顔をした。

「あなた方は何處へも行かなかつたんですか」

欄干に干してある着物を見ながら、自分が斯う聞いた時、嫂は「え、行つたわ」と答へた。

「何處へ」

「中てて御覽なさい」

今の自分は兄のゐる前で嫂から斯う氣易く話し掛けられるのが、兄に對して何とも申し譯がないやうであつた。のみならず、兄の眼から見れば、彼女が故意に自分に丈親しみを表はしてゐるとしか解釋が出来まいと考へて誰にも打ち明けられない苦痛を感じた。

嫂は一向平氣であつた。自分には夫が冷淡から出るのか、無頓着から來るのか、又は常識を無視してゐるのか、少し解り兼ねた。

彼等の見物して來た所は紀三井寺であつた。玉津島明神の前を通へ出て、其處から電車に乗るとすぐ寺の前へ出るのだと母は兄に説明してゐた。

「高い石段でね。斯うして見上げる丈でも眼が眩ひさうなんだよ、御母さんには。是ぢや到底上れつこないと思つて、妾や何うしようか知らと考へたけれども、直に手を引つ張つて貰つて、漸く御参り丈は濟ませたが、其代り汗で着物がぐつしよりさ……」

兄は「はあ、左右ですか左右ですか」と時々氣のない返事をした。

二十三

其日は何事も起らずに濟んだ。夕方は四人でトランプをした。みんなが四枚づゝのカードを持つて、一枚を順送りに次の者へ伏せ渡しにするうちに數の揃つたのを出して仕舞ふと、何處かにスピードの一枚残る。それを握つたものが負けになるといふ温泉場などでよく流行る至極簡單なものであつた。

母と自分はよくスピードを握つては妙な顔をしてすぐ勘附かれた。兄も時々苦笑した。一番冷淡なのは嫂であつた。スピードを握らうが握るまいが、われには一向關係がないといふ風をしてゐた。是は風といふよりも寧ろ彼女の性質であつた。自分はそれでも兄が先刻の會談のあと、よく是程に昂奮した神經を治められたものだと思つてひそかに感心した。

晩は寢られなかつた。昨夕よりも猶寐られなかつた。自分はどゞん／＼と響く浪の音の間に、兄夫婦の寐てるる室に耳を澄ました。けれども彼等の室は依然として昨夜の如く靜かであつた。自分は母に見咎められるのを恐れて、其夜は敢て縁側へ出なかつた。

朝になつて自分は母と嫂を例の東洋第一エレーターへ案内した。さうして昨日の様に山の上の猿に芋を遣つた。今度は猿に馴染のある宿の女中が一所に隨つて來たので、猿を抱いたり鳴かしたり前の日よりは大分賑やかだつた。母は茶店の床几に腰を掛けて、新和歌の浦とかいふ禿けて茶色になつた山を指して何だらうと聞いてゐた。嫂は頻りに遠眼鏡はないか遠眼鏡はないかと騒いだ。

「嫂さん、芝の愛宕様ぢやありませんよ」と自分は云つて遣つた。

「だつて遠眼鏡位あつたつて好いちやありませんか」と嫂はまだ不足を竝べてゐた。

夕方になつて自分はとう／＼兄に引つ張られて紀三井寺へ行つた。是は婦人連が昨日既に參詣したといふのを口實に、我々二人丈が行く事にしたのであるが、其實兄の依頼を聞くために自分が彼から誘ひ出されたのである。

自分達は母の見た丈で恐れたといふ高い石段を一直線に上つた。其上は平たい山の中腹で眺望の好い所にベンチが一つ据ゑてあつた。本堂は傍に五重の塔を控へて、普通ありふれた佛閣よりも寂びがあつた。廂の真中から下がつてゐる白い紐などは如何にも閑靜に見えた。

自分達は何物も眼を遮らないベンチの上に腰を卸ろして竝び合つた。

「好い景色ですね」

眼の下には遙かの海が鱗の腹のやうに輝いた。其處へ名残の太陽が一面に射して、眩さが赤く頬を染める如くに感じた。澤らしい不規則な水の形も亦海より近くに、平たい面を鏡のやうに展べてゐた。兄は例の洋杖を願の下に支へて黙つてゐたが、やがて思ひ切つたと云ふ風に自分の方を向いた。

「二郎實は頼みがあるんだが」

「え、それを伺ふ積りでわざ／＼来たんだから緩り話して下さい。出来る事なら何でもしますから」

「二郎實は少し云ひ悪い事なんだがな」

「云ひ悪い事でも僕だから好いでせう」

「うん己は御前を信用してゐるから話すよ。然し驚いて呉れるな」

自分は兄から斯う云はれた時に、話しを聞かない先にまづ驚いた。さうして何んな注文が兄の口から出るかを恐れた。兄の氣分は前云つた通り變り易かつた。けれども一旦何か云ひ出すと、意地にも夫を通さなければ承知しなかつた。

二十四

「二郎驚いちや不可ないぜ」と兄が繰り返した。さうして現に驚いてゐる自分を嘲る如く見た。自分は今の兄と権現社頭の兄とを比較して丸で別人の觀をなした。今の兄は翻し難い堅い決心を以て自分に向つてゐるとしか自分には見えなかつた。

「二郎己は御前を信用してゐる。御前の潔白な事は既に御前の言語が證明してゐる。それに間違ひはないだらう」

「ありません」

「夫では打ち明けるが、實は直の節操を御前に試して貰ひたいのだ」

自分は「節操を試す」といふ言葉を聞いた時、本當に驚いた。當人から驚くなといふ注意が二遍あつたに拘らず、非常に驚いた。只あつけに取られて、呆然としてゐた。

「何故今になつてそんな顔をするんだ」と兄が云つた。

自分は兄の眼に映じた自分の顔を如何にも情なく感ぜざるを得なかつた。丸で此間の會見とは兄弟地を換へて立つたと思へなかつた。それで急に氣を取り直した。

「嫂さんの節操を試すなんて、——其んな事は廢した方が好いでせう」

「何故」

「何故つて、餘り馬鹿らしいぢやありませんか」

「何が馬鹿らしい」

「馬鹿らしいか知らないかも知れないが、必要がないぢやありませんか」

「必要があるから頼むんだ」

自分は少時黙つてゐた。廣い境内には參詣人の影も見えないので、四邊は存外静かであつた。自分は其處いらを見廻して、最後に我々二人の淋しい姿を其一隅に見出した時、薄氣味の悪い心持がした。

「試すつて、何うすれば試されるんです」

「御前と直が二人で和歌山へ行つて一晩泊つて呉れ、ば好いんだ」

「下らない」と自分は一口に退けた。すると今度は兄が黙つた。自分は固より無言であつた。海に射り附ける落日の光が次第に薄くなりつゝ、猶名残の熱を薄赤く遠い彼方に棚引かしてゐた。

「厭かい」と兄が聞いた。

「え、外の事ならですが、夫丈は御免です」と自分は判切云ひ切つた。

「ぢや頼むまい。其代り己は生涯御前を疑るよ」

「そりや困る」

「困るなら己の頼む通り遣つて呉れ」

自分は唯俯向いてゐた。何時もの兄ならもう疾くに手を出してゐる時分であつた。自分は俯向きながら、今に兄の拳が帽子の上へ飛んで来るか、又は彼の平手が頬のあたりでびしやりと鳴るかと思つて、凝と癩癩玉の破裂するのを期待してゐた。さうして其破裂の後に多く生ずる反動を機會として、兄の心を落し附

けようとした。自分は人より一倍強い程度で、此反動に罹り易い兄の氣質をよく呑み込んでゐた。

自分は大分辛抱して兄の鐵拳の飛んで来るのを待つてゐた。けれども自分の期待は全く徒勞であつた。

兄は死んだ人の如く静かであつた。遂には自分の方から狐の様に變な眼遣ひをして、兄の顔を偷み見なければならなかつた。兄は蒼い顔をしてゐた。けれども決して衝動的に動いて来る氣色には見えなかつた。

二十五

稍あつて兄は昂奮した調子で斯う云つた。

「二郎己は御前を信用してゐる。けれども直を疑つてゐる。しかも其疑られた當人の相手は不幸にして御前だ。但し不幸と云ふのは、御前に取つて不幸といふので、己には却て幸ひになるかも知れない。と云ふのは、己は今明言した通り、御前の云ふ事なら何でも信じられるし又何でも打ち明けられるから、それで己には幸ひなのだ。だから頼むのだ。己の云ふ事に滿更論理のない事もあるまい」

自分は其時兄の言葉の奥に、何か深い意味が籠もつてゐるのではなからうかと疑ひ出した。兄は腹の中で、自分と嫂の間に肉體上の關係を認めたと信じて、わざと斯ういふ難題を持ち掛けるのではあるまいか。自分は「兄さん」と呼んだ。兄の耳には兎に角、自分は餘程力強い聲を出した積りであつた。

「兄さん、外の事とは違つて是は倫理上の大問題ですよ……」

「當り前さ」

自分は兄の答の殊の外冷淡なのを意外に感じた。同時に先の疑ひが益深くなつて來た。

「兄さん、いくら兄弟の仲だつて僕はそんな残酷な事はしたくないです」

「いや向うの方が己に對して残酷なんだ」

自分は兄に向つて嫂が何故残酷であるかの意味を聞かうともしなかつた。

「そりや改めて又伺ひますが、何しろ今の御依頼丈は御免蒙ります。僕には僕の名譽がありますから。

いくら兄さんの爲だつて、名譽迄犠牲には出來ません」

「名譽？」

「無論名譽です。人から頼まれて他を試験するなんて、——外の事だつて厭でさあ。況して其んな……

探偵ぢやあるまいし……」

「二郎、己はそんな下等な行爲を御前から向うへ仕掛けてくれと頼んでゐるのぢやない。單に嫂とし又

弟として一つ所へ行つて一つ宿へ泊つて呉れといふのだ。不名譽でも何でもないぢやないか」

「兄さんは僕を疑つていらつしやるんでせう。そんな無理を仰しやるのは」

「いや信じてゐるから頼むのだ」

「馬鹿な」

兄と自分は斯んな會話を何遍も繰り返した。さうして繰り返すたびに双方共激して來た。すると一寸し

た言葉から熱が急に引いた様に二人共治まつた。

其激した或時に自分は兄を眞正の精神病患者だと断定した瞬間さへあつた。然し其發作が風のやうに過

ぎた後では又通例の人間の様にも感じた。仕舞に自分は斯う云つた。

「實は此間から僕も其事に就いては少々考へがあつて、機會があつたら嫂さんにとくと腹の中を聞いて

見る氣でゐるたんですから、夫丈なら受け合ひませう。もうぢき東京へ歸るでせうから」

「ぢや夫を明日遣つて呉れ。あした晝一所に和歌山へ行つて、晝のうちに返つて來れば差支へないだら

う」

自分は何故か夫が厭だつた。東京へ歸つて緩り折を見ての事にしたいと思つたが、片方を斷つた今更一

方も否とは云ひかねて、とう／＼和歌山見物丈は引き受ける事にした。

二十六

その明くる朝は起きた時から生憎空に斑が見えた。しかも風さへ高く吹いて例の防波堤に崩ける波の音が凄じく聞こえ出した。欄干に倚つて眺めると、白い煙が濛々と岸一面を立て籠めた。午前四人とも海

岸に出る氣がしなかつた。

午過ぎになつて、空模様は少し穏やかになつた。雲の重なる間から日脚さへ一寸々々光を出した。それでも漁船が四五艘いつもより早く樓前の堀割へ漕ぎ入れて來た。

「氣味が悪いね。何だか暴風雨でもありさうぢやないか」

母はいつもと違ふ空を仰いで、斯う云ひながら又元の座敷へ引返して來た。兄はすぐ立つて又欄干へ出た。

「何大丈夫だよ。大した事はないに極まつてる。御母さん僕が受け合ひますから出掛けようぢやありませんか。俣も既に逃へてありますから」

「そりや行つても好いけれど、行くなら皆で一所に行かうぢやないか」

自分は其方が遙かに樂であつた。出來得るなら何うか母の御供をして、和歌山行を已めたいと考へた。

「ぢや僕達も一所にその切り開いた山道の方へ行つて見ませうか」と云ひながら立ち掛けた。すると嶮しい兄の眼がすぐ自分の上に落ちた。自分は到底是では約束を履行するより外に道がなからうと又思ひ返した。

「さう〜嫂さんと約束があつたつけ」

自分は兄に對して、つい空惚けた挨拶をしなければ濟まなくなつた。すると母が今度は苦に顔をした。

「和歌山は已めに御爲よ」

自分は母と兄の顔を見比べて何うしたものだらうと躊躇した。嫂は何時もの様に冷然としてゐた。自分が母と兄の間に迷つてる間、彼女は殆ど一言も口にしなかつた。

「直御前二郎に和歌山へ連れて行つて貰ふ筈だつたね」と兄が云つた時、嫂はたゞ「え、」と答へた丈であつた。母が「今日は御止しよ」と止めた時、嫂は又「え、」と答へた丈であつた。自分が「嫂さん何うします」と願つた時は、又「何うでも好いわ」と答へた。

自分は一寸用事に下へ降りた。すると母が又後から降りて來た。彼女の様子は何だかそはくしてゐた。

「御前本當に直と二人で和歌山へ行く氣かい」

「え、だつて兄さんが承知なんですもの」

「幾何承知でも御母さんが困るから御止しよ」

母の顔の何處かには不安の色が見えた。自分はその不安の出所が兄にあるのか、又は嫂と自分にあるか、一寸判断に苦しんだ。

「何故です」と聞いた。

「何故ですつて、御前と直と行くのは不可ないよ」

「兄さんに悪いと云ふんですか」

自分は露骨に斯う聞いて見た。

「兄さんに悪い計りぢやないが……」

「ぢや嫂さんの僕だのに悪いと云ふんですか」

自分の問は前より猶露骨であつた。母は黙つて其處に佇んでゐた。自分は母の表情に珍らしく猜疑の影を見た。

二十七

自分は自分を信じ切り、又愛し切つてゐると計り考へてゐた母の表情を見て忽ち臆した。

「では止します。元々僕の發案で嫂さんを誘ひ出すんぢやない。兄さんが二人で行つて來いと云ふから行く丈の事です。御母さんが御不承知なら何時でも已めます。其代り御母さんから兄さんに談判して行かないで好いやうにして下さい。僕は兄さんに約束があるんだから」

自分は斯う答へて、何だか極りが悪さうに母の前に立つてゐた。實は母の前を去る勇氣が出なかつたのである。母は少し途方に暮れた様子であつた。然し仕舞に思ひ切つたと見えて、「ぢや兄さんには妾から話しをするから、其代り御前は此處に待つて御呉れ、三階へ一所に來ると又事が面倒になるかも知れない

から」と云つた。

自分は母の後影を見送りながら、事が斯んな風に引つ絡まつた日には、到底嫂を連れて和歌山などへ行く氣になれない、行つた所で肝心の用は辨じない、何うか母の思ひ通りに事が變じて呉れ、ば好いがと思つた。さうして氣の落ち附かない胸を抱いて、廣い座敷を右左に目的もなく往つたり來つたりした。

やがて三階から兄が下りて來た。自分は其顔をちらりと見た時、是は何うしても行かなければ濟まないなとすぐ讀んだ。

「二郎、今になつて違約して貰つちや己が困る。貴様だつて男だらう」

自分は時々兄から貴様と呼ばれる事があつた。さうして此貴様が彼の口から出たときは屹度用心して後難を避けた。

「いえ行くんです。行くんですが御母さんが止せと仰しやるから」

自分が斯う云つてゐるうちに、母が又心配さうに三階から下りて來た。さうしてすぐ自分の傍へ寄つて、「二郎御母さんは先刻あゝ云つたけれども、よく一郎に聞いて見ると、何だか紀三井寺で約束した事があるとか云ふ話だから、残念だが仕方ない。矢つ張り其約束通りになさい」と云つた。

「え、」

自分は斯う答へて、あとは何も云はない事にした。

やがて母と兄は下に待つてゐる俥に乗つて、樓前から右の方へ鐵輪の音を鳴らして去つた。
「ぢや僕等も徐々出掛けませうかね」と嫂を顧み時、自分は實際好い心持ではなかつた。
「何うです出掛ける勇氣がありますか」と聞いた。
「あなたは」と向うも聞いた。

「僕はありません」
「貴方になれば、妾にだつてあるわ」
自分は立つて着物を着換へ始めた。

嫂は上着を引つ掛けて呉れながら、「貴方何だか今日は勇氣がないやうね」と調戯ひ半分に云つた。自分は全く勇氣がなかつた。
二人は電車の出る所迄歩いて行つた。生憎近路を取つたので、嫂の薄い下駄と白足袋が一足毎に砂の中に潛つた。

「歩き悪いでせう」
「え」と云つて彼女は傘を手に持つた儘、後を向いて自分の後足を顧み。自分は赤い靴を砂の中に埋めながら、今日の使命を何處で何う果たしたものだらうと考へた。考へながら歩く所爲か會話は少しも機まな心持がした。

「貴方今日は珍らしく黙つていらつしやるのね」と遂に嫂から注意された。

二十八

自分は嫂と竝んで電車で腰を掛けた。けれども大事の用を前に控へてゐるといふ氣が胸にあるので、何うしても機嫌よく話しは出来なかつた。

「何故そんなに黙つていらつしやるの」と彼女が聞いた。自分は宿を出てから斯う云ふ意味の質問を彼女から既に二度迄受けた。それを裏から見ると、二人でもつと面白く話さうぢやありませんかと云ふ意味も映つてゐた。

「あなた兄さんにそんな事を云つたことがありますか」
自分の顔は稍眞面目であつた。嫂は一寸それを見て、すぐ窓の外を眺めた。さうして「好い景色ね」と云つた。成程其時電車の走つてゐる所は、悪い景色ではなかつたけれども、彼女の殊更にそれを眺めた事は明らかであつた。自分はわざと嫂を呼んで再び前の質問を繰り返した。

「何故そんな詰らない事を聞くのよ」と云つた彼女は、殆ど一顧に價しない風をした。
電車は又走つた。自分は次の停留所へ来る前又執拗く同じ問を掛けて見た。
「うるさい方ね」と彼女が遂に云つた。「そんな事聞いて何になさるの。そりや夫婦ですもの、その位

な事云つた覚えはあるでせうよ。それが何うしたの」

「何うもしやしません。兄さんにも左右いふ親しい言葉を始終掛けて上げて下さいと云ふ丈です」

彼女は蒼白い頬へ少し血を寄せた。其量が乏しい所爲か、頬の奥の方に灯を点けたのが遠くから皮膚をほてらしてゐる様であつた。しかし自分は其意味を深くも考へなかつた。

和歌山へ着いた時、二人は電車を降りた。降りて始めて自分は和歌山へ始めて来た事を覺つた。實は此地を見物する口實の下に、嫂を連れて来たのだから、形式にも何處か見なければならなかつた。

「あら貴方まだ和歌山を知らないの。夫でゐて妾を連れて来るなんて、随分呑氣ね」

嫂は心細さうに四方を見廻した。自分も何分か極りが悪かつた。

「俤へでも乗つて車夫に好い加減な所へ連れて行つて貰ひませうか。それともぶらく御城の方へでも歩いて行きますか」

「左右ね」

嫂は遠く空を眺めて、近い自分には眼を注がなかつた。空は此處も海邊と同じやうに曇つてゐた。不規則に濃淡を亂した雲が幾重にも二人の頭の上を蔽つて、日を直下に受けるよりは蒸し暑かつた。其上何時驟雨が来るか解らない程に、空の一部分が既に黒ずんでゐた。其黒ずんだ圓の四方が暈されたやうに輝いて、丁度今我々が見捨てて来た和歌の浦の見當に、凄しい空の一角を描き出してゐた。嫂は今その氣味の

の悪い所を眉を寄せて眺めてゐるらしかつた。

「降るでせうか」

自分は固より降るに違ひないと思つてゐた。それで兎に角俤を雇つて、見る丈の所を馳け抜けた方が得策だと考へた。自分は直ちに俤を命じて、何處でも構はないから成るべく早く見物の出来る様に挽いて廻れと命じた。車夫は要領を得た如く又得ない如く、無暗に驅けた。狭い町へ出たり、例の蓮の咲いてゐる濠へ出たり又狭い町へ出たりしたが、一向是ぞといふ所はなかつた。最後に自分は俤の上で、斯う驅けて計りゐるては肝心の話しが出来ないと氣が附いて、車夫に何處か寛り坐つて話しの出来る所へ連れて行けと差圖した。

二十九

車夫は心得て驅け出した。今迄と違つて威勢があまり好過ぎると思ふうちに、二人の俤は狭い横町を曲がつて、突然大きな門を潛つた。自分があわてて、車夫を呼び留めようとした時、梶棒は既に玄關に横附けになつてゐた。二人は何うする事も出来なかつた。其上若い着飾つた下女が案内に出たので、二人は遂に上がるべく餘儀なくされた。

「斯んな所へ来る筈ぢやなかつたんですが」と自分はつい言譯らしい事を云つた。

「何故。だつて立派な御茶屋ぢやありませんか。結構だわ」と嫂が答へた。其答へ振から推すと、彼女は最初から斯ういふ料理屋めいた所へでも来るのを豫期してゐたらしかつた。

實際、嫂のいつた通り其座敷は物綺麗に且堅牢に出来上がつてゐた。
「東京邊の安料理屋より却て好い位ですね」と自分は柱の木口や床の軸などを見廻した。嫂は手摺の所へ出て、中庭を眺めてゐた。古い梅の株の下に、蘭の茂りが蒼黒い影を深く見せてゐた。梅の幹にも硬くて細長い苔らしいものが處々に喰つ附いてゐた。

下女が浴衣を持つて風呂の案内に來た。自分は風呂に這入る時間が惜しかつた。さうして日が暮れはしまいかと心配した。出来るならば一刻も早く用を片付けて、約束通り明るい路を濱邊まで歸りたいと念じた。

「何うします嫂さん、風呂は」と聞いて見た。

嫂も明るいうちには歸るやうに兄から兼ねて云ひ附けられてゐたので、其處はよく承知してゐた。彼女は帯の間から時計を出して見た。

「まだ早いよ、二郎さん。御湯へ這入つても大丈夫だわ」

彼女は時間の遅く見えるのを全く天氣の所爲にした。尤も濁つた雲が幾重にも空を鎖してゐるので、時計の時間よりは世の中が暗く見えたのは慥かに違ひなかつた。自分は又今にも降り出しさうな雨を恐れた。

降るなら一仕切りさつと來た後で、歸つた方が却て樂だらうと考へた。

「ちや一寸汗を流して行きませうか」

二人はとうとう風呂に入つた。風呂から出ると膳が運ばれた。時間からいふと飯には早過ぎた。酒は遠慮したかつた。且飲める口でもなかつた。自分は已むを得ず、吸物を吸つたり、刺身を突ついたりした。下女が邪魔になるので、用があれば呼ぶからと云つて下けた。

嫂には改まつて云ひ出したものだらうか、又は夫となく話しの序に其處へ持つて行つたものだらうかと思案した。思案し出すと何方も宜い様で又何方も悪い様であつた。自分は吸物椀を手にした儘ほんやり庭の方を眺めてゐた。

「何を考へて入らつしやるの」と嫂が聞いた。

「何、降りやしまいかと思つてね」と自分は宜い加減な答をした。

「左右。そんなに御天氣が怖い。貴方にも似合はないのね」

「怖かないけど、もし強雨にでもなつちや大變ですからね」

自分が斯う云つてゐる内に、雨はほつりくと落ちて來た。餘程早くからの宴會でもあるのか、向うに見える二階の廣間に、一三人紋付羽織の人影が見えた。其見當で藝者が三味線の調子を合はせてゐる音が聞こえ出した。

宿を出るとき既にざわついてゐた自分の心は、此時一層落附きを失ひ掛けて來た。自分は腹の中で、今日は到底しんみりした話をする氣になれないと恐れた。何故又其今日に限つて、こんな變な事を引き受けたのだらうと後悔もした。

三十

嫂はそんな事に氣の附く筈がなかつた。自分が雨を氣にするのを見て、彼女は却て不思議さうに詰つた。

「何でそんなに雨が氣になるの。降れば後が涼しくなつて好いちやありませんか」

「だつて何時已むか解らないから困るんです」

「困りやしないわ。いくら約束があつたつて、御天氣の所爲なら仕方がないんだから」

「然し兄さんに對して僕の責任がありますよ」

「ぢやすぐ歸りませう」

嫂は斯う云つて、すぐ立ち上がった。其様子には一種の決斷があらはれてゐた。向うの座敷では客の頭が揃つたのか、三味線の音が雨を隔てて爽やかに聞こえた。電燈も既に輝いた。自分も半ば嫂の決心に促されて、腰を立て掛けたが、考へると受け合つて來た話はまだ一言も口へ出してゐなかつた。後れて歸るのが母や兄に濟まない如く、少しも嫂に肝心の用談を打ち明けないのが又自分の心に濟まなかつた。

「嫂さん此雨は容易に已みさうもありませんよ。それに僕は嫂さんに少し用談があつて來たんだから」
自分は半分空を眺めて又嫂を振り返つた。自分は固よりの事、立ち上がった彼女も、まだ歸る仕度は始めなかつた。彼女は立ち上がったには、立ち上がったが、自分の様子次第で其後の態度を一定しようとして、五分の隙間なく身構へてゐるらしく見えた。自分は又軒端へ首を出して上の方を望んだ。室の位置が中庭を隔てて向うに大きな二階建の廣間を控へてゐるため、空は何時ものやうに廣くは眼界に落ちなかつた。従つて雲の往來や雨の降り按排も、一般的にはよく分らなかつた。けれども凄じさが先刻よりは一層甚しく庭木を痛振つてゐるのは事實であつた。自分は雨よりも空よりも、まづ此風に辟易した。

「あなたも妙な方ね。歸るといふから其積りで仕度をすれば、又坐つて仕舞つて」

「仕度つて程の仕度もしないぢやありませんか。只立つた限りでさあ」
自分が斯う云つた時、嫂はにつこりと笑つた。さうして故意と己の袖や裾のあたりを成程といつたやうな又意外だと驚いたやうな眼附で見廻した。それから微笑を含んで其様子を見てゐた自分の前に再びべたりと坐つた。

「何よ用談があるつて。妾にそんな六づかしい事が分りやしないわ。それよりか向うの御座敷の三味線でも聞いてた方が増しよ」
雨は軒に響くといふよりも寧ろ風に乗せられて、氣儘な場所へ叩き附けられて行く様な音を起した。其

間に三味線の音が氣紛れものらしく時々二人の耳を掠め去つた。

「用があるなら早く仰しやいな」と彼女は催促した。

「催促されたつて一寸云へる事ぢやありません」

自分は實際彼女から促された時、何と切り出して好いか分らなかつた。すると彼女はにやくと笑つた。

「貴方取つて幾何なの」

「そんなに冷かしちや不可ません。本當に眞面目な事なんだから」

「だから早く仰しやいな」

自分は愈改まつて忠告がましい事を云ふのが厭になつた。さうして彼女の前へ出た今の自分が何だか彼女から一段低く見縊られてゐる様な氣がしてならなかつた。それなのに其處に一種の親しみを感ぜずには又居られなかつた。

三十一

「嫂さんは幾何でしたつね」と自分は遂に即かぬ事を聞き出した。

「是でもまだ若いよ。貴方より餘つ程下の積りですわ」

自分は始めから彼女の年と自分の年とを比較する氣はなかつた。

「兄さんとこへ來てからもう何年になりますかね」と聞いた。

嫂は唯澄まして「左右ね」と云つた。

「妾そんな事みんな忘れちまつたわ。だいち自分の年さへ忘れる位ですもの」

嫂の此恍惚方は如何にも嫂らしく響いた。さうして自分には却て嬌態とも見える此不自然が、眞面目な

兄に甚しい不愉快を與へるのではなからうかと考へた。

「嫂さんは自分の年にさへ冷淡なんですわね」

自分は斯んな皮肉を何となく云つた。然し云つたときの浮氣な心にすぐ氣がつくと急に兄に濟まない恐

ろしさに襲はれた。

「自分の年なんか、いくら冷淡でも構はないから、兄さんに丈はもう少し氣を附けて親切にして上げ

て下さい」

「妾そんなに兄さんに不親切に見えて。是でも出来る丈の事は兄さんに爲て上げて積りよ。兄さん計

りぢやないわ。貴方にだつて左右でせう。ねえ二郎さん」

自分は、自分にもつと不親切にして構はないから、兄の方には最う少し優しくして呉れると、頼む積りで嫂の眼を見た時、又急に自分の甘いのに氣が附いた。嫂の前へ出て、斯う差し向ひに坐つたが最後、到底眞底から誠實に兄の爲に計る事は出来ないのだと迄思つた。自分は言葉には少しも窮しなかつた。何ん

な言語でも兄の爲に使はうとすれば使はれた。けれども其を使ふ自分の心は、兄の爲でなくつて却て自分の爲に使ふのと同じ結果になりやすかつた。自分は決して斯んな役割を引き受けべき人格でなかつた。自分は今更のやうに後悔した。

「貴方急に黙つちまつたのね」と其時 嫂が云つた。恰も自分の急所を突く様に。

「兄さんの爲に、僕が先刻からあなたに頼んでゐる事を、嫂さんは眞面目に聞いて下さらないから」

自分は恥づかしい心を抑へてわざと斯う云つた。すると嫂は變に淋しい笑ひ方をした。

「だつて夫や無理よ二郎さん。妾馬鹿で氣が附かないから、みんなから冷淡と思はれてゐるかも知れないけれど、是で全く出来る丈の事を兄さんに對してしてゐる氣なんですもの。——妾や本當に腑抜けなのよ。ことに近頃は魂の抜け殻になつちまつたんだから」

「さう氣を腐らせないで、もう少し積極的にしたら何うです」

「積極的つて何うするの。御世辭を使ふの。妾御世辭は大嫌ひよ。兄さんも御嫌ひよ」

「御世辭なんか嬉しがるものもないでせうけれども、もう少し何うかしたら兄さんも幸福でせうし、嫂さんも仕合せだらうから……」

「宜御座んす。もう伺はないでも」と云つた嫂は、其言葉の終らないうちに涙をほろ／＼と落とした。

「妾のやうな魂の抜け殻はさぞ兄さんには御氣に入らないでせう。然し私には是で満足です。是で深山で

す。兄さんについて今迄何の不足を誰にも云つた事はない積りです。其位の事は二郎さんも大抵見てゐて解りさうなもんだの……」

泣きながら云ふ嫂の言葉は途切れ／＼にしか聞こえなかつた。然し其途切れ／＼の言葉が鋭い力をもつて自分の頭に應へた。

三十二

自分は經驗のある或年長者から女の涙に金剛石は殆どない、大抵は皆ギヤマン細工だと嘗て教はつた事がある。其時自分は成程そんなものかと思つて感心して聞いてゐた。けれども夫は單に言葉の上の知識に過ぎなかつた。若輩な自分は嫂の涙を眼の前に見て、何となく可憐に堪へないやうな氣がした。外の場合なら彼女の手を取つて共に泣いて遣りたかつた。

「そりや兄さんの氣六づかしい事は誰にでも解つてます。あなたの辛抱も並大抵ぢやないでせう。けれども兄さんはあれで潔白すぎる程潔白で正直すぎる程正直な高尚な男です。敬愛すべき人物です……」

「二郎さんに何もそんな事を伺はないでも兄さんの性質位妾だつて承知してゐる積りです。妻でも

の」

嫂は斯う云つて又しやくり上げた。自分は益可哀さうになつた。見ると彼女の眼を拭つてゐた小形の

手帛が、皺だらけになつて濡れてゐた。自分は乾いてゐる自分ので彼女の眼や頬を撫でてやるために、彼女の顔に手を出したくて堪らなかつた。けれども、何とも知れない力が又其手をぐつと抑へて動けないやうに締め附けてゐる感じが強く働いた。

「正直な所嫂さんは兄さんが好きなんですか、又嫌ひなんですか」

自分は斯う云つて仕舞つた後で、此言葉は手を出して嫂の頬を、拭いて遣れない代りに自然口の方から出たのだと氣が附いた。嫂は手帛と涙の間から、自分の顔を覗くやうに見た。

「二郎さん」

「え、」

此簡単な答は、恰も磁石に吸はれた鐵の屑の様に、自分の口から少しの抵抗もなく、何等の自覺もなく釣り出された。

「貴方何の必要があつて其んな事を聞くの。兄さんが好きか嫌ひかなんて。妾が兄さん以外に好いてる男でもあると思つていらつしやるの」

「左右いふ譯ぢや決してないんですが」

「だから先刻から云つてゐるぢやありませんか。私が冷淡に見えるのは、全く私が臍抜けの所爲だつて」

「さう臍抜けを殊更に振り舞はされちや困るね。誰も宅のものでそんな悪口を云ふものは一人もないんですから」

「云はなくつても臍抜けよ。好く知つてゐるわ、自分だつて。けど、是でも時々他から親切だつて賞められる事もあつてよ。さう馬鹿にしたものでもないわ」

自分は嘗て大きなクツションに蜻蛉だの草花だのを色々の絲で、嫂に縫ひ附けて貰つた御禮に、あなたは親切だと感謝した事があつた。

「あれ、まだ有るでせう。綺麗ね」と彼女が云つた。

「え、。大事にして持つてゐます」と自分は答へた。自分は事實だから斯う答へざるを得なかつた。斯う答へる以上、彼女が自分に親切であつたといふ事實を裏から認識しない譯に行かなかつた。

不圖耳を欬てると向うの二階で弾いてゐた三味線は何時の間にか已んでゐた。残り客らしい人の酔つた聲が時々風を横切つて聞こえた。もう夫程遅くなつたのかと思つて、時計を捜し出しに掛かつた所へ女中が飛石傳ひに縁側から首を出した。

自分等は此女中を通じて、和歌の浦が今暴風雨に包まれてゐるといふ事を知つた。電話が切れて話しか通じないといふ事を知つた。往來の松が倒れて電車が通じないといふ事も知つた。

自分は其時急に母や兄の事を思ひ出した。眉を焦がす火の如く思ひ出した。狂ふ風と渦巻く浪に弄ばれつゝある彼等の宿が想像の眼にありくと浮かんた。

「嫂さん大變な事になりましたね」と自分は嫂を顧た。嫂は夫程驚いた様子もなかつた。けれども氣の所爲か、常から蒼い頬が一層蒼いやうに感ぜられた。其蒼い頬の一部と眼の縁に先刻泣いた痕跡がまだ残つてゐた。嫂はそれを下女に悟られるのが厭なんだらう、電燈に疎い不自然な方角へ顔を向けて、わざと入口の方を見なかつた。

「和歌の浦へは何うしても歸られないんでせうか」と云つた。
見當違ひの方から出た此問は、自分に云ふのか、又は下女に聞くのか、一寸解らなかつた。

「俾でも駄目だらうね」と自分が同じ様な問を下女に取り次いだ。
下女は駄目といふ言葉こそ繰り返さなかつたが、危険な意味を反覆説明して聞かせた上、是非今夜は和歌山へ泊れと忠告した。彼女の顔は寧ろ吾々二人の利害を標的にして物を云つてゐるらしく眞面目に見えた。自分は下女の言葉を信ずれば信ずる程母の事が氣になつた。

防波堤と母の宿との間には彼是五六町の道程があつた。波が高く少土手を越す位なら、容易に三階の座敷迄来る氣遣ひはなからうとも考へた。然しもし海嘯が一度に寄せて來るとすると、……
「おい海嘯であすこいらの宿屋がすつかり波に攫はれる事があるかい」

自分は本當に心配の餘り下女に斯う聞いた。下女はそんな事はないと斷言した。然し波が防波堤を越えて土手下へ落ちてくるため、中が湖水のやうに一杯になる事は二三度あつたと告げた。

「夫にしたつて、水に浸つた家は大變だらう」と自分は又聞いた。
下女は、高々水の中で家がぐるぐる回る位なもので、海迄持つて行かれる心配は先づあるまいと答へた。此香氣な答が心配の中にも自分を失笑せしめた。

「ぐるぐる回りや夫で澤山だ。其上海迄持つてかれた日にや好い災難ぢやないか」
下女は何とも云はずに笑つてゐた。嫂も暗い方から電燈をまともに見始めた。

「嫂さん何うします」
「何うしますつて、妾女だから何うして好いか解らないわ。若し貴方が歸ると仰しやれば、何んな危険があつたつて、妾一所に行くわ」

「行くのは構はないが、困つたな。ぢや今夜は仕方がないから此處へ泊るとしますか」
「貴方が御泊りになれば妾も泊るより外に仕方がないわ。女一人で此暗いのにとても和歌の浦迄行く譯には行かないから」

下女は今迄勸違ひをしてゐたと云はぬ計りの眼遣ひをして二人を見較べた。
「おい電話は何うしても通じないんだね」と自分は又念のため聞いて見た。

「通じません」

自分は電話口へ出て直接に試みて見る勇氣もなかつた。

「ぢや仕様がないう泊ることに極めませう」と今度は嫂に向つた。

「え、」

彼女の返事は何時もの通り簡單でさうして落ち附いてゐた。

「町の中なら俣が通ふんだね」と自分は又下女に向つた。

三十四

二人はこれから料理屋で周旋して呉れた宿屋迄行かなければならなかつた。仕度をして玄關を下りた時、其所に輝く電燈と、車夫の提灯とが、雨の音と風の叫びに牙えて、恰も闇に狂ふ物凄さを照らす道具のやうに思はれた。嫂は先づ色の眼に附くあでやかな姿を黒い幌の中へ隠した。自分もつゞいて窮屈な深い桐油の中に身體を入れた。

幌の中に包まれた自分は殆ど往來の凄じさを見る邊がなかつた。自分の頭はまだ経験した事のない海嘯といふものに絶えず支配された。でなければ、意地の悪い天候の御蔭で、自分が兄の前で一徹に退けた事を、何うしても實行しなければならなくなつた運命をつらく観じた。自分の頭は落ち附いて想像したり観

じたりする程の餘裕を無論有たなかつた。たゞ亂雑な火事場のやうに取留めもなくくるく廻轉した。

そのうち俣の棍棒が一軒の宿屋のやうな構の門口へ横附けになつた。自分は何だか暖簾を潜つて土間へ這入つたやうな氣がしたが慥かには覺えてゐない。土間は幅の割に堅からいつて大分長かつた。帳場も見えず番頭も居ず、たゞ一人の下女が取次に出た丈で、宵の口としては至つて淋しい光景であつた。

自分達は黙つて其所に突立つてゐた。自分は何故だか嫂に話したくなかつた。彼女も澄まして絹張の傘の先を斜に土間に突いたなりで立つてゐた。

下女の案内で二人の通された部屋は、縁側を前に御簾の様な簀垂を軒に懸けた古めかしい座敷であつた。柱は時代で黒く光つてゐた。天井にも煤の色が一面に見えた。嫂は例の傘を次の間の衣桁に懸けて、「こゝは向うが高い棟で、此方が厚い練堀らしいから風の音がそんなに聞こえないけれど、先刻俣へ乗つた時は大變ね。幌の上でひゆう〜いふのが氣味が悪かつた位よ。あなた風の重みが俣の幌に押し掛かつて來るのが乗つて分つたでせう。妾も少しで俣が引つ繰り返るかも知れないと思つたわ」と云つた。

自分は少し逆上してゐたので、そんな事はよく注意してゐられなかつた。けれども其通りを眞直に答へる程の勇氣もなかつた。

「え、随分な風でしたね」と胡魔化した。

「此處で此位ぢや、和歌の浦はさぞ大變でせうね」と嫂が始めて和歌の浦の事を云ひ出した。

自分は胸が又わく／＼し出した。「姐さん此處の電話も切れてるのかね」と云つて、答も待たずに風呂場に近い電話口迄行つた。其處で帳面を引つ繰り返しながら、號鈴をしきりに鳴らして母と兄の泊つてる和歌の浦の宿へ掛けて見た。すると不思議に向うで二言三言何か云つた様な氣がするので、是は難有いと思ひつゝ、猶暴風雨の模様を聞かうとすると、又薩張り通じなくなつた。それから何遍もし／＼と呼んでも幾何號鈴を鳴らしても、呼び甲斐も鳴らし甲斐も全く無くなつたので、遂に我を折つてわが部屋へ引き戻して來た。嫂は蒲團の上に坐つて茶を啜つてゐるが、自分の足音を聞きつゝ、振り返つて「電話は何うして？通じて？」と聞いた。自分は電話に就いて今の一部始終を説明した。

「大方其んな事だらうと思つた。到底駄目よ今夜は。いくら掛けたつて、風で電話線を吹き切つちまつたんだから。あの音を聞いたつて解るぢやありませんか」

風は何處からか二筋に縋れて來たのが、急に擦れ違ひになつて唸る様な怪しい音を立てて、又虚空遙かに騰る如くに見えた。

三十五

二人が風に耳を時てゐると、下女が風呂の案内に來た。それから晩食を食ふかと聞いた。自分は晩食などを欲しいと思ふ氣になれなかつた。

「何うします」と嫂に相談して見た。

「左右ね。何うでも宜いけども。折角泊つたもんだから、御膳だけでも見た方が宜いでせう」と彼女は答へた。

下女が心得て立つて行つたかと思ふと、宅中の電燈がぱたりと消えた。黒い柱と煤けた天井でたゞさへ陰氣な部屋が、今度は眞暗になつた。自分は鼻の先に坐つてゐる嫂を嗅けば嗅かれるやうな氣がした。

「嫂さん怖ありませんか」

「怖いわ」といふ聲が想像した通りの見當で聞こえた。けれども其聲のうちには怖らしい何物をも含んでゐなかつた。又わざと怖がつて見せる若々しい蓮葉の態度もなかつた。

二人は暗黒のうちに坐つてゐた。動かずに又物を云はずに、黙つて坐つてゐた。眼に色を見ない所爲か、外の暴風雨は今迄よりは餘計耳に附いた。雨は風に散らされるので夫程恐ろしい音も傳へなかつたが、風は屋根も塀も電柱も、見境なく吹き捲くつて悲鳴を上げさせた。自分達の室は地面の上の穴倉見た様な所で、四方共頑丈な建物だの厚い塗壁だのに包まれて、縁の前の小さい中庭さへ比較的安んじ見えたけれども、周圍一面から出る一種凄じい音響は、暗闇に伴なつて起る人間の抵抗し難い不可思議な威嚇であつた。

「嫂さんもう少しだから我慢なさい。今に女中が灯を持って來るでせうから」

自分は斯う云つて、例の見當から嫂の聲が自分の鼓膜に響いて來るのを暗に豫期してゐた。すると彼女は何事をも答へなかつた。それが漆に似た暗闇の威力で、細い女の聲さへ通さないやうに思はれるのが、自分には多少無氣味であつた。仕舞に自分の傍に慥かに坐つてゐるべき筈の嫂の存在が氣に掛かり出した。

「嫂さん」

嫂はまだ黙つてゐた。自分は電氣燈の消えない前、自分の向うに坐つてゐた嫂の姿を、想像で適當の距離に描き出した。さうして其を便りに又「嫂さん」と呼んだ。

「何よ」

彼女の答は何だか蒼蠅さうであつた。

「居るんですか」

「居るわ貴方。人間ですもの。嘘だと思ふなら此處へ來て手で障つて御覽なさい」

自分は手搜りに搜り寄つて見たい氣がした。けれども夫程の度胸がなかつた。其うち彼女の坐つてゐる見當で女帯の擦れる音がした。

「嫂さん何かしてゐるんですか」と聞いた。

「え、」

「何をしてゐるんですか」と再び聞いた。

「先刻下女が浴衣を持つて來たから、着換へようと思つて、今帯を解いてゐる所です」と嫂が答へた。自分が暗闇で帯の音を聞いてゐるうちに、下女は古風な蠟燭を點けて縁側傳ひに持つて來た。さうしてそれを座敷の床の横にある机の上に立てた。蠟燭の焰がちら／＼右左へ搖れるので、黒い柱や煤けた天井は勿論、灯の勢の及ぶ限りは、穩やかならぬ薄暗い光にどよめいて、自分の心を淋しく焦立たせた。殊更床に掛けた軸と、其前に活けてある花とが、氣味の悪い程目立つて蠟燭の灯の影響を受けた。自分は手拭を持つて、又汗を流しに風呂へ行つた。風呂は怪しげなカンテラで照らされてゐた。

三十六

自分は侘びしい光でやつと見分けのつく小桶を使つてざあ／＼背中を流した。出掛けに又念のためから電話をちりん／＼鳴らして見たが更に通じる氣色がないので已めた。

嫂は自分と入れ代りに風呂に入つたかと思ふとすぐ出て來た。「何だか暗くつて氣味が悪いのね。それに桶や湯槽が古いで緩り洗ふ氣にもなれないわ」

其時自分は畏まつた下女を前に置いて蠟燭の灯を便に宿帳を附けべく餘儀なくされてゐた。

「嫂さん宿帳は何う附けたら好いでせう」

「何うでも。好い加減に願ひます」

嫂は斯う云つて小さい袋から櫛やなにか這入つてゐる更紗の疊紙を出し始めた。彼女は後向きになつて蠟燭を一つ占領して鏡臺に向ひつゝ、何か遣つてゐた。自分は仕方なしに東京の番地と嫂の名を書いて、わざと傍に一郎妻と認めた。同様の意味で自分の側にも一郎弟とわざ／＼斷つた。

飯の出る前に、何の拍子か、先に暗くなつた電燈が又一時に明るくなつた。其時臺所の方でわあと喜びの関の聲を擧げたものがあつた。暴風雨で魚がないと下女が言譯を云つたに拘らず、吾々の膳の上は明らかであつた。

「丸で生き返つた様ね」と嫂が云つた。

すると電燈が又ぱつと消えた。自分は急に箸を消えた處に留めたぎり、しばらく動かさなかつた。

「おや／＼」

下女は大きな聲をして朋輩の名を呼びながら燈火を求めた。自分は電氣燈がぱつと明るくなつた瞬間に嫂が、何時の間にか薄く化粧を施したといふ艶かしい事實を見て取つた。電燈の消えた今、其顔丈が眞闇なうちに故の通り残つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

「嫂さん何時御粧したんです」

「あら厭だ眞闇になつてから、そんな事を云ひだして、貴方何時見たの」
下女は暗闇で笑ひ出した。さうして自分の眼ざとい事を賞めた。

「斯んな時に白粉迄持つて來るのは實に細かいですね、嫂さんは」と自分は又暗闇の中で嫂に云つた。

「白粉なんか持つて來やしないわ。持つて來たのはクリームよ、貴方」と彼女は又暗闇の中で辯解した。自分は暗がりの中で、しかも下女の居る前で、斯んな冗談を云ふのが常よりは面白かつた。そこへ彼女の朋輩が又別の蠟燭を二本許り點けて來た。

室の中は裸蠟燭の灯で渦を巻くやうに動搖した。自分も嫂も眉を擧げて燃える焰の先を見詰めて居た。さうして落附きのない淋しさとでも形容すべき心持を味はつた。

程なく自分達は寐た。便所に立つた時、自分は窓の間から空を仰ぐ様に覗いて見た。今迄多少静まつて居た暴風雨が、此時は夜更と共に募つたものか、眞黒な空が眞黒いなりに活動して、瞬間も休まない様感ぜられた。自分は恐ろしい空の中で、黒い電光が擦れ合つて、互に黒い針に似たものを隙間なく出しながら、此暗さを大きな音の中に維持してゐるのだと想像し、かつ其想像の前に畏縮した。

蚊帳の外には蠟燭の代りに下女が床を延べた時、行燈を置いて行つた。其行燈が又古風な陰氣なもので、一層吹き消して闇がりにした方が、微かな光に照らされる無氣味さよりは却て心持が好い位だつた。自分は燐寸を擦つて、薄暗い所で煙草を呑み始めた。

自分は先刻から少しも寐なかつた。小用に立つて、一本の紙巻を吹かす間にも色々な事を考へた。それ
が取り留めもなく雑然と一度に來るので、自分にも何が主要の問題だか捕へられなかつた。自分は燐寸を
擦つて煙草を呑んでゐる事さへ時々忘れた。而も其處に氣が附いて、再び吸口を唇に銜へる時の煙の無味
さは又特別であつた。

自分の頭の中には、今見て來た正體の解らない黒い空が、凄じく一樣に動いてゐた。夫から母や兄の
る三階の宿が波を幾度となく被つて、くるりくと廻り出してゐた。それが片附かないうちに、此部屋の
中に寐てるる嫂の事が又氣になり出した。天災とは云へ二人で此處へ泊つた言譯を何うしたものだらうと
考へた。辯解してから後、兄の機嫌を何うして取り直したものだらうとも考へた。同時に今日嫂と一所
に出て、滅多にない斯んな冒険を共にした嬉しさが何處からか湧いて出た。其嬉しさが出た時、自分は風
も雨も海嘯も母も兄も悉く忘れた。すると其嬉しさが又俄然として一種の恐ろしさに變化した。恐ろしさ
と云ふよりも、寧ろ恐ろしさの前觸れであつた。何處かに潛伏してゐるやうに思はれる不安の徴候であつ
た。さうして其時は外面を狂ひ廻る暴風雨が、木を根こぎにしたり、塀を倒したり、屋根瓦を捲くつたり
するのみならず、今薄暗い行燈の下で味のない煙草を吸つてゐる此自分を、粉微塵に破壊する豫告の如く
思はれた。

自分が斯んな事をぐる／＼考へてゐるうちに、蚊帳の中に死人の如く大人しくしてゐる嫂が、急に寐返
りをした。さうして自分に聞こえるやうに長い欠をした。

「嫂さんまだ寐ないんですか」と自分は煙草の煙の間から嫂に聞いた。

「え、だつて此吹き降りぢや寐ようにも寐られないぢやありませんか」

「僕もあの風の音が耳に附いて何うする事も出来ない。電燈の消えたのは、何でも此處いら近所にある
柱が一本とか二本とか倒れたためだつてね」

「さうよ、其んな事を先刻下女が云つたわね」

「御母さんと兄さんは何うしたでせう」

「妾も先刻から其事ばかり考へてゐるの。然しまさか浪は這入らないでせう。這入つたつて、あの土手
の松の近所にある怪しい藁屋位なものよ。持つてかれるのは。もし本當の海嘯が來てあすこ界限を悉皆攪
つて行くんなら、妾本當に惜しい事をしたと思ふわ」

「何故」

「何故つて、妾そんな物凄いの所が見たいんですもの」

「冗談ぢやない」と自分は嫂の言葉を打つた切る積りで云つた。すると嫂は眞面目に答へた。

「あら本當よ二郎さん。妾死ぬなら首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工をするのは嫌ひよ。
大水に攪はれるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死に方がしたいんですもの」

「何故つて、妾そんな物凄いの所が見たいんですもの」

「冗談ぢやない」と自分は嫂の言葉を打つた切る積りで云つた。すると嫂は眞面目に答へた。

「あら本當よ二郎さん。妾死ぬなら首を縊つたり咽喉を突いたり、そんな小刀細工をするのは嫌ひよ。
大水に攪はれるとか、雷火に打たれるとか、猛烈で一息な死に方がしたいんですもの」

「何故つて、妾そんな物凄いの所が見たいんですもの」

自分は小説などを夫程愛讀しない嫂から、始めて斯んなロマンチックな言葉を聞いた。さうして心のうちでは全く神経の昂奮から來たに違ひないと判じた。

「何かの本にでも出て來さうな死に方ですね」

「本に出るか芝居で遣るか知らないが、妾や眞劍にさう考へてるのよ。嘘だと思ふならば是から二人で和歌の浦へ行つて浪でも海嘯でも構はない、一所に飛び込んで御目に懸けませうか」

「あなた今夜は昂奮してゐる」と自分は慰撫める如く云つた。

「妾の方が貴方より何の位落ち附いてゐるか知れやしない。大抵の男は意氣地なしね、いざとなると」と彼女は床の中で答へた。

三十八

自分は此時始めて女といふものをまだ研究してゐない事に氣が附いた。嫂は何處から何う押しても押し様のない女であつた。此方が積極的に進むと丸で暖簾の様に抵抗がなかつた。仕方なしに此方が引き込むと、突然變な所へ強い力を見せた。其力の中には到底寄り附けさうにない恐ろしいものもあつた。又は是なら相手に出來るから進まうかと思つて、まだ進みかねてる中に、弗と消えて仕舞ふのもあつた。自分は彼女と話してゐる間始終彼女から翻弄されつゝある様な心持がした。不思議な事に、其翻弄される心持

が、自分を取つて不愉快であるべき筈なのに、却つて愉快でならなかつた。

彼女は最後に物凄しい決心を語つた。海嘯に攫はれて行きたいとか、雷火に打たれて死にたいとか、何しろ平凡以上に壯烈な最後を望んでゐた。自分は平生から（ことに二人で此和歌山に來てから）體力や筋力に於て遙かに優勢な位地に立ちつゝも、嫂に對しては何處となく無氣味な感じがあつた。さうして其無氣味さが甚だ狎れ易い感じと妙に相伴なつてゐた。

自分は詩や小説にそれ程親しみのない嫂のくせに、何に昂奮して海嘯に攫はれて死にたい杯と云ふのか、其處をもつと突き留めて見たかつた。

「嫂さんが死ぬなんて事を云ひ出したのは今夜始めてですね」

「え、口へ出したのは今夜が初めてかも知れなくつてよ。けれども死ぬ事は、死ぬ事丈は何うしたつて心の中で忘れた日はありやしないわ。だから嘘だと思ふな、和歌の浦迄伴れて行つて頂戴。屹度浪の中へ飛び込んで死んで見せるから」

薄暗い行燈の下で、暴風雨の音の間に此言葉を聞いた自分は、實際物凄かつた。彼女は平生から落ち附いた女であつた。歇斯的里風な所は殆どなかつた。けれども寡言な彼女の頬は常に蒼かつた。さうして何處かの調子で眼の中に意味の強い解すべからざる光が出た。

「嫂さんは今夜餘つ程何うかしてゐる。何か昂奮してゐる事でもあるんですか」

自分は彼女の涙を見る事は出来なかつた。又彼女の泣き聲を聞く事も出来なかつた。けれども今にも其處に至りさうな気がするので、暗い行燈の光を便りに、蚊帳の中を覗いて見た。彼女は赤い蒲團を二枚重ねて其上に縁を取つた白麻の掛蒲團を胸の所迄行儀よく掛けてゐた。自分が暗い灯で其姿を覗き込んだ時、彼女は枕を動かして自分の方を見た。

「あなた昂奮昂奮つて、よく仰しやるけれども妾や貴方よりいくら落ち附いてるか解りやしないわ。何時でも覺悟が出来てるんですもの」

自分は何と答ふべき言葉も持たなかつた。黙つて二本目の敷島を暗い灯影で吸ひ出した。自分はわが鼻と口から濛々と出る煙ばかりを眺めてゐた。自分は其間に氣味のわるい眼を轉じて、時々蚊帳の中を窺つた。嫂の姿は死んだ様に静かであつた。或は既に寐附いたのではないかとも思はれた。すると突然仰向けになつた顔の中から、「二郎さん」と云ふ聲が聞こえた。

「何ですか」と自分は答へた。

「貴方其處で何をして入らつしやるの」

「煙草を呑んでるんです。寐られないから」

「早く御休みなさいよ。寐られないと毒だから」

「ええ、」

自分は蚊帳の裾を捲くつて、自分の床の中に這入つた。

三十九

翌日は昨日と打つて變つて美しい空を朝まだきから仰ぐ事を得た。

「好い天氣になりましたね」と自分は嫂に向つて云つた。

「本當ね」と彼女も答へた。

二人はよく寐なかつたから、夢から覺めたといふ心持はしなかつた。たゞ床を離れるや否や魔から覺めたといふ感じがした程、空は蒼く染められてゐた。

自分は朝飯の膳に向ひながら、廂を洩れる明らかな光を見て、急に氣分の變化に心附いた。従つて向ひ合つてゐる嫂の姿が昨夕の嫂とは全く異なるやうな心持もした。今朝見ると彼女の眼に何處といつて浪漫的な光は射してゐなかつた。たゞ寐の足りない睨が急に爽やかな光に照らされて、それに抵抗するのが如何にも憚いと云つたやうな一種の倦怠さが見えた。頬の蒼白いのも常に變らなかつた。

我々は出来る文早く朝飯を済まして宿を立つた。電車はまだ通じないだらうといふ宿のものの注意を信用して俵を雇つた。車夫は土間から表に出た我々を一目見て、すぐ夫婦ものと鑑定したらしかつた。俵に乗るや否や自分の梶棒を先へ上げた。自分はそれを留める様に「後から後から」と云つた。車夫は心得て

「奥さんの方が先だ」と相圖した。嫂の俾が自分の傍を擦り抜ける時、彼女は例の片鱗を見せて「御先へ」と挨拶した。自分は「さあ何うぞ」と云つたやうなもの、腹の中では車夫の口にした奥さんといふ言葉が大いに氣になつた。嫂はそんな氣色もなく、自分を乗り越すや否や、琥珀に刺繡のある日傘を翳した。彼女の後姿は如何にも涼しさうに見えた。奥さんと云はれても云はれないでも全く無關係の態度で、俾の上澄まして乗つてゐるとしか思はれなかつた。

自分は嫂の後姿を見詰めたが、又彼女のひととなりと思ひ及んだ。自分は平生こそ嫂の性質を幾分かしつかり手に握つてゐる積りであつたが、いざ本式に彼女の口から本當の所を聞いて見ようとすると、丸で八幡の藪知らずへ這入つた様に、凡てが解らなくなつた。

凡ての女は、男から觀察しようとする、みんな正體の知れない嫂の如きものに歸着するのではあるまいか。經驗に乏しい自分は斯うも考へて見た。又其正體の知れない所が即ち他の婦人に見出だしたい。嫂の特色であるやうにも考へて見た。兎に角嫂の正體は全く解らないうちに、空が蒼々と晴れて仕舞つた。自分は氣の抜けた麥酒の様な心持を抱いて、先へ行く彼女の後姿を絶えず眺めてゐた。

突然自分は宿へ歸つてから嫂について兄に報告をする義務がまだ残つてゐる事に氣が附いた。自分は何と報告して好いかよく解らなかつた。云ふべき言葉は澤山あつたけれども、夫を一々兄の前に並べるのは到底自分の勇氣では出来なかつた。よし並べたつて最後の一句は正體が知れないといふ簡単な事實に歸する丈であつた。或は兄自身も自分と同じく、此正體を見届けようと煩悶し抜いた結果、斯んな事になつたのではなからうか。自分は自分が若し兄と同じ運命に遭遇したら、或は兄以上に神經を惱ましはしまいかと思つて、始めて恐ろしい心持がした。

俾が宿へ着いたとき、三階の縁側には母の影も兄の姿も見えなかつた。

四十

兄は三階の日に遠い室で例の黒い光澤のある頭を枕に着けて仰向きになつてゐた。けれども眠つてはゐなかつた。寧ろ充血した眼を見張るやうに緊張して天井を見詰めてゐた。彼は自分達の足音を聞くや否や、いきなり其血走つた眼を自分と嫂に注いだ。自分は兼てから其眼附を豫想し得なかつた程兄を知らない譯でもなかつた。けれども室の入口で嫂と相並んで立ちながら、昨夕まんじりともしなかつたと自白して居るやうな彼の赤くて鋭い眼附を見た時は、少し驚かされた。自分は斯ういふ場合の緩和劑として例の通り母を求めた。其母は座敷の中にも縁側にも何處にも見當たらなかつた。

自分が彼女を探してゐるうちに嫂は兄の枕元に坐つて挨拶をした。

「只今」

兄は何とも答へなかつた。嫂は又坐つたなり其處を動かなかつた。自分は勢ひとして口を開くべく餘儀

なくされた。

「昨夕此方は大變な暴風雨でしたつてね」

「うん随分非道い風だった」

「波がああ石の土手を越して松並木から下へ流れ込んだの」

是は嫂の言葉であつた。兄はしばらく彼女の顔を眺めてゐた。それから徐ろに答へた。

「いや左右でもない。家に故障はなかつた筈だ」

「ぢや。無理に歸れば歸れたのね」

嫂は斯う云つて自分を顧た。自分は彼女よりも寧ろ兄の方に向いた。

「いや到底歸れなかつたんです。電車がだいち通じないんですもの」

「左右かも知れない。昨日は夕方あたりからあの波が非常に高く見えたから」

「夜中に宅が揺れやしくつて」

是も嫂の兄に聞いた問であつた。今度は兄がすぐ答へた。

「揺れた。御母さんは危険だからと云つて下へ降りて行かれた位揺れた」

「自分は兄の眼色の險惡な割合に、夫程殺氣を帯びてゐない彼の言語動作を漸々確め得た時やつと安心した。彼は自分の性急に比べると約五倍がたの癩癩持ちであつた。けれども一種天賦の能力があつて、時に

其癩癩を巧みに殺す事が出来た。

其内に明神様へ御参りに行つた母が歸つて來た。彼女は自分の顔を見て漸く安心したといふやうな色をして呉れた。

「よく早く歸れて好かつたね。——まあ昨夕の恐ろしさつたら、夫や御話しにも何にもならないんだよ、

二郎。此柱がぎいゝつて鳴るたんびに、座敷が右左に動くんだらう。そこへ持つて來て、あの浪の音が

ね。——わたしや今聞いても本當に慄とするよ……」

母は昨夕の暴風雨を非道く怖がつた。殊に其聯想から出る、防波堤を碎きにかゝる浪の音を嫌つた。

「もう、和歌の浦も御免。海も御免。慾も得も要らないから、早く東京へ歸りたいよ」

母は斯う云つて眉をひそめた。兄は肉のない頬へ皺を寄せて苦笑した。

「二郎達は昨夕何處へ泊つたんだい」と聞いた。

自分は和歌山の宿の名を擧げて答へた。

「好い宿かい」

「何だか彼だか、たゞ暗くつて陰氣な丈です。ねえ嫂さん」

其時兄は走るやうな眼を嫂に轉じた。

嫂はたゞ自分の顔を見て「丸で御化でも出さうな宅ね」と云つた。

日の夕暮に自分は嫂と階段の下で出逢つた。其時自分は彼女に「何うです、兄さんは怒つてゐるんでせうか」と聞いて見た。嫂は「何うだか腹の中は一寸解らないわ」と淋しく笑ひながら上へ昇つて行つた。

四十一

母が暴風雨に怖氣が附いて、早く立たうと云ふのを機に、みんな此處を切り上げて一刻も早く歸る事にした。

「如何な名所でも一日二日は好いが、長くなると詰らないですね」と兄は母に同意してゐた。

母は自分を小蔭へ呼んで、「二郎御前何うする積りだい」と聞いた。自分は自分の留守中に兄が萬事を母に打ち明けたのかと思つた。然し兄の平生から察すると、そんな行き抜けの人と成りでもなささうであつた。

「兄さんは昨夕僕等が歸らないんで、機嫌でも悪くしてゐるんですか」

自分が斯う質問を掛けた時、母は少しの間黙つてゐた。

「昨夕はね、知つての通りの浪や風だから、そんな話しをする閑も無かつたけれども……」

母は何うしても其處迄しか云はなかつた。

「御母さんは何だか僕と嫂さんの仲を疑つていらつしやる様だが……」と云ひ掛けると、今迄自分の眼を凝と見てゐた母は急に手を振つて自分を遮つた。

「そんな事があるものかね御前、御母さんに限つて」

母の言葉は實際判然した言葉に違ひなかつた。顔附も眼附もきびくしてゐた。けれども彼女の腹の中は到底讀めなかつた。自分は親身の子として、時たま本當の父や母に向ひながら、嘘と知りつゝ、眞顔で何か云ひ聞かされる事を覺えて以來、世の中で本式の本當を云ひ續けに云ふものは一人もないと諦めてゐた。

「兄さんには僕から萬事話す事になつてゐます。さう云ふ約束になつてゐるんだから、御母さんが心配なさる必要はありません。安心して入らつしやい」

「ぢや成るべく早く片附けた方が好いよ二郎」

自分達は其明くる宵の急行で東京へ歸る事に極めてゐた。實はまだ大阪を中心として、見物かたがた歩くべき場所は澤山あつたけれども、母の氣が進まず、兄の興味が乗らず、大阪で中繼ぎをする時間さへ惜しんで、すぐ東京迄寢臺で通さうと云ふのが母と兄の主張であつた。

自分達は是非共翌日の朝の汽車で和歌山から大阪へ向けて立たなければならなかつた。自分は母の命令で岡田の宅迄電報を打つた。

「佐野さんへは掛ける必要もないでせう」と云ひながら自分は母と兄の顔を眺めた。

「あるまい」と兄が答へた。

東野市
第一車庫
本所
白上
校

「岡田へさへ打つて置けば、佐野さんは打つちやつて置いても屹度送りに来て呉れるよ」

自分は電報紙を持ちながら、是非共お貞さんを貰ひたいといふ佐野の御凸額と其金縁眼鏡を思ひ出した。

「では彼の御凸額さんは止めて置かう」

自分は斯う云つて、みんなを笑はせた。自分が疾うから佐野の御凸額を氣にしてゐた如く、外のものも同じ人の同じ特色を注意してゐたらしかつた。

「寫真で見たより御凸額ね」と嫂は眞面目な顔で云つた。

自分は冗談のうちに自分を紛らしつゝ、何んな折を利用して嫂の事を兄に復命したものだらうかと考へてゐた。それで時々偷むやうに又先方の氣の附かない様に兄の様子を見た。所が兄は自分の豫期に反して、全くそれには無頓着の様に思はれた。

四十二

自分が兄から別室に呼び出されたのは夫が濟んで少時してであつた。其時兄は常に變らない様子をして、(嫂に評させると常に變らない様子を装つて)「二郎一寸話がある。彼方の室へ来て呉れ」と穏やかに云つた。自分は大人しく「はい」と答へて立つた。然し何うした機か立つときに嫂の顔を一寸見た。其時は何の氣も附かなかつたが、此平凡な所作が其後自分の胸には絶えず驕慢の發現として響いた。嫂は自分

と顔を合はせた時、いつもの通り片脛を見せて笑つた。自分と嫂の眼を他から見たら、何處かに得意の光を帯びてゐたのではあるまいか。自分は立ちながら、次の室で浴衣を疊んでゐた母の方を一寸顧て、思はず立ち竦んだ。母の眼附は先刻からたつた一人でそつと我々を觀察してゐたとしか見えなかつた。自分は母から疑惑の矢を胸に射附けられたやうな氣分で兄の居る室へ這入つた。

其頃は丁度舊曆の盆で、所謂盆波の荒いためか、泊り客は無論、日返りの遊び客さへ何時も程は影を見せなかつた。廣い三階建は従つて空いてゐる室の方が多かつた。少しの間融通しようと思へば、何時でも自分の自由になつた。

兄は兼てから下女に命じて置いたものと見えて、室には麻の蒲團が差し向ひに二枚、華奢な煙草盆を間に、團扇さへ添へて据ゑられてあつた。自分は兄の前に坐つた。けれども何と云ひ出して然るべきだが、其手加減が一寸解らないので、たゞ黙つてゐた。兄も容易に口を開かなかつた。然しこんな場合になると性質上屹度兄の方から積極的になるに違ひないと踏んだ自分は、わざと巻藁を吹かしつゝけた。

自分は此時の自分の心理状態を解剖して、今から顧ると、兄に調戲ふといふ程でもないが、多少彼を焦らす氣味でゐたのは慥かであると自白せざるを得ない。尤も自分が何故それ程兄に對して大膽になり得たかは、我ながら解らない。恐らく嫂の態度が知らぬ間に自分に乗り移つてゐたものだらう。自分は今になつて、取り返す事も償ふ事も出来ない此態度を深く懺悔したいと思ふ。

自分が卷蕘を吹かして黙つてゐると兄は果して「二郎」と呼びかけた。

「御前直の性質が解つたかい」

「解りません」

自分は兄の問の餘りに嚴格なため、つい斯う簡単に答へて仕舞つた。さうして其のあまりに形式的な
に後から氣が附いて、悪かつたと思ひ返したが、もう及ばなかつた。

兄は其後一口も聞きもせず、又答へもしなかつた。二人斯うして黙つてゐる間が、自分には非常な苦痛
であつた。今考へると兄には、猶更の苦痛であつたに違ひない。

「二郎、おれは御前の兄として、たゞ解りませんといふ冷淡な挨拶を受けようとは思はなかつた」

兄は斯う云つた。さうして其聲は低くかつ顫へてゐた。彼は母の手前、宿の手前、又自分の手前と問題
の手前とを兼ねて、高くなるべき筈の咽喉を、やつとの思ひで抑へてゐるやうに見えた。

「御前そんな冷淡な挨拶を一口したぎりで済むものと、高を括つてるのか、子供ぢやあるまいし」

「いえ決して其んなわけぢやありません」

是丈の返事をした時の自分は眞に純良なる弟であつた。

四十三

「さう云ふ積りでなければ、積りでない様にもつと詳しく話したら好いぢやないか」

兄は苦り切つて團扇の繪を見詰めてゐた。自分は兄に顔を見られないのを幸ひに、暗に彼の様子を窺つ
た。自分から斯ういふと兄を輕蔑するやうで甚だ濟まないが、彼の表情の何處かには、といふよりも、彼

の態度の何處かには、少し大人氣を缺いた稚氣さへ現はれてゐた。今の自分は此純粹な一本調子に對して、
相應の尊敬を拂ふ見地を具へてゐる積りである。けれども人格の出來てゐなかつた當時の自分には、たゞ

向うの隙を見て事をするのが賢いのだといふ利害の念が、斯んな問題に迄附け纏はつてゐた。
自分はしばらく兄の様子を見てゐた。さうして是は與し易いといふ心が起つた。彼は癩癩を起してゐる。

彼は焦れ切つてゐる。彼はわざとそれを抑へようとしてゐる。全く餘裕のない程緊張してゐる。然し風船
球の様に軽く緊張してゐる。もう少し待つてゐれば自分の力で破裂するか、又は自分の力で何處かへ飛ん

で行くに相違ない。——自分は斯う觀察した。
嫂が兄の手に合はないのも全く此處に根ざしてゐるのだと自分は此時漸く勘附いた。又嫂として存在

するには、彼女の遣り口が一番巧妙なんだらうとも考へた。自分は今日迄たゞ兄の正面ばかり見て、遠慮
したり氣兼ねしたり、時によつては恐れ入つたりしてゐた。然し昨日一日一晚嫂と暮らした經驗は圖ら

ずも此苦々しい兄を裏から甘く見る結果になつて眼前に現はれて來た。自分は何時嫂から兄を斯う見ろ
と教はつた覚えはなかつた。けれども兄の前へ出て、是程度胸の据わつた事も亦なかつた。自分は比較的

濟まして、團扇を見詰めてる兄の額のあたりを此方でも見詰めてるた。
すると兄が急に首を上げた。

「二郎何とか云はないか」と勵しい言葉を自分の鼓膜に射込んだ。自分は其聲で又はつと平生の自分に返つた。

「今云はうと思つてる所です。然し事が複雑な丈に、何から話して好いか解らないんで一寸困つてゐるんです。兄さんも外の事たあ違ふんだから、最う少し打ち解けて緩り聞いて下さらなくつちや。さう裁判所みたやうに生真面目に叱り附けられちや、折角咽喉迄出掛かつたものも、辟易して引つ込んぢまひますから」

あはれ

自分が斯う云ふと、兄は流石に一見識ある人丈あつて、「あ、左右か己が悪かつた。御前が性急の上へ持つて来て、己が癩癩持ちと來てるから、つい變にもなるんだらう。二郎、それぢや何時緩り話される。緩り聞く事なら今でも己には出来る積りだが」と云つた。

「まあ東京へ歸る迄待つて下さい。東京へ歸るたつて、あすの晩の急行だから、もう直きです。其上で落ち附いて僕の考へも申し上げたいと思つてますから」

「夫でも好い」

兄は落ち附いて答へた。今迄の彼の癩癩を自分の信用で吹き拂ひ得た如くに。

「では何うか、左右願ひます」と云つて自分が立ち掛けた時、兄は「あ、」と背いて見せたが、自分が敷居を跨ぐ拍子に「おい二郎」と又呼び戻した。

「詳しい事は追つて東京で聞くとして、唯一言だけ要領を聞いて置かうか」

「嫂さんに就いて……」

「無論」

「嫂さんの人格に就いて、御疑ひになる所は丸であります」

自分が斯う云つた時、兄は急に色を變へた。けれども何も云はなかつた。自分はそれぎり席を立つて仕舞つた。

四十四

自分は其時場合によれば、兄から拳骨を食ふか、又は後から熱罵を浴びせ掛けられる事と豫期してゐた。色を變へた彼を後に見捨てて、自分の席を立つた位だから、自分は普通より餘程彼を見縊つてゐたに違ひなかつた。其上自分はいざとなれば腕力に訴へても嫂を辯護する氣概を十分具へてゐた。是は嫂が潔白だからといふよりも嫂に新たなる同情が加はつたからと云ふ方が適切かも知れなかつた。云ひ換へると、自分は兄を夫丈輕蔑し始めたのである。席を立つ時などは多少彼に對する敵愾心さへ起つた。

此の小説の主人公は室に居る女を身分である
教に流るのドロット
一九四

自分が室へ歸つて来た時、母はもう浴衣を疊んであるなかつた。けれども小さい行李の始末に餘念なく手を動かしてゐた。それでも心は手許になかつたと見えて、自分の足音を聞かぬや否や、すぐ此方に向いた。

「兄さんは」

「今來るでせう」

「もう話しは済んだの」

「済むの済まないのつて、始めからそんな大した話しぢやないんです」

自分は母の氣を休めるため、わざと蒼蠅さうに斯う云つた。母は又行李の中へ、こまかくしたものを出した。入れたりし始めた。自分は今度は彼女に恥ぢて、決して傍に手傳つてゐる嫂の顔を敢て見なかつた。それでも彼女の若くて淋しい唇には冷やかな笑の影が、自分の眼を掠めるやうに過ぎた。

「今から荷造りですか。ちつと早過ぎるな」と自分はわざと年を取つた母を嘲る如く注意した。

「だつて立つとなれば、成るだけ早く用意して置いた方が都合が好いからね」

「左右ですとも」

嫂の此返事は、自分が何か云はうとする先を越して聲に應ずる響の如く出た。

「ぢや繩でも絡ませせう。男の役だから」

自分が繩を十文字に掛け始めると、嫂はすぐ立つて兄の居る室の方に行つた。自分は思はず其後姿を見送つた。

「二郎、兄さんの機嫌は何うだつたい」と母がわざ／＼小さな聲で自分に聞いた。

「別に是と云ふ事ありません。なあに心配なさる事があるもんですか。大丈夫です」と自分は殊更に

荒つぽく云つて、右足で行李の蓋をぎ／＼締めた。

「實は御前にも話したい事があるんだが。東京へでも歸つたら何れ又緩りね」

「え、緩り伺ひませう」

自分は斯う無造作に答へながら、腹の中では母の所謂話なるものの内容を臆氣ながら髣髴した。

少時すると、兄と嫂が別席から出て來た。自分は平氣を粧ひながら母と話してゐる間にも、兩人の會見と其會見の結果に就いて多少氣掛りな所があつた。母は二人の並んで來る様子を見て、やつと安心した風を見せた。自分にも何處かにそんな所があつた。

自分は行李を絡げる努力で、顔やら背中やらから汗が澤山出た。腕捲りをした上、浴衣の袖で汗を容赦なく拭いた。

「おい暑さうだ。少し扇いで遣るが好い」

兄は斯う云つて嫂を顧みた。嫂は靜かに立つて自分を扇いで呉れた。